
コードギアス BLUE OF THE KNIGHT

ライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス BLUE OF THE KNIGHT

【Nコード】

N4055R

【作者名】

ライ

【あらすじ】

守りたい…

その願いはこの世界の中で儚く揺れる…

愛する人や友達、全ての人間を巻き込んで…

あまりにも当たり前なこと…

それがなによりも幸せだと知っているから…

エリア11―ブリタニアの中の日本…

ここで少年は立ち上がる。

大人になりきりたい少年と少女の葛藤を…、人間の心を巻き込んで
…、運命が動き出す…

MEMO1-0 目覚める騎士（前書き）

投稿します。

オリジナルキャラやストーリーとなりますので、温かい目で見守ってください（汗）。

MEMOLY-0 目覚める騎士

パツと正面からライトが当てられる。

周りに何人かの人間が動き回っているのだろう、目を閉じていても影で目の前を 通っていることが分かる。

「将軍。コード-R2は明朝から最後の人体実験に移行しますか？」

「うむ。そうしよう。それが終わればこやつは忠実なる殿下の駒となる。明日までもとの独房に放り込んでおけ！」

「はっ！了解しましたバトラー将軍！」

目を開けて前を見ると白衣を着た男が立ち去っていく男に敬礼をしている。

「よし！こいつは独房へ連れていけ。明日の人格操作実験の準備を始めるぞ。」

拘束具が外され、椅子から立たされた。

研究者の指示に従いゆつくりと暗い廊下に足を踏み出す。

ふと左側に緑髪の少女がいることに気付いた。

しかし、もう関係はない。

明日になれば自分は自分でなくなるのだから…。

独房に押し込められると辺りを静寂が襲った。

もう自分の意志で考えることも話すこともなくなる。

もともと記憶はなく知り合いもないことを考えるとそれでもいいかと思えてくる。

どうしようもないという諦めからかそれとも実験の疲れからか、目を閉じるとすぐに眠りへと落ちていった。

「…い…。おい…。おい！」

突然肩を揺すられて起こされた。

とうとう終わるのかと思いつながら起きあがると、そこにいたのは白衣を着た研究者でもバトラーという将軍でもなかった。

「大丈夫か？ 今、ここから助けてやるから俺に着いてきてくれ。」

「えっと…あなたは誰？」

男はドアから外を伺いながらも意識をこちらに向ける。

「ははっ。当然の疑問だよな。」

男は笑いながら話を続けた。

「俺は紅月ナオト。よろしくな。」

「なあ。ナオトさん？ 何で俺を助けるんだ？」

「君は望みもしない人体実験をさせられているんだろ？ それだけでも助ける理由には十分だ。」

ナオトは部屋の外に出て、手招きをしてくる。

「おい！ 今だ、逃げるぞ。」

俺はその言葉に従って部屋を出た。

「ナオトさんどうやってここから逃げるんだ？」

「君はナイトメアの操縦ができるはずだ。ナイトメアを奪って逃げる。」

俺たちは陰に隠れつつゆっくりと格納庫に近づいていった。

「俺には妹がいるんだ。」

ナオトさんが突然話し始めた。

「君と同じくらいの歳でな、めっちゃくちゃ美人なんだ。」

「ナオトさん、何で今そんな話をするんですか？」

彼は少し考えるそぶりを見せたがすぐに

「分からない。」

と答えた。

そのまま順調にいていた。

しかし、突然警告灯がけたたましいアラーム音とともに回転し始めた。

『全職員に警告！全職員に警告！コードーR2が逃走した。警備兵は捕獲を優先に探索。もし抵抗するなら射殺許可が下りている撃ち殺せ！繰り返し、全職員に…』

「参ったな、君を連れ出したのがバレたみたいだな。」

「どうします？」

「んー、まあ、仕方がない。」

そう言うとナオトさんは俺の腕を掴んだ。

「走るぞ！トーヤ君！」

「へっ？わっ、ちよっ…！」

俺たちは一気に格納庫まで走り抜けた。

「ハアハア。トーヤ君、そのナイトメアに乗って。」

「分かりました。」

目の前には蒼と銀で装飾されたKMFが立っていた。

「誰も乗りこなせないが故に存在を消された幻のナイトメアフレーム“ブルールナ”か…」

その機体を見ると頭の中にそのナイトメアについての知識が浮かんできた。だが、気にしている場合じゃない。

「トーヤ君、システムを起動して、こっちから騎乗データを送る。」

「はい。」

手元のキーボードを叩く。

見たことはないのにスムーズに手が動いていった。

『おい！侵入者がこっちにいるぞ！』

兵士の足音がだんだんと近づいてくる。

「ナオトさん！こっちに乗ってください！追いつかれます！」

「トーヤ君、それは無理のようだ。」

「何言ってるんですか！早くしてください。」

それでもナオトは目の前のモニターから目を離さない。

「データ起動まで時間がかかる。今そちらに行っても捕まるだけだよ。」

ナオトが兵士たちの足音がする方へ体を向けた。

「ナオトさん、何するんですか！？」

「俺が時間を稼ぐよ。君は起動したらすぐに逃げろ。」

ナオトは懷から拳銃を取り出す。

「（駄目だ。ナオトさんは死ぬ気だ。）ナオトさんあなたは俺の命の恩人です！置いて逃げるなんてできません！」

そう叫んだ瞬間、兵士たちが部屋に入ってきた。

「いたぞ。奴らだ！捕獲しろ！」

兵士たちがこちらに向かおうとする。

「ぐあっ」

ひとりの兵士が銃弾を受けて倒れた。

物陰に隠れていたナオトが半身を出して兵士たちを銃撃していた。

「トーヤ君、君だけでも生きるんだ！逃げろ！」

ナオトは銃撃を続ける。だが、兵士たちの数は多い。ゆつくりと彼は追い詰められていく。

そして…、その瞬間は訪れた…。

敵を銃撃しようと物陰から身を乗り出した瞬間、ナオトの左胸を銃弾が貫いた。

傷口がゆつくりと朱に染まっていく…。

そして彼の体はゆっくりとうつぶせに倒れた。

「ナオト……さん？」

ナオトは動かない。銃撃を止めた兵士たちはこちらに向かってくる。

「なんで…、俺なんかのために…？」

ナオトの言葉が頭をよぎる。

（苦しんでいる人がいる、助ける理由はそれだけで十分だ）

「なんで……？ ナオトさんが……？」

（めちやくちや美人の妹がいるんだ。）

「ナオト…さん…。うあああああああああ！……！！！！！！！！！！」

頭の中が熱い。でも、どうだっていい。

これが怒りというのか俺には分からない。ただ、許せない。許すわけにはいかない。

心の奥にスイッチが入る。

封じ込めていたはずの……王の力……。

俺は機体の上に立ち上がる。

「（こいつらを赦すわけにはいかない！）」

左目が妙に熱を帯びていく。

「よく聞け！ 貴様らあ！ トーヤが命じる！」

もう一度心のスイッチを確認する。

「貴様らは！」

ゆつくりと左目を開く。

「全員、」

左目が赤く染まる。

「ここで死ねえ……！！！！！！！！！！」

近づいてくる兵士たちの動きが止まる。

[illegible]

兵士たちは一斉に自分の頭に銃を突きつけた。

そして、一斉に引き金を引いた。

「ハアハア。
(ナオトさんは?) ナオトさん!」

俺は動かなくなった兵士たちを横目にナオトに駆け寄った。

「ナオトさん！」

肩を揺るとナオトは目を開けた。

「トーヤ…君。」

「ナオトさん！よかった、早く逃げましょう。」

生きていた。それだけで俺の目頭が熱くなっていた。

「俺は……ダメだ。早く……逃げてくれ……」

ナオトの傷口に目をやる。血は止まることなく流れ出していて、辺りに血の水たまりを作っていた。

「諦めないでください…。一緒に逃げましょう…」

「ははっ…。泣かないでくれよ…。会ったばかりの俺が死ぬくらいで…」

俺は気づけばポロポロと涙を流していた。

「それでも……それでもあなたは……俺の特別な人です……。今まで……誰も……助けてくれなかった。だから……」

ナオトは手でそれ以上の言葉を制した。

「トーヤ君…。じゃあ、俺の…最後の願い…聞いてくれ…。」
俺はしっかりと頷く。それを確認してナオトはまた話し始める。

「さっき…妹がいるって話…したよな？」

もう一度ゆっくり頷く。

「それがすぐくまっすぐなやつでな…仲間のために…自分を犠牲にするような妹なんだ…」

「あなたに…似てるじゃないですか…」

精一杯の笑顔で冗談を言う。でも、すぐにまた涙があふれ出てきた。
「だから…さ。護ってやってほしいんだ…。ほっといたら…何やらかすか分からなくてな…」

ナオトは笑おうとしている。

ナオトは俺に託そうとしている。自分の大切なものを…。

「ナオトさん…、安心してください…必ず…必ず俺が、守り抜いて見せます…あなたの大切なものを…」

「そーだ…。トーヤって名前…いいだろ？」

名前もない俺をナオトはそう呼んでいた。

「なんですか…？それ…？」

「君の名前…さ。トーヤ…リカルド…君に…名前をあげるよ…。」

「ナオトさん…」

涙がまた溢れだしてくる。

「（名前のない俺に…名前…？ナオト…さん…）ナオトさん…その名前、大切にさせていただきます。」

ナオトは顔を上げる。

「ああ…、これで…思い残すことはない…よ。トーヤ…君、君は…君の…未来を生きて…くれ。」

ナオトの体が糸の切れた人形のようにだらんとなる。

「ナオトさん！…ナオト…さん…。」

俺は涙を拭った。

「俺は必ず…必ず、あなたの妹を守り抜いて見せます。あなたが命

をかけて助けてくれただけの人間になってみせます！」
すでに起動していた機体に乗り込む。
手のひらにナオトを乗せて研究所を後にした。

―翌日―

「（クソッ、どこに行けばいいんだ！？）」

俺は今巨大な山の麓にいる。

途方に暮れ、どうしようもなくなっていた。

「いったいどこに向かえば…。うっ…！」

突然の頭痛に頭を抱える。

「（マズい…意識が…）」

痛みが治まることはなく、どんどん強くなる。

俺はその場で意識を失った。

「（うっ、ここは…？）」

目を開けると部屋の中にいた。

窓からは整然と立ち並ぶビルの周りにはるかに続く廃墟の群れがあった。

「醜かろう。」

背後から声をかけられた。

「あたなは…？」

そこには脇にSPを従えた杖をついている老人がいた。

「私は桐原という者だ。見よ、その景色を…まるで我ら日本人のようではないか。」景色に目を向ける。山肌の半分がサクラダイト採掘のプラントで覆われていた。

「そうですね…。ブリタニアは最低だ。」

外の景色を見ていると胸の中が熱くなってくる。理由は分からない。
「そういえば、お主の連れてきた紅月ナオト…。」

「（そうだ！ナオトさん。）ナオトさん…、ナオトさんはどこですか！？」

「この山の麓に埋葬した。彼は勇敢な人物だった。お主を助けるために単身敵の真っ只中へ飛び込んだのだからな…。」

ナオトは死んだ…。それだけで窓の外空は灰色に染まった気がした。

「ナオトさんは、俺の恩人です。」

「トーヤよ。その恩人は誰に殺された？」

「（分かりきっている、ブリタニアだ。）桐原公、ナオトさんの妹はどこにいますか？」

桐原公は俺の質問の意図が分からないようだ。

「ナオトさんの死に際に頼まれたんだ…。妹を守ってほしいと…。」
「分かった、教えよう。窓の外に街が見えるだろう？あのどこかに彼女はいる。」

「名前は…分かりますか？」

「確か、紅月カレンといったはずだ。」

「ありがとうございます。」

一礼して部屋を出ようとする。

「待つのだ。何処へ行く？」

「格納庫です。俺の機体を取りに行きます。」

「まあ待て。あの機体は修理に出している。今は使えんぞ。」

「桐原公。では、違う機体を貸していただけますか？」

桐原公の目を見る。

「何をする気だ？」

「ナオトさんを殺した奴らを…ブリタニアを…ぶっ壊す！」

「ククッ…ハッハッハッハ！！！！貴公は面白い人物だな。ブリタニアをぶっ壊す…か。…いいだろう！貴公に無頼改を貸し与える！整備が終わり次第、トーキョー租界に向かうがいい！」

そう言うと桐原公は部屋を出て行った。

「（俺が必ずブリタニアをぶっ壊す…、そして…紅月カレンを守っ

てみせる!!」

俺は決意を胸に単身トーキョー租界へと向かった。

MEMOLOGY 13 世界の色（前書き）

第二話です。

楽しんでいただければ幸いです。

感想、意見してくださるとうれしいです。

ああ、文章力がほしい…

そう思える…。

というわけで本文へどうぞ。

MEMOLY-0. 13 世界の色

桐原公のもとを出て一週間。未だに紅月カレンという女性は見つからなかった。

「(なかなか見つからないものだな。)」

そう思いながらも、ゲットーで探索を続けていた。

このゲットーには日本人が居住している。彼らに話を聞くこともあるのだが、紅月という名前を出すと誰もが、警戒して何も教えてくれなかった。

「(今日も収穫はなしだな。)」

そう思い、隠れ家に戻ろうとすると目の前に青いKMF：サザーランドが2機立ちふさがった。

「その機体、止まれ！無頼に騎乗している所を見るとイレブンのレジスタンスだな。抵抗しなければ殺しはしない、投降せよ！」

拡声器を通して若い男の声が聞こえてきた。

背後にもどうやらまわられたようだ。

「(4対1か…。だが、俺の敵ではない。)」

この状況を打開するため俺は一気にペダルを踏み込んだ。一瞬でサザーランドの前に移動する。

「なっ…！」

慌てて回避しようとするパイロット。しかし…！

「遅い！」

俺は廻転刃刀かいてんやいばとうを抜き、目の前の機体を真っ二つに斬り倒す！
少ししてその機体は爆散する。

「くっ！このイレブンごときが！」

横にいたサザーランドが発砲してくる。

それを最小限の動きで回避し肉迫する！

サザーランドの腹部に廻転刃刀かいてんやいばとうを突き立てる。

その機体も少しすると爆散した。

「（残り二機）」

背後にいた二機もライフルの射程範囲に入ったようで射撃を開始した。

俺は無頼改を半分倒壊したビルの影に移動させ、ビルの壁にスラッシュハーケンを打ち込み一気に巻き上げた。

一瞬で敵の上をとり、ライフルを構え発砲した。

「クソッ、イレブンなんか…。」

悔しさを滲ませる声と共にコックピットが射出される。

「排除完了。」

ここ一週間はずっとこんな様子だ。

ゲッターに聞き込みに出ては軍と戦闘する。

カレンを捜す時間を削られてもつたいない。

隠れ家につき、今まで乗っていた機体を見上げる。

蒼でカラーリングされ、腰には新兵器の廻かいてんやいばとう転刃刀が装備されている。ブリタニアの第四世代機グラスゴアの改造らしいが、無頼改というだけあって出力は大きく向上されているのだろう。

「トーヤさん、この荷物はここでいいですか？」

「ああ、ありがとう。」

桐原公は部下二人と隠れ家を用意してくれた。物資も送ってくれるためすごく助かっている。

「そーだ。トーヤ君、君が依頼していたものが届いているよ。」

もう1人の部下が白い包みを差し出してくる。それを受け取り、中身を広げる。

「なんですか？その仮面。」

「ん？ああ、これは俺が正体を隠すためにかぶるんだ。」

さらに広げると蒼いマントが姿を現した。

「一応、これで準備は整った。なあ、水野さん。」

「ん？なんだい？」

「俺はこれから租界に行って情報を集めてくる。二人はゲットーで情報を集めてくれ。」

「了解。確か紅月カレンって子は租界で生活している可能性があるんだったね。」

「ああ、河井さんも頼むよ。」

「ええ、行ってきたください。」

「うん。じゃあ、また。」

2人に別れを告げて部屋を出た。

トーキョー租界―

「(さて、まずは検問を突破しないと)」

目の前に数人の兵士たちが守る検問所がある。

二人が車の運転手のID照合をし、事務所の窓からは受付の兵士が1人いるのが見えた。

俺は検問所の左側にある橋の土台に登った。身をかがめ、気づかないようにゆっくり進む。

どうやら気付かれなかったようだ…。

「さて、どうするか。」

租界の中に入ったものの、どこに行けばいいかなんて思いつかなかった。

「(適当に歩いてみるか。)」

右も左も分からないまま俺はあるきだす。

そして、案の定迷った。

「(まいったな、ここはどこだ?)」

目の前には学校らしき建物があった。

「アッシュフォード：学園：か。(そういえばナオトさんは確か妹は俺と同じくらいの歳だと言っていたな……。可能性は低いが中に入ってみよう。)」

俺は校門から堂々と中に入る。警備員などはいないようだ。

「(さて、どっちに行こうか。)」

正面には校舎らしい建物があった。しかし、中にはまだ多くの生徒がいるようだった。

「(ここは無理だな。あっちに行ってみよう。)」

右に曲がり小川の流れる方を目指す。

その周辺を見渡してみたがやはり警備員を含め、人は見当たらない。

「(あの建物に入ってみよう)」

俺は近くの草むらに近づき身を隠しながら建物へ向かった。

「(すんなり入れそうだな)」

そう思い、さらに建物に近づいていく。

「つはあゝ。ありがとゝルルーシュ、わざわざ手伝わせちゃって。」

ハッとして廊下を凝視すると声のした方から人が2人歩いてくるのが見えた。

「会長。つきあわせるのはこれっきりにしてくださいよ。」

2人は俺の近くまで来ると足を止めた。

「いっつもサボってる分のツケよ。あなたがサボるせいで仕事が無
然はかどんないんだから。」

「サボってるんじゃないよ。言ったでしょう、いろいろ忙しい
って。」

「なにやってるのか教えてくれないの？ まっ、いいわ。今日は
ありがとうね。」

「(まだ気づかれてはいないようだな。)」

人がいる以上侵入はできないと判断し、建物から離れようと後ずさ
りした。しかし、小枝を踏んでしまい音をたててしまった。

「…誰だ！」

ルルーシュと呼ばれた男がこちらに目を向ける。

「(しまった！早く逃げよう。)」

だが、体を動かそうとした瞬間。また頭に痛みが走った。

「(マズイ！意識がっ…！)」

痛みへの抵抗も虚しく俺はまた意識を失った。

2人は倒れている男に近づいていく。

「なんだ？気絶している。」

倒れている男を見るとまだ俺たちと同じくらいの歳頃のようにだった。

「あっ！大変。早く医務室に連れていきましょ。」

「もしかして俺が背負うんですか？」

「あったり前でしょ！肉体労働は男の子の仕事、ということですよしくルルーシュ君♪」

「はいはい。」

男を背負うと彼らは医務室へと向かった。

医務室―

「んっ…。」

目を開けて天井を見上げる。

気を失う前のことをゆっくりと思い出す。

「(やってしまった…。ブリタニアに捕まるなんて)」

俺はこれから何をされるのか考えながら自分の運の悪さを呪った。

「はぁ…。(これからどうしようか。)」

「あら、起きたわね。」

声のした方を見てみる。気を失う前に見た金髪的女子生徒が笑顔で顔をのぞき込んでいた。

「もう、何呆けてるのよ。」

肩を軽くたたかれた。

「ここはどこだ…?」

辺りを見渡すと女子生徒の他にも数人が部屋にいるようだ。

「ここはアッシュフォード学園の医務室よ。あなた、急に倒れちゃったからビックリしたわよ。」

「はぁ。」

彼女たちの様子を見ると俺を拘束して尋問…なんてことはしなさそうだ。

「みんなー!この子起きたわよ!」

部屋の中にいた生徒たちがゾロゾロと近づいてくる。

1人の男子生徒が口を開いた。

「おはよう、不審者さん。君はいったい誰なんだ？」

「ちょっとルルーシュ！それが目覚めたばかりの病人にかけるセリフ？」

「会長。こいつは学園に侵入した不審者ですよ。」

「それがどうしたのよ。この子は病人なのよ。」

「（なんか陰悪な雰囲気だな…）あの、すみません。迷惑をかけました。」

ベッドから立ち上がろうとすると会長と呼ばれた女子生徒が手で制した。

「わー！ちょっと待って！ほら、ルルーシュがそんなこと言うからじゃない！」

とうとうルルーシュと呼ばれた生徒と会長が口論を始めた。

「（しばらく放っておこう）」

ぼんやりと2人の様子を眺めることにした。
すると他の生徒が話しかけてきた。

「ねえ、具合はもう大丈夫？」

オレンジ色の髪の少女が隣にくる。

「ああ。もう大丈夫。看病してくれたんだろう？ありがとう。」

「お礼ならあの二人に言って。ルルーシュなんかずっと心配でそわそわしてたのよ。」

「そうなんだ。」

先ほどまで悪態をついていた彼のそんな状態を想像すると少し笑えた。

「そういえば自己紹介がまだだったよね。私シャーリー、よろしくね。」

「ああ。俺はトーヤ、トーヤ||リカルド。よろしく。」

俺たちが自己紹介をしていると近くにいた青い髪の男子生徒も自己紹介を始めた。

「俺リヴァル！よろしくな！」

次はなんかモジモジしている女子生徒。

「あ…あの…、私、ニーナです。よろしくお願いします…。」

「ああ、二人ともよろしく。」

俺はふと下に目を向けた。そこには車椅子に乗った中学生くらいの女の子がいた。

「私はナナリーといいます。よろしくお願いしますトーヤさん。」

「ああ、よろしく。」

彼女が差し出した手を握り握手をした。

「ふう、ごめんね。トーヤ君。」

先ほどの自己紹介を聞いていたようで会長は名前を呼んでくれた。

「私はミレイ・アッシュフォード。この学園の理事長の孫よ。よろしくね。」

「ああ、よろしく。」

「会長…。間接技を決める必要はないはずですよ。」

ルルーシュは体の至る所をさすっていたが、俺を見ると自己紹介を始めた。

「俺はルルーシュだ。よろしく。」

「ああ、よろしく。」

みんなとの自己紹介が終わるとミレイさんがパンツと手を叩いた。

「みんな自己紹介は終わったみたいね。で、トーヤ君はどこから来たの？」

「えー…と。あれ…？（そーいえば俺はどこから来たんだ？記憶がない。いや、ぼんやりと思い出せる。確かゲッターで人を探していた…）」

「もしかして…分からないの？」

「えっ！ いや…：すみません覚えてないんです…。」

「もしかして…：記憶喪失か？」

「かもしれない…。すまない、少し前のこともおぼろげにしか覚えていないんだ。」

「んゝ。しょうがないなあ。あなたここに住みなさい。」

「えっ？」

ミレイさんはもう一度手を叩く。

「うん！ そうしましょう。決定！」

俺が驚いているとルルーシュが声を上げた。

「会長！ それは危険すぎます！ 素性も分からない男をここにおくなんて！」

「大丈夫よルルーシュ。それになーんかこの子、会ったときから放つとけないのよね。」

「くっ。会長がそう言うならしょうがない。おいっ！ トーヤ。」

「なんだい？」

「これからは俺たち生徒会が全力でお前のバックアップを行う。感謝するんだな。」

「ああ、よろしく頼む。」

またミレイさんが手を叩いた。

「よし、じゃあ、入学の手続きは私たちでやっておくからあなたは寝てなさい。」

「分かった。」

「じゃーねー、トーヤ君。」

シャーリーが手を振ってくれた。

他の人もサヨナラと言って部屋を出て行った。

初めて友達というものができたような気がしたことが嬉しかったし、みんなが心配してくれるのも本当に嬉しかった。

窓の外に顔も向けた。夕暮れの空は赤く見えたが、ここ一週間くらいの記憶しか残っていない…。自分が誰か分からない俺にはその赤さはとても綺麗には見えなかった…。

MEMOLY-1 魔神の生まれた日（前書き）

本編突入しました。

ここではまだ出てきませんが、オリジナルのKMFやキャラクターが登場します。

気に入らなかったらごめんなさい。

MEMO1 魔神の生まれた日

今日もこの日本の空は青い。

朝日や夕暮れを綺麗だと言う人は多いだろうが、俺はいつも通りのなんでもない青い空が好きだ。

俺は根本的に青い色が好きなのだろう。

身の回りのものはたいてい青い。

服やよく使うペン、KMFや俺が正体を隠すために被る仮面やマントは全て青一色だ。

『ニュースをお伝えします。先日、オオサカで起きたビル爆破テロについて犯人から声明が届いていたことが判明しました。テロリストの声明は『我ら日本人は蒼の騎士の力と勇気のもとに立ち上がった。ブリタニアは我らが蒼の騎士の力に屈することだろう。覚悟しろ!』とのことでした。このことから蒼の騎士の影響を受けて今回の行動に至ったと思われる、その影響力は軍も無視できない程になっています。また、今回の事件の犠牲者は…』

「（バカバカしい）」

巨大モニターでは先日のテロについてのニュースを放送していた。

“蒼の騎士”として俺は高い名声を得ていた。ほとんどの日本人が“蒼の騎士”を指示し、また尊敬していると、ニュースが報道していた程だ。

「（確かにブリタニアに刃を向けるのはいい。しかし民間人を巻き込むなんて、ブリタニアとなんら変わらない。）」

そんなことを考えながらも俺は正面から当たる風を心地いいと思っていた。

「トーヤ。呆けてるとぶつかるぞ。」

「ああ、分かってるよ。…ところでルルーシュ、俺たちはどこに向かっているんだい？」

「ああ、とある貴族の所さ。」

俺たちは賭チェスの依頼を受けていたため、学校を抜け出し、バイクに乗っていた。俺の右側にはサイドカーにルルーシュを乗せたりヴァルのバイクが併走している。

「なあトーヤ、前から気になってたんだけどさ。」

「なんだい？リヴァル。」

「そのバイク、会長が買ってくれたの？」

リヴァルは俺のバイクを見ている。

そういえばバイクも青だ。

「違うよ。アッシュフォード家にあつたのを借りてるだけ。」

そう言ったら隣でルルーシュが笑った。

「嘘をつくな。会長はお前にあげたといっていたぞ。」俺はルルーシュを横目で見える。彼を見ているとつい二、三日前のことを思い出した…。

俺が屋上で昼寝をしているとルルーシュとナナリーがやってきて、突然信じられないような話を始めた。結局はなんだかんだで話を聞いてしまった俺も秘密を知る一員になった。

「どうしたトーヤ。顔に何かついてるか？」

いつの間にかルルーシュの顔を凝視していたようだ。

「ごめん。なんでもないよ。」

俺は前に向き直る。

そして空に目を向ける。

「（今日も空は青いな。）」

…

…

その頃、一台のトラックが租界を疾走していた。

「…こちら航空警備隊。目標を確認、このまま追跡を続けます。」

「…こちら地上班、了解した。常に目標の位置を転送してくれ。」

「くそっ！警察だ！」

長髪の男は運転をしながらも怒りでハンドルを殴りつけた。

隣では紅い髪の女性がジッとモニターを見つめていた。

「永田さん、ルートを変えて途中で地下鉄に降りましょう。」

「ああ…、そうだな。扇たちに連絡してくれ。」

「ええ、分かりました。」

「くそっ！玉城の奴がナオトのプラン通りに動かないから！」

…

…

…

「ふう。ようやく着いたな。」

「ああ、どうするトーヤ？ お前も来るか？」

「いや、ここで待ってる。」

「分かった。じゃあ、リヴァルと行ってくるから。」

二人は建物の中に入っていった。

俺はケータイを取り出し電話をかける。

「もしもし、水野さん。物資は届いたかい？」

水野というのは桐原公が俺につけてくれた部下の1人だ。

『ああ、届いてるよ。どうする？ 無頼のメンテナンスやっておくかい？』

「ああ、頼むよ。うん、それだけだよ。じゃあ、また。」

電話をポケットにしまう。

「（未だに紅月カレンは見つからない。ここまで見つからないと生きているのかすらも怪しくなってくる。まいったな…。）」
なんて考えごとをしているとルルーシュとリヴァルが戻ってきた。

「トーヤ！ 聞いてくれよ。ルルーシュがまた最短記録更新！ 8分49秒の大作！」

「ほう。それはすごいじゃないか。ルルーシュ、今日の相手は弱かったのかい？」

「フツ、貴族なんてみんな同じようなものさ。」

とは言いつつどこか嬉しそうな彼に苦笑してしまった。

その時、ビルに設置された巨大モニターが突然切り替わった。

『ただいまより、エリア11総督クロヴィス・ラ・ブリタニア殿下、会見の時間です。』

モニターに目をやると青い服を着た総督クロヴィスが移っていた。

『帝国臣民のみなさん。そして協力してくださっている大多数のイレブンの皆さん。私の心は今、二つに引き裂かれています。怒りと悲しみの心です。未だにこのエリア11では…』

俺はそれ以上会見の中身に興味はなかった。

「（クロヴィスのあれは演技だ。所詮誰の死も哀しんではない。）
」横を見るとルルーシュも同様で、すでに帰る準備をしていた。

『さあ、皆さん。亡くなった8名に哀悼の意を捧げましょう。』
『黙祷。』

「あれ？2人ともやんないの？」

「俺がやつても死んだ人に祈りは届かないと思うからね。ルルーシュは？」

「俺たちが祈った所で死んだ人は生き返らないからな。」

「わお！刹那的。」

なんかルルーシュと考え方に似ているような気がして、また苦笑してしまう。

「ほら、2人とも早くしないと昼休みが終わるぞ。」

「分かってる。…リヴァル、出してくれ。」

「はいよ。」

俺たちは学校へ続く路線を併走して走り出した。

：

……

………

「ねえ、ルルーシュ。」

「なんだい？リヴァル。」

「なんであの時、キングから動かしたの？」

「ルルーシュ、そんなことしたのか？」

と口では言うがルルーシュならやりかねないなと思っていた。

「ああ、だって王様から動かないと部下はついてこないだろ？」

「ねえ…、ルルーシュってさ。将来社長にでもなりたいの？」

「まさか、無駄な欲は身の破滅を…」

「2人とも後ろ！気をつけろ！」

会話をしていると後ろからトラックがクラクションを鳴らしながら高速で接近してきた。

「くっ！暴走しているのか？」トラックの左側につけ中にいる人物に声をかける。

「おい！スピードを落とせ！このままだとぶつかるぞ！」
トラックの助手席にいる人物がこちらに顔を向ける。

その時俺はハッとした。

肩までの紅い髪にどこかで見たことがある青い瞳をしていたからだ。

「危ないわ！離れて！」

彼女は急に叫ぶ。

「えっ？うわっ！！」

トラックが急に左へハンドルを切ったのだ。

アクセルを離しブレーキを力いっぱい握る。

トラックは道を外れて工事中のビルがある方へと曲がっていく。

「…っ。…危なかった。」

俺はギリギリトラックにぶつからずに済んだのだが、トラックは工事中の建物に突っ込んで停止していた。

「トーヤ！無事か！？」

「ああ、大丈夫だ。それよりもトラックの人を助けないと」

「ああ、行こう！」

俺たちはバイクをいじっているリヴァルを置いてトラックへと駆け寄った。

「ルルーシュ、前の席が見えるか確認してくれ。俺は荷台側からまわれないか確かめる。」

「分かった。」

俺は荷台についた梯子を登るとコンテナの中に飛び込んだ。

「なんだこれ？」

中に着地すると、中央に球体がポツンと置いてあるのが目に付いた。

「これは…？」

「トーヤ！こっちは無理だ。そっちから行こう。」ルルーシュがコ
ンテナの上から顔を覗かせている。

「ああ、ルルーシュもっ…っ！」

急に目の前が暗くなる、これは前にもあった痛み。

「トーヤ！大丈夫か！？」

ルルーシュが心配してくれている…、と思ったのもつかの間で、彼
が突然頭上から落ちてきた。

「うわっ！」

と言いながらもルルーシュはうまく着地する。

どうやらトラックが急発進したようだ。

そして気づくと頭の痛みはいつの間にか引いていた。

「大丈夫か！？ルルーシュ！」

「ああ、大丈夫だ…。くそっ！内側にも梯子つけとけよな！」

「とにかく脱出しないと」

『警告する。』

「「えっ？」」

拡声器から聞こえてきた声に俺たちは思わず声を上げてしまう。

『お前たちは包囲されている。今なら弁護人をつけることができる。
ただちに投降せよ！警告する。これが最後だ。停止しない場合はト
ラックごと破壊する！』

「この車には犯罪者でも乗っているのか？」

「でも、外に出るのは危ないな。ケータイで」

「こんな時のために私がいるんでしょ！」

背後から聞こえた声にビクッと体が反応する。俺たちは物陰に隠れ

た。

ドアが開き先程の紅い髪の少女が歩いてきた。

「カレン！ここでアレを使ってしまおう！」

「（カレン！？まさか彼女が？）」

俺は思わず動きだそうとするがルルーシュに止められる。

ルルーシュも俺が彼女を探していたことは知っていたはずだが、やはり危険と判断したのだろう。

「それじゃあ、ただの虐殺よ！」

「うっ…！そうだな…。」

会話を終わると少女は、上着を脱ぎ捨てそのままコンテナの後方にある何かに乗り込んだ。

『投降の意志はないと受け取る！』
拡声器から苛立った声が聞こえた。

「（マズイ！銃撃される！）」

体が強張った。だが、それは杞憂で終わった。

コンテナの扉が開き、後方にある何かの全貌が見えた。

「これは…！グラスゴー！」

なんと！コンテナには第四世代KMFグラスゴーが積まれていたのだ。

紅いグラスゴーはスラッシュハーケンを放ちながらコンテナから飛び降りた。

「本物のテロリストじゃないか！」

ルルーシュは後方のハッチに駆け寄るが、すぐに閉じてしまった。

…

……

……

「…ルルーシュ、ケータイが圏外になった。」

「ああ。（この暗がりに路面状況。かつての地下鉄路線を走っているな。）条件はクリア。トーヤ、軍の保護は癪しやくだがテロリストの無線を土産に軍に保護を頼もう。」

「いや、俺はごめん被りたいね。IDがないとリスクが高すぎる。」

「仕方ないか…。抜け出したら、別々に逃げよう。」

「了解。」

その時、トラックを強い衝撃が襲った。

「何だ！？（止まっているということは事故か？）今がチャンスだ逃げようトーヤ！」

「ああ！」

だが、衝撃によって開いたドアから突然ルルーシュに向かって人影が飛んできた。

「ぐあっ！」

ルルーシュは倒れ込む。

「やめろ！」

俺はルルーシュの首を抑える男に飛びかかるとする。

「動くな！」

その言葉に気圧され動きを止めてしまった。

「殺すな。これ以上！」

男はブリタニア軍のようだった。

「なっ、まっ…」

「動くな！」

ルルーシュの首をさらに強く押さえつけていく。

「っだか…らあ！」

ルルーシュの蹴りが空を切る。

ブリタニア兵士は後方に跳躍した。

「ルルーシュ！大丈夫か！？」

「ああ！」

ルルーシュは立ち上がり、ゆっくりと構えたままのブリタニア兵に向かって足を踏み出す。

「殺すな…？だったら、ブリタニアをぶっ壊せ！！！！」
ルルーシュはブリタニア兵士にそう言い放ってしまった。

「（しょうがないな。）」

やれやれと思いながら、飛びかかってくるだろう兵士に体を向けた。
だが兵士は予想だにしないことを話し始めた。

「ルルーシュ！ルルーシュなのか！？」

兵士の以外な反応に少し気が抜ける。

すると兵士がマスクを取った。

「ルルーシュ、僕だよ。スザクだ」ルルーシュは驚愕の表情だった。

「（スザクと言えば、ルルーシュが言っていた10年前に離れ離れになってしまった親友か。）」

俺は彼らの関係を思い出すと二人の会話を傍観することに決めた。

「スザク、生きていたのか…。」

「君こそ、10年前に死んだと聞いていたから…。あつ…！ナナリは！？」

「無事だ。俺と一緒に暮らしている…。」

「よかったあ。」

スザクは安堵の表情を浮かべた。

「そんなことより、お前…、軍人になったのか。」

「ん、ああ…、君は？まさか、これは！？」

「何を言っている！」

二人の会話が激しさを増していくので口を挟んだ。

「俺たちは巻き込まれたただだよ、枢木スザクくん。」

「えっ？君は…？」

俺はスザクの疑問に答えようとしたが、コンテナに積まれていた球体が突然光を発した。

「え…？うわっ！」

スザクが俺の口に手を当てて無理やり押し倒す。

だが、俺の目はスザクではなく球体の中から出てきた緑髪の少女に向けられていた。

「（あの子は…、どこかで…？）」

「毒ガスじゃ…ない？」

俺たちは重なり合って倒れながらもその少女を見ていた。

「スザクくん、とりあえず手をどけてくれ。」

「あ、ごめん。」

…

…

…

俺たちは緑髪の少女の手足の拘束具を外していた。

「なあ、スザク。これが毒ガスか？」

「スザクくん、俺にも毒ガスには見えないぞ。」

「でも、ブリーディングでは確かに…」

すると突然俺たちは光に照らされた。

光の方には銃を構えた男たちがいた。

「この猿が…！」

リーダーらしき男が言葉を発する。

「まずいな…。(状況からみてこの少女は軍の機密だろう。それを目撃した俺たちは殺されるな)」

なんてことを冷静に考えられる自分がおかしかった。

スザクは彼らのもとへ走っていく。

「しかし、毒ガスと聞いていたのですが…。」

「黙れ！名誉ブリタニア人に答弁の権利はない…、だが…、それを発見した褒美にチャンスをやろう。この銃で奴らを殺せ！」

「(マズイ！確かに毒だ。しかもスザクの主人たちが危うくなる程の猛毒！)」

ルルーシュの顔つきが陰しくなる。「えっ？ですが、彼らは巻き込

まれただけです。」

「黙れ！この銃で奴らを殺せ！」

「できません……」

「何っ？」

「一般人の彼らを…、友達を撃つような真似は…自分にはできません。」

「（スザクくん…、聞いていたとおりの人間だな。）」

だが、俺は後ろの男の動きに息を詰まらせそうになってしまう。

「ならば、死ね！」

「「スザク……！」」

パンツという音が響いた。

スザクは腹部を撃たれ、うつぶせに地面に倒れ込んだ。

「よし、あの二人を殺し女を拘束せよ。」

「イエス・マイ・ロード！」

兵士たちが俺たちにゆっくりと近づいてくる。だがその時トラックが光を発するのが見えた。

どごおおおん！！！！と激しい音を立て爆発し、情報の岩盤を破壊した。

「ルルーシュ！今だ、逃げろ！また後で合流しよう。」

「…っ、分かった!」

俺はその声を聞いてルルーシュの無事を確認すると隠れ家に向かって走り出した。

…

…

…

「ハアハアハアハア!」

ルルーシュと謎の少女は地下鉄坑内を走っていた。

「(くそっ! なんなんだこれは!)」

怒りを感じても意味をなさない。

二人は必死で走っていた。

だが、少女が段差に足を引っ掛け転んでしまった。

「なんなんだよお前はあっ!…お前のせいなんだろ? この騒ぎも、…スザクが撃たれたのだって!」

彼は怒りを少女にぶつけたが、返事はない。いつまでもそこに居続けるわけにはいかなないので二人はまた走り始めた。

「待ってろ。見てくるから。」

ルルーシュは地下から上がる階段から顔を出した。

途端に銃声が響く、

彼は驚いて頭を引いたが銃弾は別の人間を狙ったものらしく1人の日本人男性が地面に突っ伏した。

「どうだ？」

「いえ、ここにはいないようです。」

さっきの奴らだ…。

「本当にに出口はあるんだろうな？」

「はい、地図を照合するとこの近くに出口の一つがあります。」

「（ここからは無理だな。）」彼はそう判断し戻ろうとするが突然遠くから赤ん坊の鳴き声が聞こえてきた。

だが、ブリタニア兵は無情無情にもその赤ん坊に向け、発砲した…。

プルルルルル

突然電話がなった。

「（マズイ！）」

ルルーシュはとっさに電話を切るが、兵士たちに見つかってしまった…

……

……

少女が無理やり連れて行かれる。

「止めろ！その子を離せ！……ぐあっ！」

男たちに壁に叩きつけられた。

頭の中で生きるための作戦を練り始める。しかし、うまく頭が働かない。

「テロリストの最後にはいいロケーションじゃないか。」

「くっ！」

「ここまでしぶといとは、学生とはいえさすがはブリタニア人だ……。だが…、お前の未来は…ここで終わる。」

男が銃口を俺に向ける。

「はっ！（やられる！）」

そう思った瞬間、

「撃つなあ！」

という声と共に少女が俺の前に躍り出た。

だが同時に銃弾は発射され、彼女の額を貫く。

「おい！」

少女はその場に崩れ落ちた。

「ふんっ。そいつは生かしておきたかったがしょうかない。こういう筋書きにしよう。テロリストのアジトを突き止め、それを壊滅…だが、時すでに遅く、女は無惨にも虐殺されていた…と。そう言う男はニヤツと笑った。

だが、そんなことはどうでもよかった。

「（いったいこれはなんなんだ…？スザクに続き、この子まで…。終わるのか…？スザクも、この子も…そしてこの俺も…くそっ！ナナリー！）」

『終わりたくないのだな？』

「え？」

倒れている少女が突然俺の腕を掴んだ。
すると世界が一瞬のうちに変化を始めた。

『終わりたくないのだな?』

頭の中に直接少女の声が響く。

『力がほしいのだろうか?これは契約。力を与える代わりに私の願いを叶えてもらう。』

「契約…?」

『この力は王の力…。使った者を孤独にする。それでもいいのなら…』

「ふっ…、（生きるためにはそれしかないのだろうか?）いいだろう! 結ぶぞ! その契約っ!!」

視界が一気に元の場所に戻ってくる。

だが…

「（手に入れた…力を!）」

ゆっくりと立ち上がって奴らを見る。

「クククハハハッ! なあ、ブリタニアを憎むブリタニア人はどう生きればいい?」

「何っ? 貴様、主義者か! んっ?」

銃を持つ男の手が震える。

「どうした? 撃たないのか? それともきづいたか? 撃っていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだと!」

左目を露わにし、心にスイッチを入れる。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命ず。貴様等は全員……死ね！」

力が体を駆け巡り、その力は兵士たちの脳へと届いた。

男の様子が途端におかしくなる。

「クッククック…ヒアッハッハッハ！！！！イエス・ユア・ハインス！」

「イエス・ユア・ハインス！」

ブリタニア兵たちはじぶんのこめかみに銃口を向けた。

「撃てえ！！！」

その言葉で兵士たちは一斉に発砲し、自分たちの頭を撃ち抜いた。辺りは日本人とブリタニア兵士の血で、血の海と化していた。

「（俺は昨日まで…ただの学生だった。金も権力もない…ただの学生。自分には嘘をついていた…。生きてるって嘘を…。世界を変えられるわけないってひねくれたまま…。でも、力を手に入れた…！誰にも負けない力を…！！世界は変わる、変えられるんだ！）だから…！」

返り血を浴びたルルーシュが不敵に微笑んだ……。

MEMOLYー2 覚醒する二騎士（前書き）

四話目投稿です。

しかし未だに面白みもない…

ヤバいです…

ちなみにタイトル負けです。

二騎士はトーヤとスザクです。

あんまり戦ってません。

すいません…

MEMOLY-2 覚醒する二騎士

ルルーシュは額を撃たれて息絶えた少女の側にしゃがみこんでいた。

「なあ、お前は…俺に、何をして欲しかったんだ？」

答えは返ってくるはずはなかった。

「（行くか）」

立ち上がったその時、建物を破壊してブリタニア軍の第五世代KMFサザーランドが現れた。

パイロットが声を発した。

「これは…なぜ、親衛隊が？」

皇族直属の部隊の死体がそこには転がっていた。
パイロットは通信をオープンにして問いかける。

「その少年！ここで何があった！？ブリタニアの学生がなぜこんな所にいる！答えろ！答えぬのなら…！」

サザーランドがライフルを構え、ルルーシュに銃撃を始めた。
銃弾はルルーシュには当たらず、周囲の崩れかけた壁を破壊した。

「ちっ…（軍か…。面倒だな）」ルルーシュはまた力を使う。

「おい、お前。そこから降りてもらおうか」

「何？貴様、何様のつもりだ」

「（力が通じないっ！？やはり…直接相手の目を見なければだめか。なら…）私はアラン・スペイサー、父は公爵だ。IDは内ポケットにある確認の後、保護を頼みたい。」

「公爵っ!？くっ」

パイロットがキーを外し、コックピットから降りてきた。

「手はそのままにしている。IDはこちらで出す。」
ルルーシュはもう一度力を使う。

「よこせ！お前のナイトメアを！」

「分かった。ナンバーはXG2IG2D4だ。」パイロットが投げたキーをルルーシュは受け取った。

「よし。」

彼はサザーランドに乗り込みその場を後にした。

：

……

……

電話になる。

「あ、もしもし。ルル？何やってんのよ。授業にもでないで。」
シャーリーはルルーシュに説教を始めそうな雰囲気だ。

「ごめん、シャーリー。そこにテレビはあるか？」

『テレビ？うん、ちょっと待ってね。』

「（ニュースの情報によっては対処の仕方も変わってくる。今考えられるパターンは7通りかな。）ニュースだ。新宿で何かやっているか？」

『ニュースう？えーっと、あった！交通規制だって。』

「理由は？」

『分かんない。書いてないし。』

「分かった。ありがとう。」

『あっ！ちよっ、ルル…』

ルルーシュは電話を切った。電源も切っておけば邪魔は入らないと考えたのか電源ボタンを押した。

「（情報を公開しないということは、おおっぴらに援軍は呼びづらいということだ。）」

ルルーシュはレーダー上に光点を出現させた。

「（盤上の駒はこれだけということだな。）」

レーダー上の50近い光点を見て、ルルーシュは笑みを浮かべた。

…

…

…

「水野さん！無頼改の準備は！？」

俺は隠れ家にたどり着き、格納庫のKMFのもとに向かった。

「もちろん！準備完了だ！トーヤ君が出撃したら俺たちも民間人の救出に向かう。」水野さんも河井さんもすでに戦闘準備に入っていた。

俺は急いでコックピットに乗り込む。

「二人とも、死ぬなよ！」

「了解！」

二人の返事を聞いて、俺はアクセルを踏み込んだ。

隠れ家を出て、少し行くと単機で行動しているサザーランドに遭遇した。

「そのサザーランド、止まれ！（単機で動くなんて怪しいな）」
そう思い、すぐに攻撃するのではなく、背後からライフルを突きつけた。

「（これは日本が改良した無頼か。）あなたは日本のレジスタンスか。私はブリタニアの敵だ。銃をおろしてほしい。」

「（んっ？この声は…まさか。）」

俺はこの声に驚いていた。

聞いたことのある声…。記憶の中で一番記憶に残っている声が聞こえたからだ。

「君は…、ルルーシュか！？」

俺がそう言っていると、サザーランドのパイロットも返答する。

「その声は！お前はトーヤなのか！？」

「ああ、やっぱりルルーシュだ。」

俺はコックピットから顔を出す。

「君も出てきてくれ！」

すると、すぐにルルーシュも顔を出した。

「トーヤ…、…！」

ルルーシュの表情が強張る。俺が仮面をかぶっていたからだろう。俺は仮面をとる。

「ルルーシュ、大丈夫。俺だよ。」

「お前が…、蒼の騎士だったのか。」

「そう、俺がブリタニアに反逆している蒼の騎士だ。ルルーシュ！君がここににいるということは…、始めるんだな？ブリタニア潰しを…」

前にルルーシュから聞いていた。

出生のことや、父への恨み、自分の母を殺し、ナナリーをあんな体にした皇族への恨みを…。

だから俺はすぐにルルーシュの行動の意図が分かったのだ。

「ああ、そうだ。トーヤ、俺は力を手に入れた…。ブリタニアに反逆するだけの力を…。お前も手伝ってくれないか？」

俺の答えは決まっている。

恩人を殺された恨みもある。ただそれだけでなく、ルルーシュの話聞いてから俺を親友と呼んでくれるルルーシュが立ちあがるのなら必ず手を貸そうと決めていたからだ。

「イエス・ユア・ハインス…！」

機体の上でひざまずき、ルルーシュと目を合わせた。

俺たちはどちらともなく笑っていた。

「さて、トーヤ。巻き込んでくれたテロリストに埋め合わせを求めに行くか。」

「ああ!! 行こう!」

俺たちは共に歩むことを決めた。俺たちが必ず平和な世界を作る、
そう心に誓って。

…

…

…

ブリタニア軍は日本人の虐殺を行っていた…。総督であるクロヴィ
スが新宿ゲッターの壊滅を指示したからだ。

「くそっ! ブリタニアめえ!」

カレンは目に涙を浮かべながらも一人で戦っていた。

『カレン! もういい、退くんだ。』

「退けない! そんなことより扇さんたちはみんなを逃がして!」

『そうは言ってもこの戦力差では…。くっ…。! また、連絡する。』

「分かった。」

彼女は通信を切ってグラスゴーの状態を確認する。

「(左腕はないし、スラッシュハーケンは一基だけ…。)」

カレンが機体の状況確認をしていると背後から声が聞こえる。

『ほう…さっきのグラスゴーか』

カレンの背後にはサザーランドが二機ライフルを構えていた。

「くっ!」 彼女は攻撃を回避するため、アクセルを踏み込んだ。

…

…

…

「ルルーシュ、頃合いだ!」

「ああ！分かっている！…聞こえるか？グラスゴアの女！」

『誰だ！？なぜこのコードを知っている！？』

ルルーシュは拾った無線からコードを取得していた。

「そんなことは後でいい！勝ちたければ私に従え！」

『勝つ…。』

彼女はその言葉に反応する。

「そこから運送用の線路に出ろ！」

『分かった！』

通信が切れた。

「ルルーシュ！俺たちも配置へ！」

「ああ、分かっている！」

俺とルルーシュは共に予定位置の廃ビルに向かった。

「来たぞ…。」

線路を紅いグラスゴーを先頭にサザーランドを含めた三機がこちらに向かってくるのが見えた。そしてルルーシュの指示通りにグラスゴーは列車の上に飛び乗った。

「（今だ！）」

俺たちはスラッシュハーケンを放ち、一機を撃破した。

「ルルーシュ、後は任せて指定の位置に」

「ああ、後は任せた。」

俺は残ったもう一機に銃弾を浴びせる。

するとサザーランドの通信から声が聞こえた。

『蒼の騎士だと！？くっ…！』

サザーランドのコックピットが射出され機体は倒れ込んだ。

俺は線路に降り立つ。

『ありがとう』

自分の左側に紅いグラスゴーが戻ってきていた。

「いや、君もよくやってくれた。」

『さっきの通信はあなたが？』

「カレン、無事か！？」

今度は線路上を数人の人間が走ってきた。

『ええ、大丈夫よ。彼が助けてくれたわ』

俺はコックピットから顔を出して走ってきた人たちに挨拶をする。

「みなさんこんにちは。」

彼らはそれぞれに銃やロケット砲、通信機などを持っていた。その容貌からテロリストの仲間だと分かった。

「おっ？あんた、その仮面は！？」

リーダーらしき男が目を見開いて驚いていた。

続けてチンピラ風の男も声を上げた。

「扇！こいつあれだ！蒼の騎士！」

「ほう。私の名前を知っているか。」

扇と呼ばれた男はまだ驚いているようだったが、必死に声を絞り出していた。

「知らないわけがないだろ！蒼の騎士といえば俺たちレジスタンスの間じゃカリスマ的な存在なんだ！そんなあんたがなぜここに？」

「（レジスタンスのカリスマ？いつのまにそんなことになったんだ？）」

俺はあきれつつも本題に入った。

「フツ…。我が主からの贈り物を渡しにきたのだよ…。」

俺は線路に止まった列車を指差す。

「その列車の積み荷をプレゼントしよう！」

走ってきた男女はそれぞれに列車の中身を確認し始めた。

「なんだよこれ！？」

「第五世代KMFサザーランド！？いったいどうやって…」

『すごい…。こんなのどうやって？』

やはりみんな驚いているようだ。無理もない、敵が乗っているはず

の強力な兵器が突然自分たちの目の前に現れたのだから。

「グラスゴーの女！」

『はいっ！何でしょうか！？』

彼女の声は驚きと緊張が入り交じっていた。

「（俺にそんな緊張しなくても…）エナジーファイラーをニューパツクにしておけ。」

『分かりました。』

各人次々とサザーランドに乗り込み戦闘準備を進めていく。

『おい！Q1、B2！準備はできたか？』

（B2Ⅱトーヤ、Q1Ⅱカレン）

『「大丈夫！」』

紅月カレンと合わせようとしたわけじゃないのに返事がかぶった。

『二人は図だ、最初の指示の後はB2に従え！』

『了解しました！』

「よし！行くぞ、紅月カレン！」

俺たちは並んで指定の位置に進んだ。

：

……

……

「オリエン卿、バレリー卿、共にLOST！」

「何っ！？くそっ！アレックス：いや、マルソー隊を援護に向かわせよ！」

：

「N2、N5は10時の方向にアンカー発射！」：

『こちらN2！飛行部隊を緋滅！』

：

「P4、UN弾を3時の方向へ撃て！」

：

『地上戦力LOST確認！』

：

「Nグループはそのまま前進！」

：

「マルソー隊連絡途絶！」

戦いは一方的に進んでいた。

奪い取ったサザーランドによる奇襲もあるが、何よりルルーシュの指揮による所が大きい。

「（思った通りルルーシュには人を率いる器がある！）」

俺はブリタニアに反逆する上で頼もしい仲間を手に入れたようだ。

『蒼の騎士！左のビルの上で敵サザーランド3機！』

突然紅月カレンから通信が入る。

「了解！撃破する！紅月、先行せよ！」

『分かりました！』

カレンはそう答えるとビルの上に向けてハーケンを射出した。

一気に巻き上げ、近くにいた一機の頭部を破壊した。残り二機がグラスゴーを狙う…が、

「やらせない！」

俺は側面からライフルを連射して二機を破壊した。

：

……

（クロヴィス）

「この情報を各部隊に送れ！部隊をあげよ！」

（バトレー）

「しかし殿下、それでは陣型が！」

：

：

（ルルーシュ）

「さて…、敵のとりパターンは6通り…。」

：

：

（クロヴィス）

「構わん。敵はあの中心点にいるのだ。」

：

：

（ルルーシュ）

「なんだ。一番愚かな手をうってきたな。」

：

：

サザーランド部隊が中心点に集まってくる。

「で…、伝令！中心点に敵影、ありません！」

「なんだとっ!？」

俺たちは地下街を進みブリタニア軍の死角を突いたのだ。

「今だ！紅月、スラッシュハーケンを！」

『はい!』

グラスゴーのスラッシュハーケンが地下道の天井を突き刺す。

「(これで敵は壊滅する)」

グラスゴーがスラッシュハーケンを引き抜いた。

その瞬間、ボロボロになっていた地下街の天井が崩れ落ち始める。

「よし、成功だ! 全機、地上に上がり敵の残存部隊を蹴散らせ!」

『ああ、勝てる…蒼の騎士、あんたのおかげで勝てるぞ!』

「話は後だ! 移動しろ!」

そうはいいつつも正直慕ってくれていることに関してはまんざらではなかった

『『了解!』』

皆勢いよく返事をして加速していく。

俺たちは勝ったのだ。

…

…

…

だが、そう簡単には行かなかった…。

白い新型ナイトメアが戦場に投入されたのだ。

「扇! 耐えろ! 今行く。」

『蒼の騎士、来るな! 俺たちは全滅した。逃げっ…うわあああああ

あっ…』

「扇！くそっ！ルルーシュが見つかる！」

俺は全力でルルーシュのもとへ向かった。だが、そこにはすでに白いナイトメアが来て、カレンのグラスゴーと対峙していた。

「そいつを離せ！」

俺は夢中で白いナイトメアに向けて廻転刃刀を振り下ろした。

『そんな攻撃っ…、通じない！』

「何っ!?!」

なんと白いナイトメアは緑色のシールドを展開して攻撃を受け止めた。

「(でも!) QI! 逃げろ！」

『ごめんなさい、蒼の騎士…。』

紅いグラスゴーからコックピットが射出されていた。

「(紅月カレン、お前は護らせてもらうぞ!)」

俺は正面から白いナイトメアに対峙する。ルルーシュはどうやら逃げられたようだ。

「(動きを見る限り、第四世代を改造したこいつでは勝てないな。)」

その白いナイトメアはまるで本物の人間のような動作をしていた。

「（まともに戦っても勝てないな。紅月カレンもルルーシュも戦場から離脱した。ならば……!）」

俺はアサルトライフルで牽制しつつ距離を詰め、刀を振り下ろす。

『甘い!』

だが、この攻撃もシールドによって防がれる。
しかし、

「（予想通り）距離は詰まった!」

そこで一気ににチャフスモークを撒き散らし、後ろに跳躍。そのままランドスピナーでビルの間を下る。

『しまった…、待て!』

逃げた方向が分からなかったようで、白いナイトメアは逆方向に飛び出していった。

「助かったな…。（ルルーシュは大丈夫として扇や紅月カレンはナイトメアを失ったはず、すぐに救援しないと）」

俺はしばらくゲッターの中を走り回った。するとある倉庫の前に軍が固まっていた。

「（あそこだな）」

俺は確信を持ってそこに向かった。

予想通り、中には多くの日本人がいる。

俺は指揮官らしき人物が乗っている先頭車両と逆側の壁にスラッシュハーケンを

打ち込み巻き上げた。

先頭車両はビルの壁にぶつかり大破した。残りは歩兵のみ。
俺は歩兵にライフルを向けた。

「警告する。ブリタニア軍よ！立ち去れば命は取らない。…だが、
これ以上反抗するならば、命の保証はないぞ。」

ナイトメア対人：兵士がかなうはずもなく一目散に逃げ出した。
俺はホッと一息ついてコックピットを開けた。

「大丈夫か？みんな」

「あなたは、蒼の騎士！」

「やあ、紅月カレン。それに他の人たちも無事でよかった。」

俺の登場に辺りがざわつき始める。

「（そんなに有名人なんだな俺…）」

そんなことを思っていると紅月カレンに呼ばれた。

「蒼の騎士！」

「…なんだ？」

「え…、いや、あの…助けてくださってありがとうございます。」

彼女が笑う。

確かにナオトさんが言っていたようにかなりの美人だ。

「気にしないでいい。そんなことよりも君たちだ。無茶をして命を
無駄にするなよ。」

俺も笑いかけた。

するとその言葉が意外だったのか彼女は…いや、周囲の皆が驚いた顔をした。

「ありがとうございます。蒼の騎士。」

また彼女が笑いかけてきた。

不意に胸の鼓動が高まる。深呼吸して気持ちを落ち着ける。

「気にするな…。」

『全軍に告ぐ！クロヴィス・ラ・ブリタニアが命じる。戦いを止めよ！これ以上の戦闘行為は認めない！また、負傷者はブリタニア人、イレブンを問わずに救出せよ！繰り返す！クロヴィス・ラ・ブリタニアが命じる……』

突然クロヴィスが停戦命令の放送を流した。ブリタニア皇族の性格を考えると普通は有り得ない。ということは…

「（ルルーシュ、うまくやったみたいだな。）みんな！無事に逃げられそうだな。すぐにまた会うことがあるだろう…。さらばだ！」

俺はコックピットに戻り無頼を発進させて隠れ家に戻る。

紅月カレンを見つけることができた。これから忙しくなりそうだ。

…

……

「綺麗事で世界は変えられないから」

「う、撃つな…。止めろーーーー！！！」

…

• • • • •

MEMOリー3 偽りのクラスメイト（前書き）

TURリー3です。

本当はルルーシユとカレンの出会いなんですけど変えちゃいました。

嫌な方はすいません…。

MEMOLY-3 偽りのクラスメイト

「そうか、クロヴィスを殺したのか。」

俺たちは家に帰ると、ナナリーを眠りにつかせ、ルルーシュの部屋で今日の出来事やこれからについて話していた。

「だとすると大変になるぞルルーシュ、皇族殺しなんて第一級の犯罪だ。捕まったらまず死罪だ。」

「捕まらなければいいんだよ。」

彼は椅子の背に体重をかけて笑った。だが、その顔を見るとあまり気分がいいわけではないようだ。

「…やはり…、兄弟を手には掛けるのは辛いかな？」

「いや、そうでもないさ。あいつらは俺の母を手にかけた…。犯人を見つけるためにしたことだしな。」

でも、やはりルルーシュの顔は優れない。

「それがナナリーのためでもある…か。」

「ああ、そうだ。」

俺はここに来て1ヶ月の間に少しずつルルーシュやナナリーを含めた生徒会のメンバーとの関係を心地よく感じていた。みんなが記憶

のない俺の記憶をどうにか取り戻そうと手伝ってくれたりするし、明らかに不審者である自分をまるで幼い頃からの友達のように接してくれるからだ。

「そういえばトーヤ、君の探し物は見つかったみたいじゃないか。」

「ああ、グラスゴーのパイロットか。」

1ヶ月の間探し続けて手がかりすら見つからなかったのだが、まるでルルーシュが反逆を開始するのを待っていたように今日見つかった。

「確かまだ捜していた理由を聞いたことがなかったよな。聞かせてくれないか？」

「ああ…、もういいだろうな。話すよ。」

俺はブリタニアの研究所に捕まっていたこと。カレンの兄である紅月ナオトに助けられたこと。その恩人の最後にカレンを守ってくれと頼まれたこと。を詳しく話した。

「そうだったのか…。それならばお前が蒼の騎士であることも、カレンを捜していた理由もうなずける。」

「そうだ。俺は自分の未来のために戦っている。少なくとも戦いのない未来のために…」

ルルーシュは俺を見て笑みを浮かべて言った。

「だが、そんな未来のためには今のままじゃダメだ。レジスタンス

のままでは何も変えられない。」

「じゃあ、君はどうすればいいと思う？」

「さあな。」

ルルーシュは皮肉っぽい笑いながら言った。

「だが、俺たちが力を合わせなければできないだろうな……。トーヤ、これから一緒に戦ってくれるか？」

ルルーシュの問いについて笑ってしまった。

「昼間にも言っただろう？ 君たち兄妹のためにも戦うと。」

「フフフツ、そうだったな。」

ルルーシュが手を差し出してくる。

「よろしく頼む。」

「ああ！」

俺はルルーシュと強く握手した。

：

……

……

翌朝俺とルルーシュはクラブハウスからいつも通りに教室に向かった。

教室に入るといつもは見かけない紅い髪の少女が他の女生徒に囲まれて佇んでいた。

「カレンちゃん、体はもう大丈夫なの？」

「ソフィアちゃん心配してたよ。」

周囲の女生徒が紅い髪の少女に声をかけていた。

「うん。あんまり休むとみんなについていけなくなっちゃうし。」

俺たちは何事もないように席に向かった。

「（彼女はここの生徒だったのか。）」

彼女は俺の席の隣に座っていた。

女生徒が周囲にいる所にいるのはきまづかったのでカバンを置いてルルーシュの席に向かった。

ルルーシュはリヴァルと何か話しているようだ。

「おはようトーヤ、お前うらやましいな。」

ルルーシュの側に行くときリヴァルが小声で話しかけてきた。

俺はその意味が分からずに聞き返す。

「なんでだい？」

「教えてやろうトーヤ君。彼女はカレン・シュタットフェルト。シュタットフェルト家の令嬢で貴族様。」

体が弱いらしくて始業式から来てなかったんだけど成績は優秀。そのお嬢様な風貌から守ってやりたいっていう男子が続出。まさにマドンナ的な存在だよ。そんな彼女の隣だなんて羨ましいじゃないか！」

「リヴァル、君は会長が好きなんじゃないのか？」

わざと少し大きな声で喋る。

リヴァルがあわてて俺の口を抑えた。

「お前、絶対わざとだろ。」

「だって本当のことだろう？ 君は会長が…」

「わぁ〜！ お前、友達を思いやる気持ちはないのかよ！？」

「友達をからかう気持ちはある。」

リヴァルが泣きついてくるのを見てルルーシュが笑った。気づくとカレンがこつちを向いて笑みを浮かべていた。

昼休み。俺は紅月カレンを捜していた。彼女を見つけると中庭で数人の女生徒と一緒に昼食をとっていた。

「（見つけた）」

だが、他人がいるなかで昨日の話をするわけにはいかない。

「（どうしようかな？）」

困っていると女生徒たちが急に騒ぎ始めた。

「きゃあ〜！ 蜂よ〜、カレンさん逃げて！」

紅月カレンは一人落ち着いた素振りですぐ草陰に走っていった。

「（ちょうどいい）」

俺は彼女に近づいた。

「はぁ、イライラする。病弱なんて設定にしなければ良かった！」

彼女はお嬢様な言葉づかいから昨日会った彼女に戻っていた。

「やばっ！ 見られた…？」

「（やっぱり昨日の彼女だ。）」

俺は心の中のスイッチをオンにする。

「いくつか質問に答えてくれ。」

「…はい。」

彼女の目が赤い染まる。

「君は昨日新宿ゲッターにいたな？」

「…はい。」

「では、どうしてレジスタンスなんかに？」

「私は…日本人だから、ブリタニアの血も半分入ってるけど…」

「なっ…ハーフ？そうか…そういうことか。最後の質問だ、君には兄がいるか？」

「はい…。今は…もういせんけど…。」

「分かってるよ。ごめん、こんなこと聞いて…。もういいよ。」

俺はギアスを解く。

彼女はもとの表情に戻ったようだ。

「あの…何か用かしら？」

「いや、もう用は済んだ。」

俺は立ち去ろうとする。

「あっ！そうだ。念のため、」

もう一度スイッチを入れる。

「シンジユクのことは誰にもしゃべるな。」

俺は確かにそう命令したのだが、

「え…？　どうということ？　なんでそんなこと言うの？」

「！？　（ギアスが効かない！？　どうして？）　もう教室に戻れ。」

「待って。私の質問にも答えてちょうだい！」

「くっ！？　（マズいな、）」

俺が困っていると後ろから誰かが声をかけてくれた。

「トーヤー。次理科準備室だぞ、早くしろって。」

リヴァルが窓から顔を出してこちらに手を振っている。

「ああ、悪い。今行くよ。」

俺はこれ幸いと後者に向けて走り出す。

「（しくじった！？　どうして！？　この力があるのに！）」

後悔しても始まらない、俺が自分の力を過信したせいなのだから。

…

…

…

『学校の方はどうだ？　カレン。』

カレンは屋上で扇と電話していた。

彼女は質問に刺々しい口調で応える。

「退屈。今日なんて世界史の授業だったし…。」

『まあ、そう言うなって、』

「ねえ、私、やっぱり戻った方が」

『ダメだ！シンジユクでのこともある。今は学園でほとぼりを冷ますんだ。』

「うん、分かった…」

カレンは渋々了承して電話を切った。

「（確かに扇さんの言うことも分かるけど…）あっ…（そう言えばシンジユクって…さっき）」

カレンは何かに気がついたようで足早に教室へと戻っていった。

…

…

…

「（参ったな…。席が隣だった。）」

俺は今かなり困っていた。

なぜなら隣のカレンがこちらを警戒して鋭い視線を向けてくるからだ。

「（もし俺の正体が知られて、ルルーシュの正体までバレるとやっかいだな。）」

彼女がまた横目でさりげなくこちらを見ていた。

「（こちらの正体に気づかれる前に対処しなければ。）」

授業が終わるとカレンの側にはすぐに他の女生徒が駆け寄ってきた。

「（仕込みは済んだ。後は処理するだけだ。）」

仕込みとは授業中にルルーシュに送ったメールのことである。

俺は立ち上がりカレンの前に立った。

「なあ、ちよっとつきあってくれないか？」

周辺の生徒が驚いているが気にせずに彼女も返答する。

「ええ、いいわよ。…誘ってくれると思った。」

俺はカレンをつれてクラブハウスに向かった。

「学園内にこんな場所があったなんて。」

カレンが周囲を見渡している。

「ここは生徒会専用のクラブハウスだ。

一般の生徒は立ち入り禁止にされている。ちなみにこのホールは舞踏会なんかができるように広めに設計されているんだけどね。」

「つまり余計な邪魔は入らない。」

「そういうこと…。」

彼女の表情が急に変わる。昨日シンジュクで見たような鋭い表情に。武器を隠し持っているのかポケットに手を伸ばした。

まさに一触即発の空気が俺たちを包んだ…その時、

「あつたー！これでしょー？」

突然気の抜けた声が二階から聞こえた。

声のした方を見るとシャーリーにリヴァル、ニーナがいた。

「あつ！それぞれ。ありがとうシャーリー。」

「うあゝ、腰いってえゝ。」

「（なっ！？まだみんなが集まるには早いはず！？どうして…）」

今度はすぐ近くのドアが開いて料理を運ぶ会長と…ルルーシュが現れた。

「なっ…!?!? 会長、これは？」

「あれえ？ ルルーシュから聞いてない？ それで連れてきてくれたんじゃないかったの？」

「はぁ？」

俺はルルーシュを見るが何食わぬ顔で料理を運ぶのを手伝っていた。

「カレンさん、生徒会に入れるから。」

「はぁ？」

今度はカレンが声を挙げた。彼女も何が起きているか分からないらしい。

「ほら、おじい様から頼まれちゃってさ。彼女は体が弱いから普通に部活するのは厳しいだろうからって。」

次々と料理が運ばれてくる中、みんなが降りてきてカレンに自己紹介を始める。

「ルルーシュ…。」

俺はルルーシュに近づいて小声で話しかける。

「お前…、こうなると分かってたな？」

ルルーシュは突然笑い出す。

「まあな。お前の慌てた顔は珍しかったな。」

「お前な…」

「だいたい正体がバレそうなのはお前のミスだろ？」

「うっ…。まあ、そうだけど…。」

それを言われては言い返すことはできない。

「安心しろ。俺もサポートしてやるから。」

「当たり前だ。」

俺たちは話を終わるとカレンに自己紹介をするため、彼女に近づいた。

「はじめまして、俺はルルーシュ・ランペルージ。よろしく。」

気づくと、俺たちの前にみんな自己紹介を終えていたようだ。

「俺はトーヤ||リカルド。黙っててごめん、このために連れてきたんだ。」

「ええ、よろしく。」

俺の自己紹介が終わるとまたドアが開いた。ナナリーだ。

「シャーリーさん。この料理、テーブルに運んでくれませんか？」

「あっ、ありがとうナナリー。」

カレンはシャーリーが行った方を見て驚いているようだった。ナナリーはカレンに気づき挨拶する。

「あっ…！あなたがカレンさんですね？私はナナリーです。よろしくお願いします。」

カレンはナナリーの挨拶に笑顔で答えた。

「ええ、よろしく。」

「さあ、じゃあ早速始めますか。歓迎パーティー。」

リヴァルが勢いよく声を挙げる。手にはシャンパンを持っていた。そのシャンパンにすかさずニーナとシャーリーが反応する。

「えっ？生徒会自らこれはマズいんじゃない？」

「リヴァル！未成年なんだからお酒はダメでしょ！」

シャーリーがリヴァルからシャンパンを奪い取ろうとしている。

「いいじゃん、ちょっとくらい。ルルーシュ、パス！」

シャンパンがルルーシュに飛ぶ。ついでにシャーリーも…

「ちょっと！ルルーシュも受け取らないの！」

「ちょっと待て、うわぁ！」

二人は床に転がってもみ合っている。

他の場所でやれよ。なんて思っていると、シャンパンの栓が勢いよく飛んだ。

「あっ…」

その先にはカレンがいた。

「…!! フッ…!」

飛んできた栓を軽くあしらってしまった。すごい…。

「(だけど…)」

彼女の頭にシャンパンがジャストミートした。

「あーあ。」

…

…

…

俺たちは部屋に戻ってカレンのために着替えをとってきた。

「ルルーシュは廊下で待っていてくれ。俺が着替えを置いてくる。」

「分かった。」

俺はドアをノックする。

「トーヤだ。着替えを持ってきたんだが、入っても平気かい?」
中から声が聞こえてくる。

「ええ、カーテン引いてるから。」

ドアを開けてバスルームに入る。

そして息を呑んだ。

ライトに映し出されたカレンの影がカーテンにはっきりと映し出されてきたからだ。

「あ、あの…、悪いな、賑やかな連中で」

「んーん。こんな賑やかさもたまにはいいわ。……早かったのね。男子寮まで行ってきたんでしょ？」

「ああ…、俺、ここに住んでるんだ。」

「えっ？」

「俺、会長に学園内で倒れてた所を拾われてさ…。記憶喪失で帰るところも分かんないからここで匿われてるんだ…。」

「そうなんだ…。」

「ルルーシュとナナリーって子、覚えてる？」

「ええ…」

「あの二人も同じように会長の世話になってる、俺と同じように…。」

「……………」

「ごめん、話が長くなったね。着替え置いとくから。それじゃ。」

「…！待って！」

俺が立ち去ろうとするとカレン呼び止められた。カーテンの脇から手が伸びてくる。

「そのポシエット、取ってくれる？」

「ああ…、」

俺は洗面台の所に置いてあるポシエットを手にとってカレンに渡そうとした。だが、突然彼女に腕を掴まれてしまった。

「くっ…！意外と活発何だな。」

カレンの右手が落ちたポシエットに伸びる。

「答えて！なんであの時シンジユクって言ったの？」

「シンジユクだとなんかマズいのかい？」

「質問に質問で答えないで！…あなたはこの間シンジユクにいたの？答えて…さもないと…」

カーテンの隙間からポシエットから出ている金属の塊が見えた。ナ
イフだ…

「（マズいな…）」

まさに崖っぷちの状況に立たされていた時、突然電話が鳴った。

「どうする？出ないと誰か来ちゃうけど…」

「ちっ！」

カレンの舌打ちを無視して電話に手を伸ばす。

「出てもいいよね？…もしもし、こちらアッシュフォード学園生徒会。ええ、えっ？いや、俺は…。はい…どうやら君宛だ。」

「私？」

カレンに電話を渡す。

「もしもし？」

『無事だったかQ1。』

「（えっ！？この声は蒼の騎士！？）はい。」

『今から我が主が変わる。少し待ってくれ：』

彼女がカーテンの隙間からこっちを見てくる。

「（違ったんだ：）」

その時ドアの外からルルーシュが声をかけてきた。

「トーヤ、何してるんだ？」

「ああ、すぐに行くから。戻ってていーよ。」

「分かった。先に戻ってる。」

そう言ってルルーシュは行ってしまったようだ。

『待たせたなQ1。』

「あ、お前は：！」

『明日の午後4時トーキョータワーへ一人で来い。ではな。』

「おい！待て！停戦命令を出させたのはお前なのか！？おい！？」
だがすでに電話は切れていた。

「くっ：」

「おい、なんだ？停戦命令って？ずいぶんと物騒な友達だな。」

「えっ？ あっ、えっと…」

カレンが困った声を出した。

別に正体は分かっているので助け舟を出す。

「当てて見せようか。」

「えっ？」

「ネットだろ？」

「え、…ええ、そうなの。私、体が弱くってあんまり外に出れなかったから…」

カレンがそう言うのと掴んでいた腕を離してくれた。

「だから、言ったんだよ。シンジュクに気をつけろって。いるんだ、君みたいな子に画像を見せたがる奴がさ。」

「ありがとう…。」

彼女への助け舟もそこそこにもう一つの問題を指摘する。

「ところで…、あの…、見えてるんだけど…」

「えっ？」

彼女が振り返るとカーテンがさっき引っぱ張った電話の線に引っかかって半分開いていた。

「いやっ！」

カレンはカーテンを引く。

「ごめん。誰にも言わないから、それじゃ、廊下で待ってるよ！」

俺は急いでバスルームから出た。

「（なんてスタイルだ…）」

壁に寄りかかりながらも、先ほど見たカレンの体を思い出してしま
うのだった…

…

……

少ししてバスルームから出てきたカレンと生徒会の活動について話
をしながら生徒会室に戻ることにした。

「なあに？ 男女逆転祭りって？」

「俺も一回やらされたんだけどね…。会長の趣味だからさ。つき合
わされるのは覚悟しておいた方がいいよ。」

なんて他愛のない話をしながら生徒会室に入ると、会長が少し慌て
た声で話しかけてきた。

「二人とも、大変よ！ クロヴィス殿下が暗殺されたの。」

テレビでは代理執政官を名乗る青い髪の男性が演説していた。

「（純血派リーダー、ジェレミア・ゴットバルトか…）」

頭の中にまた知らなかった知識が浮かんできた。最近は特によくこ
ういうことがある。記憶には無いのになんか、知っている。

「（これも記憶を取り戻すきっかけになるのかな？）」

だが、そんな考えは次にテレビに映った映像を見ると吹き飛んでし
まった。

『彼がクロヴィス殿下を殺した疑いがかけられている名誉ブリタニ

ア人、元イレブン枢木スザクです。今、ちょうど連行されていきます。』

「（何っ？彼はこの間のっ…！？）」
ルルーシュを見ると目が合った。彼も驚いた表情をしていた。

「（助けに行かなければならない…必ず。）」

MEMOLY-3 偽りのクラスメイト（後書き）

.....

オリジナルストーリーがほぼ入っていませんでした…。

すみません…

感想意見があれば積極的に入れていきたいと思っています。

もしある人はどんどん書いて欲しいです。

MEMOLY-4 ゼロの騎士(前書き)

計6話目です。

けっこうオリジナル設定とか出してますけど嫌な人はすいません…

MEMOY-4 ゼロの騎士

ルルーシュはナナリーを寝かせるために彼女を車椅子からベッドに抱えて移動させていた。

「お兄様。スザクさんのこと…」

ナナリーは先程テレビで見たクロヴィス殿下暗殺の犯人のことを言っているのだろう。

ナナリーは不安そうな顔をする。

「ああ…、生きていたんだな、スザクは」

ルルーシュはこの時複雑な思いを抱いていた。旧知の仲である枢木スザクが総督殺しの罪で捕まったのだ。

しかもルルーシュ自身がスザクのかけられた疑いである総督殺しをの犯人なのだから。

「お兄様」

ナナリーが手を伸ばしてくる。

「なんだい？ ナナリー」

返事をしてルルーシュはその手を握った。

「嘘…ですよね？ あのスザクさんがあんなこと…」 ナナリーの手が小刻みに震えている。

「ああ、嘘だよ。スザクがそんなことするはずがない」

「そう…ですよね」

ナナリーの手から力が抜ける。

「ああ、そうだよ。だから…、今はおやすみ、ナナリー…」

ルルーシュは眠りについたナナリーの手を離して部屋を出た。

「ルルーシュ、ナナリーは眠ったかい？」

部屋の外に出てきたルルーシュにトーヤは声をかけた。

「ああ、眠ったよ。」

「ルルーシュ、俺の部屋で話そう。」

トーヤはルルーシュをともなって歩き出した。

二人が部屋に着くとトーヤは話を聞かれないようにするため、ドアをロックする。

「ルルーシュ、枢木スザクのことだが…、君はどうしたい？」

「もちろん、助け出ささ。あいつは俺のせいで捕まったんだ。俺の身代わりになって」

「ルルーシュ、それは違うよ。彼は君の身代わりになったんじゃない。俺たちの身代わりになったんだ。俺にも責任はあるよ」

そう言うのとルルーシュが不意に笑う。

「どうした？」

「フフツ…、やはり君は頼りになるな」

「ああ、いくらでも頼ってくれ！」

トーヤもルルーシュに笑みで返事を返す。

「すまないトーヤ。」

「そういうときは『ありがとう』…って言えよ。君はいつもすまないって謝ってばかりじゃないか。」

ルルーシュは自分の今までの言葉を思い返してみる。

「（確かに『すまない』とは言うが、『ありがとう』とはあまり言わないな）」

トーヤの言うことに一理ある、そう思うとまたルルーシュは笑った。

「そうそう。こういう時こそ笑わないと、沈んでたっていい考えは浮かばない」

「確かにそうだな。なら、明日レジスタンスと顔合わせをする。まずはそのからだ」

「分かった。でも、その前に仮面とマントを取りに行くんだろう？
ついてくよ」

「ああ、そうだったな。明日はよろしく頼むよ」

ルルーシュはそう言うのと立ち上がり自分の部屋に戻っていった。
トoyaも服を着替えるとベッドに横になる。

「(ゼロ……か)」

…

……

翌日――

トoyaたち生徒は体育館にしゅうごうさせられていた。どうやら皇帝陛下からのお言葉があるらしい。

壇上に設置されている巨大なモニターが切り替わる。

『只今より。皇帝陛下、御演説の時間です。』

司会らしき人物の言葉が終わるとモニターに映る演台に白髪だががっしりとした体格の男性が歩み寄る。

「(彼がシャルル・ジ・ブリタニア…、ルルーシュの…俺の倒すべき敵か…)」

トoyaはふとルルーシュを見る。彼はモニターを睨みつけ、今にでも飛びかかって行きそうな雰囲気を出していた。周りの生徒に気づかれないように。

『人間はあ、平等ではない…。生まれつき体の弱いもの、足の速い

もの、頭のいいものがおる。』

トーヤは聞いている内に少しずつ自分の中が冷めていくのを感じていた。

怒りでもなければ、憎しみでもない。なぜかは分からないが、皇帝に対して憐れみを抱いていた。

「(可哀相な男だ…。人を知ることなんてできはしないのに人間を語る。不平等を語っていながらも皇帝という地位に就き他人を踏みつけている。やつは自分にだけ優しい世界を願うのだろうな)」

演説が終わると生徒たちは次々と体育館から出て行く。

トーヤとルルーシュもその中に混じって歩いていった。

…

…

…

トーヤとルルーシュは学校が午前で終わったので約束の4時前に間に合うようにルルーシュが作らせた仮面を取りに行った。

「その仮面… …俺のに似てるな」

「ああ、お前の仮面を似せたんだ。少し改良して左目の部分にスライドシステムを導入してある」

「ギアスを発動させる時に開くのか」

「そうだ。さあ、あんまり話していて遅れてはマズイ。行くぞ」

「了解」

トーヤとルルーシュはトーキョータワーに向かった。

…

……

―トーキョータワー

カレンは仲間を呼んでシンジユクで自分たちに指示を出していた男との接触に備えていた。

「（トーキョータワーに4時…。わざわざこんな所を指定するなんて…）」

カレンがそう思うのも当然である。

ここトーキョータワーは7年前までこのエリアがまだ日本と呼ばれていた頃、東京の象徴としてそびえ立っているが、ブリタニアの侵攻によって破壊され第一展望台から上は失われてしまった。

今は日本がブリタニアに負けたという象徴の一つで、中では戦争時に使用された武器や当時の写真が展示されている。

その頃、連絡を受けた扇、杉山、吉田の三人もトーキョータワーに到着し、展示物を見ていた。

「なあ。いったいどんなやつなんだろうな？」

「分からない。カレンを使って接触してくるからには理由があるのかもしれないが」

「扇、蒼の騎士の方は信じられるのか？」

「心配しすぎだ杉山。蒼の騎士は大丈夫だろう。彼は日本の味方なんだから」

「だが、カレンに電話をかけた後にクロヴィスを殺した枢木スザクが捕まった。だとしたらここは危ない」

「ああ、でも……。ん？」

『アッシュフォード学園からお越しのカレン・シュタットフェルト様。落とし物が届いております。至急サービスカウンターまでお越しください…』

サービスカウンターからの呼び出しが館内に響く。カレンは仲間目で合図しながらサービスカウンターへ向かう。

「カレン・シュタットフェルト様ですか？ 落とし物が届いております。こちらです」

職員がカレンに携帯を手渡す。

しかしその携帯にカレンは見覚えがなく、受け取るのを一瞬ためらった。

「あなた様の携帯ですよね？」

ためらうカレンに職員は訝しげに問う。

「あ、はい！ 私のです。」

カレンは携帯を受け取ると窓際に寄った。そしてタイミングを見計らったように電話がかかってきた。

「ゼロ？」

カレンの受け取った携帯のディスプレイにはZEROと表示されていた。

カレンは電話にでる。

「もしもし？」

『環状線外回りに乗れ、仲間も一緒だ』

「おい、聞きたいことが…！」

ゼロはすぐに電話を切った。

カレンたちは仕方なく指示通りにリニアレールに乗り込んだ。

…

…

…

カレンたちが乗り込むとリニアレールはすぐに発車した。

「（乗り込んだけどどうすれば…）」

すると再び携帯が鳴った。

「もしもし」

『右を見る…。なにが見える？』

「ブリタニアの町だ…。私たちの犠牲の上に成り立った強盗の町」

『では左には何が見える？』

「私たちの町だ…。ブリタニアに侵略された日本の町」

『いい答えだ。では、先頭車両に來い』

ゼロはまた一方的に電話を切った。

カレンは仲間たちに目で合図しながら歩き出す。

4人が先頭車両に着くと、そこには二人の人物が待っていた。

「あなたなの？シンジユクで私たちに指示を出したのは。」

吉田が声を荒げた。

「おい！なんとか言えよ！」

その時、トンネルに入ると同時にゼロが振り向いた。

「どうだった？租界ツアーの感想は」

「なっ？租界ツアーだと…」

「なんだよ、こんなふざけた奴だったのか？」

「君たちに正しい認識をしてほしかった。租界と、ゲッター！」

ゼロは両手を広げ租界とゲッターをそれぞれ指差した。

「…ふざけるな…、ふざけるな！お前、こんなことでっ…」

「私が信じられないか？確かにいきなり現れて信じろと言うのは難しいかもしれない」

「そうだな。まずは仮面を取ってくれないか？素顔を見せてほしい」

「ああ、そうだ！正体を明かせない奴の言うことなんか聞けるか！

扇が仮面を外せと提案すると吉田もそれに乗ってくる。

「（さあ、どうする？ルルーシュ）」

「…いいだろう…。だが、見せるのは顔ではない、力だ。そうだな…よし、枢木スザクを救ってみせよう。」

「なっ！そんなことできるわけがない！彼はブリタニアに捕まっているんだ。」

「だからだ。枢木スザクを救ってやろう。そう、救ってみせる！私なら！」

そう言った時、蒼の騎士が立ち上がった。

「ならば私も手伝おう。人手は多いに越したことはないからな。」

「ふはははは、よろしく頼む。我が友よ」

…

……

.....

カレンと扇たちはゼロとの面会を終えて、仲間たちがいるゲットーの隠れ家に戻っていた。

「扇、あんな奴の言うこと信じるのか？」

杉山はゼロを不信の目で見ていた。おそらく彼だけではない。扇もカレンも会ったばかりの顔も見せない男を信じられないでいた。

「いや、信じる訳じゃない。ただあいつは力を見せると言ったんだ。だったらやらせてみようじゃないか。俺はやってみる」

その時、短髪の男、玉城が怒鳴り始めた。

「ゼロだかなんだか知らねえが！顔も見せない奴の言うことなんて信じられる訳ねえだろ！俺は絶対に手伝わねえ、勝手にやってろ」

そう言うのと部屋を出てしまった。

確かに彼の言うことは普通に考えれば正論だ。誰も言い返すことはできずに場に静寂が広がった。

「私はやってみる：一緒に行つてあいつの鼻を明かしてやる！」

そんなカレンに藍色のセミロングの髪型の女性が諭すように話しかけた。

「カレン、危険よ！扇に任せた方がいいわよ」

「んーん、大丈夫よ井上さん。いざとなれば蒼の騎士だっている。安心して」

「だったら…いいけど。気をつけなさいよ」

「はい」

「よし、カレン。行くぞ」

「はい」

扇とカレンは二人でゼロに指定されたゲッターのある場所に向かった。

…

…

…

「来たな…」

俺たちが指定した場所に扇という男とカレンが現れた。

「すまない、ゼロ。俺たちしか来れなかった。」

「フッ、二人いれば十分だ。こちらにも協力者がいる。蒼の騎士に二人の部下を連れてきてもらった、安心しろ」

「ああ、分かった。で、俺たちは何をすればいい？」

ゼロは懷から二枚の紙を取り出した。

「一晩でこれを作ってほしい。外見だけ似せてくれれば十分だ」

ゼロは俺に紙を渡して耳元で囁いた。

「トーヤ後は頼んだぞ」

「君は手伝わないのか？」

「ああ、力仕事になると俺は足手まといになってしまう
そう言うところルーシュは笑い始めた。

「確かに、君は邪魔だな」
俺がそう皮肉つぽくしゃべるとルーシュは笑いをさらに大きくした。

「ハハハッ！まあ、そういうことだ。後は頼んだぞ、蒼の騎士」

ゼロはそう言い残し、帰ってしまった。

「（面倒くさいだけのくせにな）」

心の中で苦笑しながらもカレンと扇、そして水野さんと河井さんを
加えた5人で作業を始めた。

：

……

「みんな、少し休憩しよう」

「了解……」

外見を制作して中に動力を載せるという単純な作業だったが、意外に重労働でみんな疲れきっていた。

「ルルーシュめ：分かってやらせてるな」

ルルーシュに対して恨み言を言うがどうすることもできない。ふとみんなの方を見てみるとみんな親しそうに話していた。

「（水野さんたちには正体を話すなって言っておいたから大丈夫のはずだけど）」

水野さんも河井さんもカレンと扇さんにすっかり打ち解けてしまっていた。

「（そうだ）」

俺は用意していたものを自分の荷物から取り出し、みんなに配ることにした。

「みんな、疲れたろ。」

「えっ？それって？」

俺はまずカレンに缶の飲み物を手渡した。

「なんとなくこうなるんじゃないかって思ってたね。扇さんもどうぞほら、2人も」

みんなに飲み物を配り終わると缶のふたを開け、喉を潤す。

「ふはあ。ん？」

気づくとカレンがジッとこちらを見ていた。

「どうした？」

俺が質問するとカレンはにっと笑って

「ありがとうございます」

と言ってきた。

「どういたしまして」

俺も笑顔で返事をする。でも、仮面で見えなかっただろう。なんか普通に感謝されただけなのに恥ずかしかった。

「さあ、みんな！あと少しだ！」

みんなに檄を飛ばし再び作業に取りかかった。

……結局全ての作業が終わったのは太陽が昇り始めた頃だった…。

「（ルルーシュ、覚えてろよ…）」

…

……

……

「これより我らは枢木スザク奪還に動く。水野、河井は逃走経路の確保に動け！蒼の騎士とカレンは私と一緒に来てもらう。蒼の騎士

よ、武器は準備しているか？」

「ああ、大丈夫だ」

俺は普通の長さの剣と少し長めのナイフを持っていたが、正直必要ないのではないのかと思っていた。

「よし、行くぞ」

…

…

…

『代理執政官、不審な車両がこちらを通過しました』

今、租界の大通りを純血派メンバーが護衛する枢木スザクが連行されていた。

「面白い。お前はテロリストだと思うか？」

『いえ、あの…それが…、不審な車両はクロヴィス殿下の御霊車でして…』

「殿下の！？ふっ、やってくれる。全軍止まれ！」

護送する舞台の動きが止まって少しすると前方から一台の車が走ってきた。

「二人とも、準備はいいか？」

「ああ…、覚悟はできてる」

「（なるほど、報道陣が多いな。ゼロはこの報道を利用して日本中に自分の名を伝えるつもりなのだな）」

車が止まる。いよいよだ…

ゼロの合図とともに車の上部を覆っていた囲いが外された。

「私は…ゼロ。」

代理執政官のジェレミアが目の前にみえた。

「ほう…、ゼロとやら。枢木スザクを奪いにきたのか？」

「ああ、そうだ。枢木スザクを返してもらおうか」

「ククッ、バカめ。枢木スザクはクロヴィス殿下を殺した大逆の徒！お前などに渡すわけにはいかん！」

「（？　なんだあいつは？）」

ジェレミアとゼロが会話していると金髪の男がカメラを抱えて走ってくる、そのカメラをこちらに向けて構えた。

「(なかなか度胸のあるやつだ。最後までゼロを撮ってくれよ)」

ゼロもその男に気づいたようだ。

「おい、横に控えているお前！顔を挙げろ！」

「(どうやら俺を指名しているようだ)」

俺は顔を挙げて立ち上がる。

「むう？なんだ蒼の騎士、貴様だったのか。シンジユクでは世話になったな」

「？私はお前と会った覚えはないが？」

「覚えていないだど！？まあいい。あの時はお前の奇襲でやられてしまったが、今日はそうはいかん！蒼の騎士、覚悟するんだな！」

ジェレミアが銃口を俺に向ける。

だが、気にせずに立ち上がる。

「ジェレミアよ、お前たちは私のことを“蒼の騎士”と呼ぶが間違っているぞ！」

俺は腰に差している剣を抜きジェレミアに向けて突きつける。

「我が名を教えてやろう！ブリタニアよ！私の名は“シェイド”！ゼロに影のように付き従うゼロの騎士だ！」

ゼロが俺の言葉に続く。

「それにお前は間違っているぞジェレミア！クロヴィスを殺したのは枢木スザクではない」

「なんだと!?!」

ジェレミアの顔に驚きの色が浮かんた。

「クロヴィスを殺したのは……この私だ!!!!」

ゼロはカメラに向かって自分が犯人だとはっきりと言い放った。

「なっ……………」

さっきまで饒舌だったジェレミアも予想していなかったため、啞然としてしばらく動かなかった。

「くっ…、貴様ら。しかしお前たちのショーもここまでだ！」

ジェレミアが放った銃声を合図に、上空で待機していたサザーランドが降下してきた。

「こうなったら貴様らを生きて帰すわけにはいかん！だが…、まず

は貴様らの忌々しい顔を見せてもらおうか。仮面を外せ！」

外せと言われて外せるわけもない。

ゼロは仮面に手を伸ばすが、仮面には手を触れず、指を鳴らした。

すると俺たちの背後にあったブロックが崩壊し、中身が露わになる。シンジユクで見た彼らにとっては中に毒ガスが入っているというカプセルを似せて作ったものが乗っているのだ。

「なっ…！それはっ！？」

ジェレミアの顔に不安の色も見え始めた。もう一押しだ。俺たちは車を再び進める。

「あなたなら分かるはずだジェレミア卿。それとも、公表しようか？ オレンジを」

「オレンジ？ いったい何の話だ？」

オレンジとは事前に考えておいたハツタリである。特に意味はない。十分に距離を詰めるとゼロの仮面の左目部分が開いた。ギアスを使うのだ。

「全力で私たちを逃がせ！そっちの男もだ！」

「貴様あ、いったい何を…。…ぐうつ…。」

ジェレミアの動きが一瞬止まる。

ギアスにかかったようだ。

「分かった、いいだろう。おい！お前たち、そいつを離してやれ」

一瞬兵士たちは解放をためらうが、最終的に解放してくれた。

ジェレミアの隣にいたサザーランドのパイロットがその行為を諫めようとする。

「ジェレミア！予定にはないぞ！貴様は純血派の」

「キューエル卿！私は逃がせと言った。これは命令だ！」

彼らが仲間内で口論している内に俺たちは解放された枢木スザクと合流した。

「君は…。？ぐっ！？」

「やはりそれで声を抑えられているようだな」

スザクは首もとに首枷をされていた。それから電流が流されるようだ。

「ゼロ、そろそろ時間よ」

カレンが車を降りて歩いてきた。

「ああ、分かっている。シェイド、頼んだぞ」

「了解」

俺はゼロがカプセルのスイッチを押すと同時に近くのコックピットを開いているサザーランドに走り寄る。

「なんだ!？」

俺はサザーランドの膝の段差に足をかけ、コックピットに一気に駆け上った。油断していたパイロットを蹴り飛ばして、乗り込む。

ゼロたちは橋からうまく逃走できたようだ。

さらに周りを囲んでいた民衆も離れていったので、暴れるにはいい環境になった。

「さあ、始めようか。」

敵サザーランドは7機。ジェレミアはギアスにかかっているため、実質的には敵は6機だ。

まずは近くのまだパイロットが乗り込んでないサザーランドを狙う。

近づいて左腕のスタントンファを展開して破壊する。

改めて敵の状況を確認する。戸惑っているジェレミア以外はすでに

戦闘体制に入っていた。

「（この状況なら一機ずつだな）」

狭い道路で一斉に射撃されてはマズイ。

まずは護送車の近くににいる敵をライフルを放ち、一機倒す。

すかさずサザーランドを護送車の陰に移動する。

敵は近くに一機、奥にジェレミアの乗る機体を含めて4機いた。

「（この状況だと近くの機体が邪魔で撃ってはこれない。なら…）」

俺は護送車の陰から腕を出し。後ろの4機の内一番近い機体に向けてフルオートでライフルを放った。

銃弾はサザーランドに吸い込まれるように命中した。

「（後4機!）」

だが後方の機体に気を取られていると、近くにいたサザーランドがすぐ近くに迫っていた。

「（マズイ!）」

すぐにサザーランドを下げたが、スタントンファの一撃を完全に避けることが出来ず、左腕を破壊された。

「ぐっ…!でも!」

俺は退きながらもライフルを連射する。

パイロットは脱出したがなんとか破壊に成功した。

次の敵を見ると遠くにいるジェレミアを含めた三機は遠くでライフルを構えたまま警戒していた。

「（サザーランドの動きがおかしい。先ほどの攻撃が駆動系まで及んでいたのだろうか）」

ジェレミアには逃がせとギアスがかけてある。
なら、逃げる際は味方になってくれる。

俺は通信をオープンにする。

「今日は面白かった、純血派の騎士たちよ！だが、これまでだ。」

そう言って橋から飛び降りた。

サザーランドが一機追いかけてこようとするが予想通りジェレミアが止めてくれた。

俺は敵戦力を削るという目的を達してゼロの待つ場所へ向かった。

みんなのいる場所に着くとゼロは枢木スザクと話しているらしくカレンと扇さんが出迎えてくれた。

「おかえり」

「蒼の騎士、大丈夫？」

俺は二人にただいま、といって名前を訂正した。

「カレン、蒼の騎士なんて名乗ったことはないよ。私はシェイド。ゼロに影のように付き従う騎士だ」

「フフッ。ごめんなさい」

そういえばまだカレンや扇さんにナオトさんのことを話していなかった。

「あのさ、二人に聞いてもらいたいことがあるんだ…」

唇が乾く。

…やはり実の妹に兄の死を伝えることには勇気がいる。

だが、伝えなければならぬ。俺には真実を伝える義務がある。

「カレン、私は君のお兄さんを知っている」

「えっ！知り合いなんですか？」

「ああ、短い付き合いだったけど、よく知っているよ…」

俺は深呼吸して息を一回思いっきり吐き出す。

「私はナオトさんの最期に立ち会った」

「…どういこと？」

カレンは真剣な目つきになる。扇さんは黙って俺の顔を見ていた。

「ナオトさんは私を、助けてくれた。人体実験をされていた私を…。ナオトさんは私を守って死んでいった…」

「……………」

カレンは下を向いているが二人ともは黙って話に耳を傾けてくれている。

「ナオトさんは笑っていたよ、最期まで…。…ナオトさんに託されたんだ。日本の平和な未来を…。そしてもう一つ…。…君をだ…」

カレンはうつむいたまま動こうとはしなかったが、代わりに扇さんが口を開いた。

「ありがとうな…。ナオトの死に際を伝えてくれて…。あいつは笑って逝ったんだな…？」

「ああ…」

「…なんで」

カレンが顔を上げた。

「あ…」

彼女の顔は涙で濡れていた。

「…なんで助けてくれなかったのよ！ねえ、なんで！？」

カレンが俺に飛びかかってきた。

俺は支えきれずに後ろに倒れてしまった。

「なんで助けなかったのよ！ねえ、答えてっ！」

「カレン、止めろ！彼だって辛いんだ。見てみろ」

カレンは俺の顔を見つめる。

俺は仮面の開いた口から頬の部分に手をあててみる。

俺の顔もカレンと同じように涙で濡れていた。

彼女もそれを見たのか、俺の胸ぐらから手を離して立ち上がった。

「ごめんなさい…、あなたが悪い訳じゃないのに…」

俺も立ち上がって答える

「いいんだ。肉親が亡くなったんだから、しかたがない…。

君はまっすぐな人間で仲間のために自分を犠牲にってしまうから心配だってナオトさんは言っていたよ…」

「……………」

「君を守って欲しい。それがナオトさんの最期の願いなら…」

俺はひざまずいてカレンに向かって頭を垂れる。

「私はあなたの騎士となりましょう。危機を払う剣となり、あなた

を守る盾として。私は恩人に託されたあなたを守り抜きます、命の限り」

俺はカレンの返事を待った。

ようやく見つけた彼女はナオトさんが言っていたように、無茶をしていた。たった一機のグラスゴーでブリタニアと戦闘したり、さっきだってブリタニア軍の真っ只中に一緒についてきたり。

だから、守ってやらなければいけない。
力の尽きるまで…。

「顔を上げて…」

俺はカレンの言葉に従い顔を上げた。

カレンはすぐ目の前に膝をついていた。

彼女はまっすぐに俺の目を見つめてくる。

「ありがとう、伝えてくれて。」

「ああ」

「あなたは私を守るためにここに来たのね？」

「そうだ、シンジユクの時や今日のように君が無茶したときでも守ってやれるように」

俺の言葉にカレンは優しい笑顔を見せてくれた。

「もし、あなたにその気があるのなら：私を、ううん、私たちと一緒に戦ってください」

「カレン…」

俺は深く頷いて彼女の言葉に笑顔で応えた。

MEMOLY-4 ゼロの騎士（後書き）

どうでしたでしょうか？

てゆーか、トーやって名前は日本名でもブリタニア名でもいいけるんじゃないかって思ってたけました。

デフォルトネームだとオリジナリティないんじゃないのか！って思ったことも理由の一つですが、あんまり気にしないでください。

MEMOLY-5 任命!お世話係主任 (前書き)

ネタが思いつかなくなってきた…

引き出しの少ない自分が憎らしいです…

MEMOLY-5 任命！お世話係主任

枢木スザクの奪還に成功した俺たちだったが、ルルーシュは説得に失敗。彼は俺たちの敵であるブリタニア軍に戻ることを選択した。

「ルルーシュ、しっかりしろ。まだチャンスはあるさ」

クラブハウスに帰ってきたはいが、親友である枢木スザクが敵であることに少なからずショックを受けていることが言葉の少なさから感じられた。

とりあえず腹が減っていたためダイニングの扉を開いた。

「よっ！」

「「なっ…！」」

扉を開けた先にいた人物に俺たちは思わず声をあげてしまった。

「あっ！お兄様、トーヤさん、おかえりなさい」

「ああ…ただいま」

いつも通りのナナリーの言葉が聞こえてくるが、ルルーシュは目を

見開いたまま固まっていた。

「（シンジュクにいた子だ）」

俺はどうしてここにいいのかという疑問を抱いていたが、ルルーシュの驚き方を見るとどうやら他のことに驚いているようだった。

「どうしたんです？二人とも。せっかくC.C.さんが来てくださったのに…」

「C.C.？」

「フフフツ。変わっていらっしやいますね。イニシャルだけだなんて、もしかしてお兄様の恋人？」

するとC.C.という少女が口を開いた。

「将来を約束した仲だ。なっ！」

「はあっ！？（将来って、結婚！？ルルーシュの奴、いつの間に…）」

ナナリーは軽い冗談で言ったのだろうが、C.C.という少女のまさかの発言に啞然としてしまった。

「なっ！！違うんだ、これはっ！！！！」

ルルーシュが全力で否定する。

「その…彼女は冗談が」

「嫌いだ」

「（息が…ピッタリだ…）」

ルルーシュの否定の言葉に緑髪の少女は素早く反応した。

「ルルーシュ…、俺は応援してるからな…」

俺はそう言って部屋に駆け出す。

ナナリーには悪いが、このダイニングは気まずすぎた。

「何を言っているんだ！？おいっ！待つんだ、トーヤ！」

俺はルルーシュの制止を無視して部屋に飛び込んだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ、（身内の事情は自分たちでやってくれ）」

そう思ったが、その後ルルーシュが部屋に押し掛けてきてしまった。

だが、聞いてみると結婚とか甘い話ではなかった。

あのC・C・という少女はルルーシュにギアスを与えた張本人であるらしい。

まあ、それならしょうがないか。と思いつつもルルーシュとC・C・は意外にお似合いなんじゃないかとも思った。

だが、この話は俺にも重要な情報をもたらした。

ルルーシュはギアスをC・C・がくれたと言っていた。つまり俺も

誰かからこの力をもらったと考えられるのだ。

「（記憶の手がかりは一つ増えた。今度C・C・に会ったら聞いてみよう）」

：

……

……

翌日――

会長に生徒会室に集まるように言われて生徒会メンバーが集合していた。なんでも文化祭に向けての準備を始めるらしい。

「会長、まだ文化祭まで二ヶ月はありますよ。」

「なくに言ってるのよりヴァル。毎年そうやってギリギリまでかかっちゃうんだからあ」

「でも、まだやることあんまり無いじゃないですか」

確かにみんな集まってはいるものの文化祭の準備をしたことがないからという理由で外されていた俺とカレンがいなくても平気な仕事量だった。

「そういえばあなた。町に出てる？」

ミレイさんに話しかけられた。

「いや、あんまり…」

「やっぱりね。あなたの身のまわりのもの全然増えないんだもの。もう少し外に出てみればいいのに」

いままでの自分の行動を思い起こしてみる。確かに学園の中はよく散歩していたが、租界には賭チェスに行くときしか出ていない。

「じゃあ、生徒会の仕事はいいから身の回りで使うものでも買いに行ってください」

「えっ、でも…」

「いいから行ってきなさいって!」

ミレイさんに背中を押される。

でも、何かを思い出したようで押すのを止めた。

「ミレイさん？」

「あなたはどこに何があるか分からないわよね？」

「えーと…多分」

「やっぱりね。そんなことだと思ったわ」

「すまない…」

「じゃあ、カレン」

ミレイさんが突然カレンに声をかけた。

「なんですか？会長」

「あなたをお世話係主任に任命します。トーヤをいろいろと案内してあげてちょうだい」

ミレイさんはニッコリ笑っている。

「トーヤもそれでいいでしょ」

「あの、構いませんけど…カレンはいいのかい？」

「ええ、大丈夫よ。あんまり無理はできないけど買い物くらいなら平気だから」

「そっか。じゃあ会長、行ってきます」

「ええ、カレンとはぐれないようにしなさいよ！」

「分かってますよ」

ミレイさんの心配に苦笑しつつ俺たちは生徒会室を後にした。

…

……

………

租界―

「トーヤ、何を買うの？」

「えーと、俺は服を買いだいたいんだけど、ミレイさんからメール来てみんなに何か食べるものも買ってきてほしいってさ」

「じゃあ、服から買いに行きましょう。こっちにお店があったはず」

そう言ってカレンは歩き出した。

俺もカレンに続いて歩き出す。

店は意外に近くにあった。

店内に入って服を物色し始める。

「トーヤ、ねえ、こんなのどう？」

カレンは青いジャケットを勧めてきた。

水色と呼んだ方がしっくりくる明るめの青で襟に沿って濃い青のラインが入っている。なかなかセンスがいい。

「うん、それいいね」

「試着してみたら？」

「そうしてみようか」

俺はその後、試着して気に入ったので購入した。

他の店にも行って見たが気に入るものがなかったので、購入したのはこれだけだった。

「じゃあ、みんなに何か買って帰ろうか」

「ええ。でもせっかく来たんだから私たちも何か食べて帰りましょう」

「そうだね。じゃあ、つき合ってくれたお礼に好きなものおごるよ」

「ありがとう！それならクレープがいいわ」

「クレープ？」

聞き覚えのない食べ物だ。

「どこで売ってるんだろう？」

「ついてきて、こっちよ」

どこに店があるか分からないのでまたカレンについていく。

「ここ？」

たどり着いたのは租界内にある公園だった。出店が至る所に売店していた。

「ええ、あっちよ」

カレンは小走りで走っていった。

病弱設定なのに…

「すみません、イチゴのクレープを二つください」

「君は二つも食べるのかい？」

「違うわよ。あなたの分」

「ありがとう。君はクレープが好きなんだな」

「うん。子供の頃によくお母さんに買ってもらって…」

そう言うとき彼女の表情が暗くなる。

彼女も他の日本人のようになっての日本が懐かしいのだろうか。

「ねえ、あなたはゼロって知ってる？」

「えっ!？」

クレープを食べ終わって帰ろうかと思っていた矢先にカレンからそんな質問が飛んできた。

自分の正体がバレたんじゃないかと不安になる。

「テレビで見たよ。総督を殺害したってやつだろ？」

嘘だ。俺は現場にいたから生中継されていたその映像は見えていない。

「何がしたいのかしら、あの人は」

「さあ？日本を取り戻したいんじゃないかな、ブリタニアに逆らう」

理由はそれくらいしか思い当たらない」

「そうなのかな？」

「多分そうだよ」

カレンは深刻そうな顔をしたままだ。

ゼロをまだ疑っているんだろう、素顔を見せない人間をそう簡単に信じることはなかなかできない。実際、俺もレジスタンスの皆に素顔は見せていない。心の中では疑いがあるのだろう。

「蒼の騎士も何をしたんだろう…」

「彼も日本という国を取り戻したいんじゃないかな？ 蒼の騎士の行動は他の反ブリタニアの日本人たちに支持されているって聞くし」

俺の言葉にカレンが驚いた顔をする。

変なことを言った覚えはないのだが…

「あなたは日本人って呼ぶのね」

「ああ、それで驚いた顔をしたのか。だってイレブンという呼び名は押しつけられたもので彼らはそう呼ばれることは嫌なはずだからね」

カレンが笑みを浮かべて俺を見ていた。

「あなたは、優しいのね」

「ありがとう。」

俺はお礼を言って立ち上がる。

「そろそろ帰らないと夜になっちゃうよ」

出かけさせてくれた会長にカレンと少し親しくなれたことを感謝しつつ帰路についた……だが、前方が急に騒がしくなる。

「なんだろう？」

俺が状況を把握しきれない中、カレンが急に走り始めた。

「カレンっ！くそっ…！」

俺も走ってカレンを追いかけた。

現場につくとカレンと数人の男たちに向かって声をあげていた。

近くには出店のものだろうか調理器具が散乱し、その側には顔にあざを作った男性が尻餅をついていた。

「あなたたち！何してるのよ！？」

男たちの一人が振り向く。

「ああ？なんだよお前。」

違う男も口を開く。

「このイレブンを助けようっての？」

なるほど、チンピラが公園で出店を開いていた日本人に何かの腹いせに暴力を振るったということのようだ。

「おい、こいつ結構可愛いじゃねえか」

一人の男がカレンに近づいてくる。
俺は二人の間に体を入れる。

「ああ？なんだお前」

「悪いね。俺の連れが邪魔したみたいだな」

そう言いつつカレンに離れるようにジェスチャーで促す。

「おいおい、待ってくれよ。俺たちそいつにさんざんバカにされてよ。どうも腹の虫が収まらねえんだ」

「いい気味よ！あんたらみたいなのに生きる価値なんてないわ！」

カレンが後ろから罵声を浴びせる。

やめというほしいのだが：

「なんだとてめえ！」

「おい！ やっちまおう！」

案の定怒ってしまった。

「カレン、下がってて」

相手は4人。

まずは目の前で会話していた男が襲いかかってくる。

男のパンチを左手で避け、右手でみぞおちに一撃を加える。

「がっ」

しばらく立てはしないだろう。

他の三人に向かって構える。

「てめえ！」

今度は三人同時にかかってきた。

真ん中の男に向かい肘を前に出し、体勢も低くし一気に踏み込む。

「うっ」

真ん中の男をタックルで吹き飛ばして左右の二人のパンチをかわす。
相手の背後にまわる。振り向かずに突き出していた右腕を体を回転
させ思いつきり振る。

「ぐあっ」

「三人目！」

あと一人、そう思い残った男を見るとカレンに向かって走っていた。人質をとる気なのだろう。近くに落ちていた手頃な石を拾い投げつける。

「いだっ」

見事に背中に当たって、男は倒れ込む。

「ふう、終わった」

カレンが日本人の店員に駆け寄る。

「あなた、大丈夫？」

あとはカレンに任せておこう。

「てめえ…」

近くにいる男が立ち上がっていた。

「なんだ？まだやられたりないのか？」

「ひいっ！？か…、勘弁してくれえ！」

そう言って4人の男たちは逃げていってしまった。

一発ずつしか殴ってないのに…

そう思いながらカレンの方に目を向けてみると様子がおかしい。

近づく店員らしき男が口を開く。

「あっ！彼氏さんですか？一緒にカリフォルニアドックはいかがですか？」

なんと、先ほどまで暴行されていたのに商品を勧めてきた。

「これが…、今の日本人よ。ブリタニアにすがって生きていくことしかできない…」

いつの間に立ち上がったのか、カレンは俺の耳の近くで喋っていた。彼女の顔に失望の色が見える。

なんかムカついたのでしゃがみ込んで店員にデコピンを食らわせる。

「なっ、何するんですか!？」

俺はおでこを押さえながら驚いている店員に向かって言う。

「俺たちはただの学生だ。そんなにペコペコする必要はない！同じ人間だろ！」

店員はさらにビックリした表情を浮かべる。そんな彼に手を差し出して立ち上がらせる。

「だから胸を張って生きればいいんだ。未来を信じて一生懸命に」

店員や周囲の野次馬も言葉を失っていた。当たり前のことだ。普通ブリタニアの学生が日本人、イレブンにそんなことを言うなんてあり得ないからだ。

「さて、運動したら腹が減ったな。店員さん、カリフォルニアドックを一つください」

店員もようやく自分に戻ったようで急に笑顔になった。

「はい！少しおまちください、すぐに準備しますから！」

店員は散らかっていた器具を片付け始める。…と、突然周囲の民衆から拍手が起こった。

「いいぞお！よくやった！」

「スッキリしたよ！ありがとう！」

どうやら名誉ブリタニア人や日本人に友好的なブリタニア人たちが感嘆の声をあげていた。

なんか恥ずかしい。

ポンツと肩を叩かれた。

「よくそんな恥ずかしいこと言えるわね」

言葉とは逆にスッキリした笑みを浮かべたカレンがいた。

「自分の考えを述べたまでだよ。」

すると野次馬の中から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「君だったのか！？」

声の方向を向くと枢木スザクがいた。

彼は勢いよく駆け寄って来る。

「よかった、生きてたんだね？」

「ああ、君こそ無事だったんだな」

話をしていると店員がカリフォルニアドックを持ってきてくれた。

「ありがとう。」

商品を受け取ると俺たちは近くのベンチに座った。

「この前はありがとう、かばってくれて」

「どういたしまして。」

ようやく枢木スザクにお礼を言うと、ふと後ろのピンク色の髪の毛の女性が目についた。

「そっちの人は？」

「ん？ああ、この子はね」

「ユフィです」

スザクが言い終わらない内に少女が答えた。

「昨日、本国から来てスザクに町を案内してもらってたんです」

「そうだったんだ」

「そういえば無事に釈放されたんだね。心配してたんだ」

「ああ、証拠不十分だったんだ。なんとか助かったよ」

スザクは笑いながら話す。

ふと時計に目を向けるとみんなが仕事を終える時間だった。

「あっ!?!ごめん、もう行かなきゃ」

「そっか、じゃあ、気をつけて」

「ああ、それじゃあな」

俺は二人と別れを告げ、カレンと二人で学園への帰路についた。

歩いているとカレンが口を開いた。

「今日はいろんな事があったわね。喧嘩したり、みんなの前で恥ずかしいことを言ったり、枢木スザクに会ったり」

カレンは笑って話しかけてくる。

「恥ずかしいことって言うなよ…。でも、今日は俺も一つ発見したことがある」

「あら、何かしら？」

「君は病弱じゃない」

「なっ…！？何を言ってるのかしら？そんなことあるわけじゃないじゃない」

カレンの声が明らかに動揺している。

「だって、君。喧嘩をふっかけてきた男たちに向かって、思いっきり走っていったじゃないか」

「そっ…、そんなことあったかしら？ごめんなさい、覚えてないわ」

「はいはい、なかったんだね」

これ以上からかうと怒り出しそうなので、なだめつつからかうのをやめた。

すっかり日が暮れてからクラブハウスに戻ると、待ちかまえていたミレイさんに遅くなったことでこっぴどと叱られた…。

…

…

…

クラブハウス ダイニングルーム―

「おかえりトーヤ」

「おかえりなさい」

「おかえりなさいませ」

ダイニングルームに入るとルルーシュとナナリー、咲夜子さんが出迎えてくれた。

「ただいま…」

すっかり疲れた俺の様子を見てルルーシュが笑みを浮かべて話しかけてきた。

「その様子だと、会長に随分と叱られてきたようだな」

「ああ…、買い物以上に疲れた…」

「トーヤさんが遅くなるのがいけないんです。心配したんですよ」
ナナリーが少し頬を膨らませて怒った顔を作る。

「ナナリー…、君も俺の味方をしてくれないのか…」

最後の希望をこめて咲世子さんを見る。

「トーヤ様がいけないんですよ」

にっこりと笑顔でそう言われてしまった…。
軽くへこむ…。

「そうだ、トーヤ。夕食が終わったらちよつと部屋に来てくれないか？」

「りょーかい…。咲世子さん、俺の分の夕食、残ってますか？」

「はい。今、用意しますね」

その後、みんなとの楽しい夕食を済ませ、ルルーシュの部屋に行った。

「トーヤ、これを見てくれ」

ルルーシュの手元にあるパソコンの画面を覗き込む。

「……エリア11新総督、コーネリア・リ・ブリタニアと……あつ……！」

「どうした？」

新総督のコーネリア・リ・ブリタニアの下の顔写真を見て、思わず声をあげてしまった。

「この子……今日町で会った……この子が副総督、ユーフェミア・リ・ブリタニア……」

パソコンの画面には確かに今日見たピンク色の髪をした少女が写っていた……。

……
……

.....

翌日――

「本日からアッシュフォード学園に通うことになりました。枢木スザクです、よろしくお願いします」

.....

MEMOY-6 奪われた仮面

枢木スザク——先日、の純血派によってクロヴィス暗殺の容疑をかけられたスザクをゼロと名乗る黒ずくめの男と以前からブリタニアに対し反逆を続ける蒼の騎士——シェイドによって強奪された事件——枢木スザク強奪事件で一躍有名になった男。しかし、クロヴィス暗殺の嫌疑は彼の帝国内における立場を悪くしていた。

「なあ、あいつがクロヴィスを殺したんだろ？」

「バカ、殺したのはゼロってやつだろ！」

「でも、何かやましいところがあるから捕まっただんだろ？」

「レジスタンスのメンバーって噂もあるぜ」

「さすがに学校もそこらは確認してるだろ」

生徒たちは席に座ったままのスザクを遠巻きに眺めていた。そんななかで同じ日本人であるためかカレンだけが心配そうな目で、スザクを見つめていた。

「イレブン、怖い…」

教室の隅で話していた生徒会メンバー三人のうち、ニーナだけが異常にスザクを怖がっていた。

「怖がってるだけじゃだめだよ。話してみないと」

そう言ってスザクに話しかけようとするシャーリーをリヴァルは腕を掴んで止めた。

「君、勇気ありすぎ」

リヴァルが彼女を止めたのは、遠巻きにされているスザクと関わることで彼女にまで害が降り懸かることを防ぐためだった。

その時ルルーシュが立ち上がって歩き始めた。

ルルーシュはスザクの後ろを通過して教室のドアまでくると襟を人差し指でつまみクイツと上げる仕草をしてそのまま教室を後にした。

「それは何かの合図かい？」

その仕草に気づいたトーヤが廊下から声をかけた。

「ああ、ついてきてくれ。あいつにちゃんと紹介しておきたい。」

「了解。」

二人で連れ立って屋上の手すりの所まで来ると、トーヤが口を開いた。

「ビックリしたな。」

「ああ、まさかあいつが入学してくるなんて」

日本人がブリタニアの学校に入学してくることはあり得ない話ではない。事実、このアッシュフォード学園にも数名の名誉ブリタニア人がいる。

だが、ルルーシュとの旧知の親友であるスザクが入学してくるなど、予想もできなかったのだ。

「とにかく生きててよかったな。」

「ああ。」

二人がそんなことを話していると屋上のドアを開け、スザクがやってきた。

「7年ぶりに使ったよ、このサイン。」

「屋根裏部屋で話そう、だったね。よかった、二人とも元気そうで。」

スザクは温和な笑みを浮かべ、トーヤたちに近づいてくる。トーヤは彼に声をかけるため振り向いた。

「やあ、また会ったね。」

「ふふっ、そうだね。」

スザクは何か納得するように頷いた。

「やっぱりルルーシュと馬が合いそうだ。珍しいね、ルルーシュ。」

「そうでもないさ。」

ルルーシュはそう言うが、少し恥ずかしそうな笑顔を浮かべた。

「そういえばまだ、ちゃんと自己紹介をしてなかったな。トーヤ||
リカルド、よろしくな。」

自己紹介を終えると、トーヤは手を差し出した。スザクはその手を握りながら自己紹介をする。

「僕は枢木スザク。スザクって呼んでよ。」

二人が握手をしているのをルルーシュは嬉しそうに見ていた。スザクは笑みを浮かべるルルーシュを見ると、何かを思い出したように急に真面目な顔になった。

「あつ、そうだルルーシュ、シンジユクの女の子は!？」

「いや、途中で離れ離れに…そっちの方が分かるんじゃないか!？」

「それは…ごめん。分からないんだ。」

スザクは落胆の表情になる。

しかしルルーシュはあの緑髪の少女が本当はどこにいるか知っている。なぜならあの少女はクラブハウスに住み着いているからだ。

「スザク、そんなに落胆するなよ。とにかく君が生きててよかった。」

落胆したスザクにトーヤが声をかけると彼は顔を上げた。

「そうだね、ありがとう。君たちも無事でいてくれてよかったよ。」

三人はその後もうからない雑談を続けた。ルルーシュとスザクは初めて会ったルルーシュをスザクが殴りとばしたはなしや殺されそうになったナナリーをスザクが助けた話などルルーシュたちが日本に来たばかりの頃の話をしてくれた。

笑顔で話してくれる二人の関係が、記憶のないトーヤには羨ましく感じられた。

…
…
…

ルルーシュを探していると階段の踊場で電話をしているのを見つけた。

『コーネリアに“サムライの血”が潰された。なあ、俺たちもそろそろ…』

「分かっている、安心しろ。次はこっちから連絡する。」

ルルーシュはそう言うと言電話を切った。

「今のは扇さんか？」

ルルーシュに声をかけるところこちらを向く。

「そうだ。新総督のコーネリアが本格的に動き出したらしい、俺たちも気合いをいれないとな。」

俺はルルーシュのいる踊場まで行って、外を見た。外では水道で必死にTシャツらしきものを洗っているスザクがいた。

「ルルーシュ。」

「ああ…分かっている。」

スザクが洗っているTシャツをよく見るとスプレーペンキによって

文字が書かれているのが見て取れた。

「いじめ…か」

ルルーシュは複雑な表情をしたまま歩き始めた。

…

…

…

クラブハウス ダイニングー

俺とルルーシュはダイニングでナナリーの帰りを待っていた。

「ナナリーは驚いてくれるかな？」

「当たり前だ。死んでいたと思っていた旧友と7年ぶりに会えるんだ。驚いくに決まっている。」

「ん？ 来たみたいだ。」

ナナリーが帰ってきたようでドアの外で声が聞こえた。ドアが開き、咲世子さんとナナリーが入ってきた。

「おかえり、ナナリー！」

俺たちはわざと声を合わせておかえりと言ったが、おかしくてつい頬が緩んでしまう。

「ただいま、お二人とも。どうしたんですか？何か様子が変わですよ。」

ナナリーもおかしかったのか、微笑む。

ルルーシュは立ち上がって、声を弾ませた。

「今日は俺たちからプレゼントがあるんだ。」

ルルーシュは口に手をあてて咲世子さんに静かにするように指示し、キツチンの方に手招きしてスザクを部屋に招き入れた。

スザクはゆっくりと姿を現すと、ナナリーを見て喜びを隠すようにしてナナリーに近づいた。

スザクはナナリーの近くにひざまずくと車椅子の肘掛けに置かれたナナリーの手をそっと握った。

「あつ。」

ナナリーはスザクに気づいたように自分の手を握っている手を両手で握りしめた。

「スザクさん！？…よかった、やっぱり生きていたんですね。」

ナナリーはスザクの手を自分の額に引き寄せて閉じられた瞳から涙を流した。

「ふふっ」

自然と俺はルルーシュと顔を見合わせて微笑んでいた。

…

…

…

「スザクさん、今日は泊まっていけるんですね！」

食後のお茶を飲んでいるときにナナリーが跳ねるように身を乗り出した。

「ナナリー、スザクはもうここの生徒なんだ。いつでも会えるよ。」

興奮して話すナナリーをルルーシュが諭す。こんな光景を見ていると二人はやはり兄妹なのだな、と思い羨ましく思える。

「軍隊の仕事があるからいつでもってわけにはいかないけどね。」

「軍隊！？危なくはないのですか？」

ナナリーは心配そうな声を出す。軍隊となると命をかけた闘いをすることが多い。まして本当はルルーシュや自分の敵側になるわけだから心配でないわけがない。

「安心して、整備部に配置換えしてもらったから危なくないよ。」

「そうか、整備部か。」

ルルーシュは安心したような表情を浮かべるとお茶のおかわりを入れるために立ち上がった。

「僕も手伝うよ！」

スザクはそう言うのと急に立ち上がった。
それにルルーシュは軽い笑みで返す。

「いいから座ってろって、7年前と違ってこっちが主賓なんだ。」

「それもそうだね」

スザクは納得したのかゆっくりと椅子に座り直した。

「なんかお前、おとなしくなったな。」

「そう言う君はガサツになった。」

「はいはい。」

ルルーシュはそう言うのとキッチンの方へ消えていった。

「スザク、そう言えば昨日一緒にいた女の子。あれ、ユーフェミア
皇女殿下だろ？」

「あれ？よく分かったね。」

スザクはわざとらしくおどけてみせた。

「おどけるなよ、分かるに決まっている。テレビに出ていた皇女殿下とまったく同じ容姿だからな。」

「はははっ！そうだね。ごめんごめん。昨日偶然会ってね、町を案内してたんだ。」

「二人とも、ユフィお姉様に会ったのですか!？」

「ああ、昨日スザクが町を案内してたんだ。けっこう仲良さそうだったな。」

「そうですか。ユフィお姉様も日本へ…。できれば会いたいですね。」

ナナリーはうつむいて寂しそうな表情を見せた。やはり死んだことになっているために会いに行くことはできないと理解しているのだろう。

「ナナリー、大丈夫だよ。いつか会えるさ。」

スザクは優しくナナリーに話しかける。ナナリーもそれに応え、顔に笑みを浮かべた。

「そうですね、それまで我慢します。」

「そうだよ。今は我慢…って、マズいな。もう帰らなきゃ。」

スザクは時計を見ている。そこヘルルーシュが戻ってきた。

「どうしたスザク？」

「ごめんルーシュ、もう帰らなきゃ。」

スザクは立ち上がって、カバンに荷物をまとめ始めた。

「玄関まで送ってくよ。まだこの構造が分からないだろう？」

「ありがとう、トーヤ。それじゃあ、また来るから。じゃあね、ナナリー。」

「はい、スザクさんも気をつけて。」

スザクはナナリーにサヨナラを言うと部屋を出て歩き始めた。
俺とルルーシュでクラブハウスを案内して玄関まで連れて行った。

「ここでいいか？」

「二人とも、ありがとう。」

スザクはそう言うのと急に深刻な表情になり、一呼吸置いて話し始めた。

「二人とも！学校では僕たちは他人でいよう。」

「なっ…、何を言うんだ！俺もトーヤもお前を歓迎している。なぜだ！？」

「だってどう説明するんだ！？イレブンと友達だって！下手すれば君の正体がバレてしまう。ナナリーだって…」

「スザク、それは心配しすぎだ。俺たちはお前を…」

俺の言葉の途中でスザクは突然歩き始めた。

「ごめん、帰るよ。今日は楽しかった。また明日。」

「おい、待て！」

スザクはルルーシュの制止に足を止めた。しかし、こちらに振り返って放った言葉は予想だにしないものだった。

「また明日…か。こんなことが言える日がくるなんて…思わなかった。」

俺たちは歩いていくスザクに何も言えなかった。その言葉は彼が過ごした10年間を表しているようだった。

ルルーシュも同じように感じていただろう。どこか寂しげな表情をしていた。

…

…

…

翌日―

俺は放課後になって時間ができたため学園の敷地内を散歩していた。

「トーヤ、何してるの？」

「ああ、君か。」

後ろを振り向くと帰宅するためかカバンを手にしたカレンが立っていた。

「俺は散歩してたんだよ。君は帰るところ？」

「ええ、待ち合わせしてて。」

そう言うとカレンは少し怒ったような顔つきで睨みつけてきた。

「カレン、何でそんなに睨むんだ…」

「さあ？誰かさんが約束を忘れたからかしら。」

「あっ！」

思い出した。今日はカレンと一緒に租界探索するのを約束していたのだ。マズい、カレンは相当怒っているようだ…。

「カレン、あの…ごめん。」

「さあ？何を謝っているの？」

カレンは頭を下げた俺を冷たい目で見下ろしていた。

「いや、本当にごめん！」

俺が必死で謝っていると頭の上から笑い声が聞こえてきた。頭を上げるとカレンが口元に手をあてて笑っていた。

「そんなに必死に謝らなくてもいいのに。あなたの必死さに免じて許してあげる。」

「よかったあ。さっきの君は本当に怖かったよ。」

「あら？そうかしら？でも、約束を忘れていた罰として私の行きたいところにつき合ってもらおうわ。」

「俺はどこに何があるか分からないから、言われなくても君の行きたいところに行くことになるんだけどね。」

「ふふっ。それもそうね。」

カレンが軽く微笑む。俺もなぜか笑いがこみ上げてきて、二人で笑っていた。
すると…

『猫だ！！！』

「「猫？」」

拡声器からミレイさんの声が聞こえてきた。一体何をするのだろうか。

『猫を捕まえて私、ミレイ・アッシュフォードまで連れてきてください！！捕まえた部は部費を優遇します！ちなみに猫の持っているモノは私に！私に！私に！ケホッ、ケホッ、ケホッ…』

「何をしているんだ会長は。」

「さあ？」

会長はせき込みながらもさらに放送を続ける。

『さらにい……捕まえた人には生徒会メンバーからキスのプレゼントだあ!!!!!!』

「何っ!？」

「ということは私たちも!？」

『『そうですよねっ!?!』』

突然俺たちのいる場所の左右の茂みから声が聞こえてきた。

カレン側には男子生徒たちが、俺の側には女子生徒たちが並んでいた。

まずは男子生徒たちが口を開いた。

「マジでいいの?」

「お嬢様の唇…」

「ほっぺたってオチはないよな。」

「ええっ！？場所指定できるの？」

どうやらカレン親衛隊のようだ。

彼らのやりとりを見ていると女子生徒に突然声をかけられた。

「トーヤさん！！」

「はいっ！？」

先頭の女子生徒が顔を赤くして何か話し始めた。

「私たちトーヤ親衛隊があっ！…必ずやあなたの唇をおっ…！」

『奪って見せます！！！！』

女子生徒たちが声を合わせて叫んだ。
なかなか息が揃っている。

「じゃなくて！唇を奪う！？」

「カレン親衛隊、ファイトオー…」

『オー…ッ！！！！！！』

「トーヤ親衛隊、ファイトオー…」

『オー…ッ！！！！！！』

「みんなあ！行くぞお！！」

「ワァ————ッ！！！！！！」

そう言って生徒たちは一斉に駆け出していった。

トーヤ親衛隊なんていつの間にできたんだ！？
いったい何の目的で！？

「くっ…。冗談じゃない！おいつ、カレ…」

カレンに声をかけようとする、カレンは目を大きく見開いていた。

「ちょっと…待ってよ！私の初めてのっ…！」

そう言う、カレンが急に走り始めた。病弱設定じゃないのか！？て
ゆーか初めてって…カミングアウトするなよ！そんなことを思いつ
つも俺も後を追って走り出した。

「カレン！まずは校舎の方を手分けして探してみよう。」

「分かったわ！私は部室棟の方を探してみるわ。」

「了解！じゃあ、俺は校内を探してくる。それじゃあ！」

そう言って俺たちはバラバラに走り出す。どうあっても会長のお遊
びでキスはしない！

…

…

…

時計塔 付近――

「はあはあ。くそっ！　いったいどこにいるんだ。」

さっきカレンから電話があつてこの近くにいるのは間違いない。
だがまったく姿形すら見つからない。
とりあえず時計塔の方へ行ってみよう。

「なっ…！　トーヤ！？」

走っていると後ろから急に声をかけられた。

「ルルーシュ！？　君も猫を追っているのか！？」

「ああ、仮面を奪われた。」

「何っ！？　猫にか？」

ルルーシュはゆっくりと首肯する。なんてことだ…。ゼロの仮面を
猫に奪われるなんて…。

「あれっ？　二人とも、何でここに？」

また声をかけられた。声の主はスザクのようにだ。

「スザク、君も猫を追っているのか!？」

「うん。会長さんが猫を探せて。」

「ニャアーン」

スザクとの会話の途中に時計塔の上から猫の鳴き声が聞こえてきた。

「猫は上か!」

俺は階段に足をかけ走り始める。

しかし、スザクも一緒に走ってついてきた。

「スザク!？ここは俺とルルーシュで捕まえるから下にいろ!」

そう言ってもスザクは止まろうとしない。マズい、軍人であるスザクに仮面を見つかるわけにはいかない。

「大丈夫だよ。7年前から体力はルルーシュよりもあるから！」

「古い話を持ち出すな！」

ルルーシュの声が後方から聞こえたが止まるわけにはいかない。
最上階についた。しかし猫の姿が見えない。

「猫はっ!？」

「トーヤ、外にいるよ！」

スザクは窓から上を指さしていた。近づいてスザクが指差す方を見る。てっぺんに設置された鐘の下に小さな影が見えた。

「よし、行くか。」

窓の外に体を乗り出す。続けてスザクも体を乗り出す。

「僕も行くよ。」

「スザク！君はそこにいろ！」

「二人でやった方がいいだろう？」

「スザク！トーヤに任せて戻ってこい！」

ルルーシュも窓から顔を出した。

「ルルーシュ、大丈夫だから。任せて。」

「この分からず屋がっ！」

ルルーシュが窓から体を乗り出して追いかけて来ようとする。
だがルルーシュは窓枠を乗り越えた瞬間足を滑らせてしまった。

「「ルルーシュ！」」

スザクは手を伸ばし、ルルーシュの手首を掴んだ。

その時、後ろから鐘の音が聞こえたが耳に入らなかった。
俺も降りていってルルーシュの手首を掴み引き上げる。

「安心、しすぎだよ。」

「あ、ああ。悪いな。」

ルルーシュは無事でスザクと会話していた。
俺はスザクが気づく前に上まで登って猫を捕まえた。

「なんだよ、仮面外れているじゃないか。」

猫の頭に仮面はなく、時計塔の飾りに引っかかっていた。

「二人とも、猫を捕まえたぞ！」

…

…

…

猫を抱きかかえたまま時計塔の階段を下り外に出ると、生徒たちが
周りを囲んでいた。

「トーヤ、お疲れ様〜。」

シャーリーが笑顔で迎えてくれた。
続いてこの騒ぎを引き起こしたミレイさんが詰め寄ってくる。

「その猫、何か持ってた!?!」

「あれ? ルルーシュは?」

「上にいるよ、リヴァル。何かやることがあるらしくて彼と戻ってきました。」

俺は後ろにいたスザクの方を見て、彼に前に来るように促した。
周りを見渡すと予想通り生徒たちは黙り込んでしまった。

「ルルを助けてくれてありがとう!」

「えっ?」

突然発せられた声に驚き再びスザクの方を見るとシャーリーが近寄ってルルーシュを助けてくれたお礼を言っていた。
続けてリヴァルも近寄ってきた。

「やるじゃん、転校生!」

リヴァルとシャーリーがスザクに感謝の言葉をかけると、ミレイさんも近づいてきた。

「ねえ、その猫何か持ってたなかった？」

「いや、僕が見つけたときは何も。ルルーシュがとってくるものがあるって上に残りましたけど。」

「それだあ！ルルーシュの恥ずかしい秘密！」

「えっ？」

ミレイさんが勢いよくスザクに指を突きつけるとさすがにスザクも驚いて体をビクツとさせた。

「そう言うことですか会長。」

「遅かったなルルーシュ。」

戻ってきたルルーシュに声をかけるとミレイさんががっくりと肩を

落とすのが見えた。

「なあゝんだ。結局、分らず終いか。」

「まったく、ルルってかつこつけどから。」

シャーリーはそう言うがルルーシュが無事に戻ってきたことで安心しているようだ。

その時、カレンが口を開いた。

「ねえ、三人って友達なの？」

その言葉で周囲が再び凍りつく。日本人と知り合い、それだけで生徒たちからは冷たい視線が浴びせられる。でも…

「ああ、俺とスザクは友達だ。なっ！」

「えっ？」

スザクに笑って話しかける。暗くなっていたスザクの顔にも安堵の色が浮かんできた。

続けてルルーシュも口を開く。

「会長、こいつを生徒会に入れてもらえませんか？」

「ルルーシュっ…。」

ルルーシュの言葉をスザクは遮ろうとする。俺はそんなスザクの肩に手を乗せ黙っているように促す。

「ここでは生徒は必ず部活に所属しなければならない。でも…。」

ルルーシュは周囲を見渡し、それが不可能であると会長に説明する。ミレイさんは少し考える素振りを見せたがすぐに口を開いた。

「しょうがないな。副会長の頼みじゃ断れないじゃない。」

その言葉を聞いて俺はスザクの背中を思いっきりたたいた。

「やったな！スザク！」

「痛いよトーヤ…。」

痛みに顔を歪めながらもスザクは嬉しそうに微笑んだ。

「よし、じゃあ歓迎会は新人のおごりな。」

「たかるな！」

リヴァルの冗談にシャーリーが本気でツツコんだ。なかなかのコンビネーションだ。

「そうだ！ トーヤ、商品はどうする？」

「賞品？」

「そつ、キスのお相手よ。」

そうだ思い出した。猫を捕まえた人には生徒会メンバーからのキスのプレゼントがあるんだ。

「えー…と、ちょっと待ってください。」

まずシャーリーはルルーシユの事が好きだ。つまり排除。ミレイさんはリヴァルが狙ってるって聞いたし。ニーナは何かかわいそうだし。後は……

「あーんもう、焦れたいなあ。」

「仕方ないじゃないですか会長。みんなとは毎日顔を会わせてるんですよ。選ぶにくだすって。」

「まあーったく、あんたも朴念仁ねえ。好きな子を選べばいいのよ、カレンとか。」

「ぶほおっ。ちょ……ちよっと会長、俺がカレンが好きみたいに言わないでくださいよ!」

「あらあ? そうじゃないの? 今の反応を見ればもう……ねえカレン。」

会長がカレンに視線を向ける。

カレンは顔を真っ赤にして下を向いてしまった。

「ほうほう、これはこれは。カレンもトーヤがお望みなあ?」

下を向いていたカレンが真っ赤にした顔を上げて喋り始めた。

「か、会長！そんなじゃないです…から。」

そう言いつつもカレンは再び顔を下げる。マズい、今のカレンの反応を見たカレン親衛隊から射るような鋭い視線を感じる。それになぜか周囲の女子生徒たちが泣き出しそうだ。この場合は…

「逃げろ——！」

俺は一気に走り始めた。

「待て————！」

「なんで追ってくるんだ！？」

周囲にいた生徒たちが男女構わず追いかけてきた。

…

…

…

「はあはあ、撒いたか。」

俺は再び時計塔の近くに戻ってきていた。他の場所はミレイさん指揮する生徒たちが手分けして探していた。

「ここも危ないな。」

というよりなんで追いかけられないといけないんだ！？
俺はその場を離れようとする。

「トーヤ。」

後ろから名前を呼ばれた。
バツと振り向くとそこにはカレンがいた。

「カレンか、驚かさないでくれよ。」

「ごめんなさい、でもさっきのこと聞きたくて。」

「さっきの？」

「ええ、キスのこと…。」

「えっ？」

意外だった。確かにカレンとはよく出かけていたが、それは会長に租界をあんないしてほしいと頼まれていたためでそんな素振りは一切見せなかったのに。

「それは…俺とのキスってこと？」

カレンは黙ってコクリと頷く。

頬を赤く染めた彼女は俺の知っている病弱な令嬢とも男勝りな紅月カレンとも似ても似つかない初めて見る彼女…。俺はゆっくりと彼女に歩み寄る。

「カレン…俺は…」

「今だ！捕まえろー！」

「何っ!？」

周囲からカレン親衛隊らしき男子生徒たちが姿を見せた。

「カレン！これは…！？」

「みんなに頼まれちゃって、ごめんなさい。」

カレンはいつもどおりの柔和な笑みを見せる。
ハメられた！

俺には彼女の笑みが邪悪な意志の宿ったものに見えた。

「捕まえろー！！！」

「カレンさんの唇を守れー！！！」

「くそっ！しつこいな！」

カレン親衛隊が追ってくる中そう言っ
トーヤは行ってしまった。

「トーヤ、ごめんね。本当は私……」

カレンはそう言い残し、その場を後にした。

MEMOLYー7 コーネリアを撃つ（前書き）

地震の影響でなかなか執筆できませんでした。

スイマセン（汗）

MEMOリー7 コーネリアを撃つ

今日俺たちはサイタマゲッターへ来ている。理由はエリア11総督コーネリアがこのサイタマゲッターに対して掃討作戦を展開するとテレビで報道したからだ。

「シェイド、本当にたった4人で大丈夫なの？」

「そうだ、仲間はまだいる。なのに4人なんて。」

カレンと扇さんが心配そうな顔をする。まあ、それが当たり前なのだろう。コーネリア率いるブリタニア軍とたったの4人でやり合おうというのだから。

「心配するな。策はある。ゼロ、すでに仕込みは終わったか？」

ゼロを見ると真っ黒な仮面に光を反射させながら外の様子をうかがっていた。

「もちろんだ。ブリタニア軍の作戦行動が始まったと同時に私たちも動くぞ。」

「了解。」

…

…

…

アッシュフォード学園―

生徒会に猫が来た。

この猫は先日の騒ぎで俺が拾ったのをスザクができれば飼いたいというので生徒会室に置くことになったのだ。

「ふんふんふん。」

スザクは鼻歌を歌いながら廊下を歩いていた。手にはどこから採ってきたのか、ねこじらしを持っている。彼は猫が好きなのか、生徒会で飼うと決めたときは本当に飛び跳ねて喜んでいた。

生徒会室のドアを開けて入っていくと中ではシャーリーが猫のための器具を床に広げていた。

…

…

……

ブリタニア軍 G-1内―

「ゼロは現れると思うか？」

「さあ、どうでしょうか。」

ここはブリタニア軍本部として使用されているG-1館内だ。部屋の中で最も高い位置に座る凛とした風貌の紫髪の女性―彼女はエリア11総督コーネリアだ。前総督のクロヴィスとは違い戦略に通じ、また政略に通じた有能な部下を持っている。

コーネリアが「ゼロは現れると思うか」と問いかけた男がそれだ。ダールトン将軍―年の頃は40程である。先程政略に優れていると言ったが、それだけでなく彼はブリタニア軍内でも随一の戦略家でもある。

コーネリアの後ろには戦局を映し出すモニターに鋭い視線を送る長身で長い髪を後ろで一つにまとめた男がいる。

彼の名はギルバート・G・P・ギルフォード―コーネリアの唯一無二の専任騎士で軍略に長けた男だ。もちろん皇族の専任騎士ということとは少なくともコーネリア軍の中で一番の使い手である。

エリア11に派遣されたコーネリア軍を支えているのは主にこの三

名である。

「よし、作戦開始！サイタマゲットーを殲滅せよ！」

コーネリアはサイタマゲットーを包囲させていたKMF部隊に命令を下す。

ブリタニア軍は侵攻を開始した。

サイタマゲットー市内――

「どうしてです！？私たちは何もしていないのに！」

サイタマゲットー内ではブリタニア軍による虐殺が始まっていた。

「その何もしないことが悪いのだ！」

「なっ……！」

「貴様等是我々に対しテロリストの情報を隠した。それが罪だ！」

そう言うブリタニア兵は右手を上げた。

「撃てえ！」

G-1艦内―

「この状況、シンジュクゲッターに似ていないか？」

コーネリアは元クロヴィス配下の参謀に問いかけた。

「あつ、確かに。そうでございますね。」

モニターにはゲッターを隙間なく取り囲む光点が点滅していた。

「ゼロが私の読み通りプライドの高い人物なら、この誘いに乗ってくるはず。」

「確かに。姫様の仰る通りです。」

…

…

…

「くそっ！コーネリアめ！」

「敵の侵攻開始と共に地下協力員も一斉に逮捕されたのか連絡がつかありません！」

サイタマゲットーにいるテロリストたちはブリタニア軍による攻撃で絶体絶命の状況に陥っているために、会議を開いていた。

「どうやら街道はすべて封鎖されたようです…」

「もう…だめなのか…」

集まっていたテロリストたちの中には諦めの空気が漂っていた。その時、一人のテロリストがその場に走り込んできた。

「はあああ、こ、これを聞いてくれ！」

その男は手に持っていた無線にスイッチを入れ、体の前に差し出した。

『私は…ゼロ。』

「なっ…!!ゼロだ…ゼロが来てくれたぞ!」

「じゃ、じゃあ、蒼の騎士も来ているのか!？」

『無論だ。君たちには私たちの指揮下に入ってもらおう。よろしく頼むぞ。』

…

…

…

ゼロは無線を切り、奪い取ったサザーランドに乗り込む。

『準備はいいな?』

「もちろん!」

そう言って俺はキーを差し込み無頼改を起動させる。

「ゼロはこれから単独で動く！カレン、扇は私に続け！」

『了解！』』

通信から聞こえてきた力強い声を聞き、アクセルを踏み込んだ。

ブリタニア軍から奪ったサザーランドにはすでにここにいたテロリストたちが乗り込んでいるはずだ。

俺たちは隠れていた建物から出て正面に位置するまだ土台がしっかりとしている高いビルに登った。

『シェイド、18秒後にそこから6時の方向を4機編成の部隊が通過する。』

「了解。二人とも、6時の方向へ銃口を。」

18秒後、やってきたサザーランド部隊に銃撃を浴びせ全機撃破する。

「敵はこちらの位置を把握したはずだ。何機か向かってくるだろう。私が撃破に向かう。」

俺はビルから降下し地上に降り立った。

…
…
…
アッシュフォード学園―

「ねえ、ルルとカレンって何かあったのかな？」

シャーリーは暗い顔でスザクに話しかけた。スザクは意味が分からないといった表情を浮かべていた。

「だってこの間、二人で何かしてて。すごく親密そうだった。」

「ルルーシュとカレンが？」

スザクは考える。ルルーシュとカレンは自分と会った時期は全く変わらない。それなのに親密そうだった？

「僕にはトーヤとカレンがいい感じに見えるけどね。昨日も一緒に出かけてたみたいだし、今日だって。」

スザクの言葉にシャーリーの表情が少し明るくなる。

「やっぱりそうなのかな。ルルとカレンは何もなかった…ってことだよね。」

「そうそう、気にし過ぎだよ。」

スザクはそう言ってシャーリーに笑いかけた。

…

…

…

「遅い！」

正面にいたサザーランドの攻撃をかわし廻転刃刀で両足を切り落とす。

コックピットが射出され、サザーランドは崩れ落ちた。

8機目を倒し状況を確認する。

「ん？コーネリア軍が退いていく？」

その時通信が入った。

『シェイド、お前たちは退くんだ。後は私がやる。』

「了解、気をつけろよ！」

通信を切りカレンと扇と共に戦場を離脱して安全な場所まで後退する。

無頼改からキーを抜き、機体から降りる。

「大丈夫か？二人とも。」

「ああ、俺たちは大丈夫だ。」

扇さんに続きカレンも降りてきた。やはり皆一様に疲れた様子を見せていた。

「かなり疲れてるみたいだな、カレン。」

「当たり前ですよ。あんな大軍の中に放り出されたんですから。」

言いつつも彼女は笑顔を見せてくれた。

「俺がゼロの様子を見てくるから二人はトラックに機体を積み込んで帰還してくれ。」

「分かりました。気をつけてくださいね。」

「ありがとう、カレン。」

俺は徒歩で再び戦場に戻る道を歩き始めた。

…

…

…

アッシュフォード学園―

「私ね、最初ルルのことあんまり好きになれなくてね。」

スザクは猫のための遊具を組み立てた後、再びシャーリーの話を聞いていた。

「でも一年生の時、街で交通事故を見かけたの。明らかに若い人の方が悪くてね。それなのにぶつけられた人たちは何もできなかった

…。でもね、その時ルルがバイクから降りて近くにいた車のクレイン車のフックを若い人の車に引っかけちゃったの。」

スザクはその場面を想像する。若い方は強気な態度で文句を言っていたのだろう。ぶつけられた方は老人なのか言い返すことができない。

「そのままクレイン車が発進して、若い人は慌てて追いかけてったの。間接的に懲らしめたことになるのかな？でもルルはいつも通りつまらなそうな顔をしてさ。何こいつ？って思って興味持ちちゃって気づいたらいつの間にか…」

「好きになっていた。」

シャーリーの先の言葉を予測してスザクは言葉にする。
彼女の顔が少しずつ赤く染まっていく。

「そう…なるのかな？」

シャーリーは慌てたように言葉を発し、下を向いてしまった。

「よし、じゃあ僕がルルーシュに直接聞いてあげるよ！」

スザクは生徒会に設置された電話を手に取りルルーシュに電話をかける。

ルルーシュは撤退するブリタニア軍に紛れ、敵の本陣近くまで来ていた。彼の電話が突然なり始める。

「ん？生徒会？猫祭りの打ち合わせは明日のはずだが。」

シャーリーはルルーシュに電話をかけるスザクから受話器を奪い取ろうと飛びかかった。

「ちょっと、止めてよー！」

そう言って奪い取った電話を切ってしまった。

一方ルルーシュ――

かかってきた電話が数回のコールで切れてしまった。

「ん？結局何だったんだ？まあいいか。」

その頃、生徒会室――

「任せて、ルルーシュから上手く聞き出してあげるから。」

「ちょっとやめてってば！」

二人は受話器を取り合っていた。スザクがかけようとするがシャーリーが邪魔して電話できない。

そのうち二人は足がもつれて転んでしまった。

「きゃっ!？」

「うわっ!？」

倒れたシャーリーの上にスザクがのっかってしまう。

「あっ…、ごめん。いっ！」

スザクの手を鋭い痛みが襲う。猫が容赦なく噛みついていた。

「ごめん、痛かった？」

「かなり…。」

：

……

……

G-1艦内

「行ってくれるか？我が騎士、ギルフォードよ。」

「拝命、ありがたく承ります。」

コーネリアは部隊を下げ、とうとう自分の親衛隊に指示をだした。
コーネリアの騎士ギルフォードは最新鋭の第五世代KMFグロース
ターに乗り込み配下を引き連れ発艦した。

「ふっ、親衛隊でどうかしようとは。」

ルルーシュもこの動きを見て即座に指示を出す。

「サザーランドは一機、識別反応をONにしろ。」

『了解。』

親衛隊は予想通りサザーランドのいる場所に向かった。だが、それは救援ではなく破壊のためだった。モニターから孤立していた光点が消える。

「確認しない！？ならば、P－1は識別反応をONにしろ。P－2、P－4は隠れて敵の背後をつけ！」

だがその作戦も失敗する。増援で来たグロースターに背後を突かれ、伏兵を見破られた。

「くそっ！P－3、P－5！聞こえるか！？」

しかし応答はない。

「逃げただと！？」

その時通信が入る。

『目の前にグロースターがバカみたいに止まってるぜ。』

「何！？それは罠だ！後ろから来るぞ！」

『うっせえ！今やないでいつやんだよ！なっ！？うわああああ
！』

「おいっ！Pー7！くそっ、マヌケめ。残っている者はPナンバー
から順に報告を。」

ルルーシュが残った部隊をまとめようとしたとき敵の本陣からオー
ブンチャンネルで声が聞こえた。

『作戦終了。全部隊はひきあげてください。』

優雅で威厳のある声が告げた言葉。これは一つの結果を表していた。

「俺の…負けだど？…くそっ！ゲームにすらなっていないじゃない
かっ。」

だが、次の放送でルルーシュはさらなる危機に陥ることになる。

『ナイトメアのパイロットは素顔を見せよ！』

そう言うとグロースターがサザーランド部隊の前に止まり一機ずつ

確認を始めた。

「なっ…、（どうする？素顔を見られたら、ギアス、いやこの状況でパイロットにかけられるわけがない。奇襲による強行突破！無謀すぎる…。いっそゼロであることをバラしてしまうか？しかし…）」

『おいっ。』

「はっ！」

気づくと目の前に親衛隊が立っている。

『どうした？はやくコックピットを開けろ。』

「申し訳ありません。先程の戦闘でシステムが損傷を受けたようです。」

『そうか、ではこちらで開けよう。後ろを向け。』

ここまで来るととうとう頭に浮かぶことがなくなった。頬を冷たい汗が撫でるように流れ落ちた。

『どうした、早くしろ。』

「……分かりました。」

諦めの言葉。コックピットのスイッチに手を伸ばした。

『ゼロだ！蒼の騎士もいるぞ！』

「えっ？」

突然の言葉に伸ばした手を止める。一機のサザーランドが見上げる方を見上げると、確かにゼロの仮面をかぶった人物と蒼の騎士がそこにいた。

「いったい何が？しかし、乗るしかない！」

サザーランド部隊がゼロたちに向かっていく。ルルーシュはサザーランド部隊に紛れ、戦場を離脱した。

…
…

.....

「はあはあ。」

ルルーシュは暗い地下道を走っていた。

「お前たちっ！」

しばらく行くとゼロと蒼の騎士がいた。何も言わずにたたずんでいる。

「トーヤ！退けといったろう！それにお前は！」

ルルーシュはゼロに向かって叫んだ。ゼロは仮面を外して素顔を露わにする。

「驚いたか？」

「C. C. ! 余計なことを！」

「バカが！こんなことは聞いていないぞ！まだ俺が信じられないの

か!？」

俺は思わず怒鳴っていた。怒りによるものだが、それは自分を信じてくれなかったルルーシュではない。信じてもらえなかった自分に対してだった。

「俺にだってあのくらいの軍隊がいれば勝てたんだ！」

C・Cは先程と声のテンションをまったく変えずに話し始めた。

「やはりお前は阿呆だな。あのくらいの軍隊を揃えることも実力だ。」

ルルーシュは屈辱的な表情を浮かべていた。だが、しょうがない。自分の力を過信した罰なのだから。

「だったら：集めてやるさ。誰にも負けない：俺の軍隊を。トーヤと共にだ！手伝ってくれるな？」

「もちろんだ。俺たちの未来のために！」

MEMOLY-8 黒の騎士団

「会長：みんな来るんじゃないかなかったですか？」

俺は少しだけ不機嫌な声でミレイさんに文句を言う。

「フッフーン。いいじゃないの。あなたはみんなが行くって言わないとこういうのも行きそうにないじゃない。」

ミレイさんがテンションの高い声で返事を返してきた。

「なんですかそれ：」

そう言って俺は窓の外に目を向けた。

俺は今、ミレイさんとシャーリー、ニーナと共になぜか河口湖に向かうリニアレールに乗っている。

理由は簡単。生徒会全員で旅行するからと言われたからだ。

しかしルルーシュとカレンは用事、スザクは仕事、リヴァルはアルバイトなどそれぞれの理由で抜けていた。

夜になると男子は自分だけなのでかなり寂しい。

「夜なんて俺は部屋に一人じゃないですか。」

「なあに〜？寂しいんだったら、私たちの部屋に来ればいいじゃない。」

「それはそれで大丈夫なんですか？」

呆れつつもケータイでルルーシュに文句のメールを打つ。実はルルーシュも昨日までは来ると言っていたからだ。

しばらくすると返信がきた。

今日、扇たちレジスタンスと正式に手を組む。言わなくてすまなかった。しかしお前には助けられてばかりだからな。たまにはゆっくり羽を伸ばしてくれ。

P.S. 何かあったら連絡する。

とのことだ。

むしろ今日はそっちに行かなければいけないのではないかと思うが、時すでに遅し。俺はケータイを閉じて再び窓の外の景色に目を向けた。

…

…

…

「どうした？ 入れ。」

その頃、ゼロは扇たちと手を組むために新しい隠れ家を提供していた。

「すっげー。」

「おい、こっち来てみろよ。二階まであるぜ。」

「俺たちには広すぎやしないか？」

みんなは思い思いに中を見てまわっている。この隠れ家は一戸建ての家以上の広さを持つロビーとKMFを収納できる格納庫を一体化させた移動可能な車だった。

「確かに。これならむしろ敵の目も欺けるかも。」

扇はロビーの椅子に座るゼロに近づき声をかけた。

「これは…俺たちと組むと受け取っていいのか？」

「ああ、もちろん。私たちは仲間だ。」

カレンも周囲を見てまわっていたが、何かに気づいたようにゼロを見た。

「ゼロ。シェイドは来てないんですか？」

「ん？ああ、あいつは休暇だ。今頃河口湖で温泉に浸かっているだろう。」

「そう…ですか…」

カレンの表情があからさまに暗くなる。ゼロはその変化を見逃さなかった。

「やはり、あいつが気になるか？」

「い、いえ！ただ、なんとなく…」

「いや、気になるはずだ。君の兄がこの世に残したいいわゆる形見とも呼べる存在だからな。」

「えっ！？ゼロもシェイドから話を聞いたんですか？」

「ああ、しっかりと聞かせてもらった。紅月ナオト…君の兄の最期も、あいつに託された君という人物も…」

「そう…だったんですね。」

「まあ、安心しろ。いざとなれば呼び出せる手はずになっているからな。」

カレンにそう言って再び椅子に背中を押し付け辺りを見ている仲間たちに目をやると、ノースリーブの服を着た吉田がロビーに設置されたテレビにスイッチを入れていた。

『ご覧ください。湖の中央に見えますのは河口湖センターホテルです。現在、あそこには日本解放戦線を名乗る集団が占拠し、旅行者

や従業員を人質に立てこもっています。首謀者は草壁中佐と名乗る人物で、すでに内部の映像を送ってきました。では、送られてきた映像をご覧ください。』

テレビの画面が変わる。

映し出された部屋の中には物資が積み重なっている。おそらく食料庫なのだろう。そこでは数十人のブリタニア人が手を頭の後ろで組み、テロリストに監視されていた。

「なんだこれ？」

「日本解放戦線！？もう動いてきたのか。」

「ゼロに負けまいと出てきたようだな。」

「しかし、これでは玉碎しかない。」

「この行動を喜ぶべきか、悲しむべきか…」

ゼロはその映像に無反応だった。興味がないというか、この行動には先がないと分かっているからなのか。

映像が流れ、次々と人質たちが映し出されていく。突如、その映像を見ていたカレンが声をあげた。

「あっ…！みんな！」

その声にゼロは再びモニターに目を向ける。

「なっ…これは！？」

そこには無理やり休暇をとらせたため、会長たちと河口湖へ旅行に行っているトーヤの姿が映し出されていた。

「トーヤっ…！」

カレンが心配そうに画面に向かって叫ぶ。

「カレン、あれは？」

「生徒会の…みんな…」

扇は心配そうにカレンを見ていたが、ゼロは自分の行動の愚かさを

悔いていた。もっとも信頼できる友をわざわざ危険な場所に行かせてしまったことを。

…

…

…

俺たちが捕まって3、4時間って所か。

トーヤは捕まっている人たちの中で最も冷静に状況を見ていた。

ルルーシュは今日扇さんたちと手を組むと言っていた。おそらく助けに来るだろう。しかし…

トーヤが必死に頭を回転させていると近くにいたニーナが声をあげた。

「イ、イレブン…。」

ニーナの目の前にいた兵士がその言葉に反応した。

「何！？ 貴様、今何と言った！？」

兵士がニーナの腕を引っ張る。

「いやっ！離してっ！いやーっ！」

「おい、やめろ！怖がっているじゃないか！」

俺は兵士の腕を無理やりニーナから引き剥がす。

「貴様っ！死にたいのか！？」

「違うっ！罪もない高校生を拘束して何が楽しい！？だいたい日本を取り返したいなら民間人じゃなく、国の上に立つ者を叩けばいい！お前たちは間違っている！」

「なんだと貴様あ！」

兵士が銃口をこちらに向ける。俺は懷に隠していたスタンガンに手を伸ばし、臨戦態勢に入った。だが…

「お待ちなさい！」

急に後ろからどこかで聞き覚えのある声が聞こえてきた。
あわてて後ろを振り返る。

「君は…。」

ピンクの長い髪を揺らし、かけていた変装用のメガネを外しながら一人の女性が立ち上がった。

「私はエリア11副総督、ユーフェミア・リ・ブリタニアです。私をあなたたちのリーダーに会わせなさい。」

「なっ…!」

まさか副総督自身がテロリストに自分の正体を明かしリーダーに会わせろと言い始めるとは…。

俺はその時テレビで見る彼女の姿を思い出していた。孤児院の子どもたちと楽しそうに戯れる彼女。一人の子どもが転んでケガをする、彼女は駆け寄っていつて「大丈夫?」と優しく微笑みかけていた。ユーフェミアとは姉のコーネリアとは違い、民衆を第一に考える人なのだ。

だが…こんな無謀な…。

「よし、いいだろう。ついてこい。」

兵士の一人がユーフェミアを連れていこうとする。

「ユフィ！」

「トーヤさん、大丈夫でしたか？」

「こんな無茶するなんて…」

「民衆を守るのが私の仕事ですから。」

ユフィはそう微笑むと兵士と共にドアの向こうに姿を消してしまっ
た。

彼女の姿が見えなくなると今度は俺の腕を兵士が掴んだ。

「お前は許さない！貴様には次に屋上から跳んでもらう！」

腕を引っ張られ、無理やり立たされた。

「トーヤ！」

ミレイさんが心配そうに名前を呼ぶ。

俺は彼女に精一杯微笑みかけた。

「大丈夫です。必ず戻ってきますよ。」

「トーヤ…」

俺はミレイさんたちがいる場を後にし兵士に連れられて部屋を出た。

「くっくっく、貴様は俺が突き落としてやる。覚悟しておけよ。」

「お前がな！」

「ガッ」

兵士が床に倒れ込む。俺が隠し持っていたスタンガンを一瞬の隙に首もとに当てたからだ。

「さて、」

仮面は念のため荷物と一緒に持ってきてある。俺は仮面を取りに自分の泊まるはずだった部屋に駆け出した。

…
…
…

廊下を走っていくと前方に二人の兵士が歩いていた。よく見ると二人に挟まれる形で真ん中にユフィがいた。

「ということは指揮官はこっちか。」

俺はゆっくりと彼らの後ろをついていく。兵士たちはある部屋の前でたちどまった。

だが、突如兵士たちの前にある部屋から銃声が響く。

部屋の中に兵士たちは慌てて入っていきこうとした。

「ぐあっ」

兵士の一人が肩に銃弾を受けてその場に跪く。部屋の中を覗くとゼ口が立っていた。

「騒ぐな。草壁中佐たちは自決された。己の行動の無意味さを悟ったのだ。」

「ゼロ…」

ユフィは部屋の中に一步踏み入れる。

「ユーフェミア、相変わらずのようだな。民衆のため人質を買って出たか。二人で話そう部屋に入ってきてくれ。」

ゼロがそう言うときユフィは部屋の中に入り、扉を閉めた。

だが、兵士たちも諦めずに部屋に立ち入ろうとする。

「動かないで！」

突如兵士たちの動きが止まり、ホールドアップの態勢になる。

「今の声は…」

聞き覚えのある声に俺は足を向けて近づいていく。

「やはり君たちか。」

俺が廊下の端から顔を出すと、そこには見覚えのない真っ黒な制服に身を包んだ武装した人たちが立っていた。しかし、その顔には見覚えがあった。

「シェイド！無事だったんですね。」

「ああ、せっかくの休暇にとんだ災難に巻き込まれてしまったよ。」

俺はカレンの質問に笑顔で返答する。

「何かあったんですか？服が汚れてますよ。」

俺は自分の着ている蒼いジャケットに目を向ける。確かに袖の辺りが汚れていた。

「どうやら汚い手で触られたみたいだ。」

そう言ってカレンの顔を見るとなぜか驚いた顔をしていた。

「ん？どうしたんだ？」

「えっ？あっ！いえ、なんでもありません。」

カレンは急いでもとの平静な顔に戻った。俺はやはりカレンの驚いている理由が分からない。

「そうか。では、この後の手はずはどうなっているのかな？」

…

…

…

「ゼロ、入るぞ。」

俺はゼロとユフィのいる部屋に入る。

「ユーフェミア副総督、自分から指揮官に会わせろとは無謀なお人だ。」

「あなたは…シェイド…。」

部屋に入るとユーフェミアとゼロが1対1で会話していた。周りには腹に刀を突き立てた軍人がその場にひざまずいていた。

「我が友よ、無事だったか。」

「ああ、皆が着替えまで持ってきてくれて助かったよ。」

俺は部屋に入る前に皆が着ているような制服に着替えた。俺の物は他の制服と違いかなり丈が長かった。

「ユーフェミアよ、人質たちは皆無事にお返ししよう。外の部下たちの指示に従い避難してくれ。」

「ゼロ、今は感謝します。」

ユーフェミアはこちらに足を向けると部屋の外へ姿を消した。

「ゼロ、よく助けに来てくれた。」

「まったく、ニュースを見たときはどうしようかと焦ったよ。」

ゼロは高笑いしながら仮面に手を当てる。だが、その声はすぐに止んだ。

ビルが衝撃と共に沈没を始めたのだ。

「くっ、あいつは!？」

ゼロが窓の外へ目を向けていた。俺もそちらに目をやると外には見覚えのある。白いKMFがいた。

「あれは…シンジユクの新型!?!ゼロっ!スイッチを!」

「分かっている!」

ゼロが手に持っていたスイッチを押すとビル全体が爆発を始めた。

…

…

…

「みんなあー!!!」

スザクは騎乗していたランスロットのアクセルを踏み込み、崩れ落ちるビルへフルスロットルで突っ込んでいった。

『よせ！ 柘木准尉！』

スザクは無線から聞こえてきた上官であるロイドの制止も聞かずに巻きあがる粉塵の中に消えていった。

ビルは崩壊した。

多くの人間とともに。

スザクは生きていた。薄くなっていく粉塵の中で呆然としている。

「みんな…僕は…またっ！」

救い出せなかった…スザクは何もできなかった自分自身に怒りを覚え、機体を拳で殴りつけた。

スザクはしばらくそのまま止まっていたが、モニターに映る影が彼を再び動かした。

「みんな…」

スザクは安堵の声をあげた。

：

：

：

影の正体は船だった。

俺たちは最も大きな観光船に乗り込む。

「カメラとライトは準備OKだな？」

「もちろん！」

杉山の声を聞き、準備が整ったことを知る。

「始めるぞ。」

ゼロの言葉と共に彼の体だけがライトに照らされる。俺たちの正面には奪ってきたカメラが設置されている。

「安心しろ、ブリタニアよ。人質たちは全員無事だ。」

俺たちの乗る船の他に何隻かの船がある。その中には生徒会のメンバーもいた。ホッと胸を撫で下ろす。

「彼らはあなたの方のもとへ返そう。」

ゼロはカメラに向けてそう言ったが、周囲にはブリタニア軍がいるのである意味俺たちの人質と言うこともできるだろう。

そして、俺は立ち上がる。

一気に残りのライトもつけられて後ろにいるカレンや扇さんたちも照らされる。

俺はカレンと反対側でゼロのすぐ右斜め後ろに立っていた。

「世界よ！活目せよ！我らは黒の騎士団！」

「テロリストが騎士を名乗るなんて皮肉だね。」

特派のロイドはゼロの言葉にそうつぶやいた。

「我らは弱きものの全ての味方だ！」

次に俺も口を開く。

「今の世界は悲しみに溢れている……。飢餓に貧困、戦争に汚職、弾圧に差別、全ては力あるものが無意味に民衆に力を行使しているからだ！我ら黒の騎士団は武器を持たない全ての民衆の味方だ！」

再びゼロが口を開く。

「力あるものよ、我らを恐れよ！力なきものよ、我らを求めよ！」

ゼロは両手を広げマントをまくりあげる。

「世界の悪は、我々黒の騎士団が、裁く！」

MEMOY-8. 08 明かされる素顔

ブリタニアを倒すため黒の騎士団がとうとう始動した。

ホテルジャック事件から生徒会のメンバーを救い出すことに成功したけれど、その中に捕らえられていたはずのトーヤの姿はなかった。

人質たちを租界近くまで送り届け、私たちはゼロが用意してくれたアジトへと引き上げた。

「ほう、これはゼロが用意したのか。」

「ああ、物好きの貴族にくれと言ったらくれたよ。」

「ははっ、君らしいな。」

ゼロと蒼の騎士―シェイドは先に中に入って会話していた。私たちも続いて中に入り、それぞれ思い思いの場所に座った。

「カレン、疲れただろう？ わざわざ助けに来てもらってすまなかったな。」

シェイドが私に話しかけてきた。

「いえ、大丈夫です。」

彼の仮面を見つめる。さっきのことを思い出した。ホテルでシェイドと会ったときのこと―彼は私の見覚えのある蒼いジャケットを着ていた。私が前にトーヤと出かけた時にトーヤが買ったもの。私が彼に勧めたものだから見間違えるはずがない。

「どうした？」

シェイドが私の顔を覗き込んできた。どうやら考え込んでいたみたいだ。

「あっ、なんでもないです。」

「そうか。」

彼は軽く笑みを見せて私から離れていった。

シェイドが私が見覚えのある蒼いジャケットを着ていたこと、そしてホテルに捕まっていたはずのトーヤがいなくなっていたこと…。この二つを合わせて考えると…。でも、なんで彼がこんなことを？

いくら考えても答えはでない。とにかく明日は学校に行ってみよう。

…

…

…

翌日 アッシュフォード学園―

朝、教室に行くとミレイさんが教室に来ていた。生徒会メンバーが皆集まっているようだ。

「おっ、おはようカレン。」

トーヤが片手を上げて挨拶をしてきた。私もみんなの方へ近づいていく。

「ちょっとカレン聞いてよ！」

シャーリーが急に声をあげて、私に話しかけてきた。

「どうしたのシャーリー？そんなに大きな声を出して？」

「あのね、トーヤがバカなの！」

「バカ？」

「この間のホテルジャックの時にテロリストに反抗したのよ。」

「そうなの？」

「そうなのよ！」

シャーリーは怒りながらも力説する。するとニーナがおずおずと話し始めた。

「シャーリー、だからあれは私のせいだったんだって。」

「ニーナのせい？」

「違うよ、結局はテロリストが悪いのよ！ニーナに乱暴したんだから。」

「はあ。」

みんなが捕まっているときの経緯を聞いているとミレイさんが話し始めた。

「しかもね、そいつがトーヤを屋上から突き落とそうとしたのよ。」

「ええっ！？ ちょっとそれ、大丈夫だったの！？」

トーヤに問いかけるといつも通りの飄々とした笑みを浮かべた。

「なんとかね。テロリストが何かのひょうしで転んで頭打って気絶したんだ。その隙に逃げたんだよ。なんとかブリタニア軍のいる所まで逃げて助かったんだ。」

「ずいぶん運が良かったのね。」

「ああ、ラッキーだったよ。」

そのままその場は解散して私たちは席についた。

トーヤは「ブリタニア軍のいる所で逃げて助かったんだ。」と言っていた。自分を殺そうとしていた兵士が頭を打って気絶した、これは有り得ないことではない。しかし、ただの高校生が日本解放戦線の包囲を抜けて逃げるなんて不可能だ。

やはり彼は…

「カレン、どうしたんだよ。人の顔をジッと見て。」

トーヤが小声で話しかけてきた。

「えっ？ ああ、ごめんなさい。」

「いいって。」

彼は再び正面に目を向けた。

背丈は蒼の騎士と同じくらいだし、声だってよく聞くと似ている気がする。

やっぱり、確かめる必要がある。

…

…

…

放課後 生徒会室―

生徒会室に行くとトーヤが一人で本を読んでいた。

「あら？他のみんなは？」

「やあ、カレン。これ見てみ。」

トーヤがこちらに振り向き一枚の紙を手渡してきた。その紙に目を通す。

「…アーサーの餌等々を買ってきます。ミレイより。みんな出かけたの？」

「そーゆーこと。なあ、アーサー。」

「ニアーン」

猫のアーサーがトーヤに話しかけられたのを分かっているかのように返事をした。私はトーヤにゆっくり近づく。

「ねえ、何呼んでるの？」

「ん？ああ、ひとりぼっちの王子様っていう本。なんかこれを読んだら不思議と自分がこの物語の主人公みたいに見えるんだ。」

「ねえ、何呼んでるの？」

「ん？ああ、ひとりぼちの王子様っていう本。なんかこれを読んだと不思議と自分がこの物語の主人公みたいに思えてくるんだ。」

トーヤは笑いながらも少し悲しそうな表情をしていた。

「そうゆうのを読むだけでも記憶の手がかりになるかもしれないわね。」

「ああ、そうだいいな。」

そろそろ彼に探りを入れてみよう。

「ねえ、そう言えば前に買ったジャケットちゃんと着てる？」

「ジャケット？」

「ええ、私がお世話係りに任命された時に一緒に出かけたでしょ？その時に買ったやつよ。」

「んゝ…。ああっ！あの時のか！ちゃんと着ているよ、この間のホ

テルジャックの時も…」

彼はそこまで言って言葉を止める。顔が急に真剣な顔つきに変わっていった。

「ホテルジャックの時も着ていたのね。やっぱりあなたが…シェイド。」

彼は私の言葉を聞くと頭に手をあてて深くため息をついた。

「はあ…、こんなことで気づかれるなんて…。」

「あなたが…蒼の騎士…」

「そうだ、俺が蒼の騎士だ。しかし、ククッ、こんなにあっさりバレてしまうとはな。俺もまだまだ甘いな。」

「前から疑っていたのよ、確証はなかったけど…」

「いつから疑っていたんだ？」

「自分でもよく分からない。でも、気づいたらあなたなんじゃないかって思ってた。」

「そっか…で、どうする。」

「え?。」

「俺の正体を知ってどうするんだ?。」

…

…

…

「俺の正体を知ってどうするんだ?。」

俺はカレンに問いかける。彼女が俺が蒼の騎士だと知っても何もできはしないはずだ。

だが、意外な一言がカレンの口から発せられた。

「よかった。」

「よかった?。」

「ええ、あなたがシェイドだって分かって嬉しいの。」

意味が分からない。なぜ俺がシェイドであるとカレンは嬉しいんだ？理由が分からない。

「それは…どうしてだ？」

「秘密よ。」

彼女は自分の唇に指をあて、話さないとアピールする。

「分かったよ。もう聞かない。はあー、みんなにも正体を明かさないと、顔を見れば少しは信じてくれるかな？」

「何言ってるのよ、みんなあなたのことを信頼してるわよ。」

「それでも、もしバレたらみんなに話すって勝手に決めてたから。」

「そうなの？フフッ」

「なんで笑うんだ？」

「なんだっけ？あなたが前に言ってたこと。確か…『俺は君に降り懸かる脅威を払う剣となり、君を守る盾となろう』だっけ？」

「ちよっ、おまつ…！よくそんなこと覚えてるな。」

「ええ、ちゃん覚えてますよ。あなたが私を守ってくれるって言うてくれたこと。」

カレンは少し照れた顔をしていた。

「ああ、君が俺を許してくれるなら…」

俺は椅子から立ち上がり、カレンの目の前にひざまずく。

「俺は君を守る騎士でなろう。」

「ありがとう、トーヤ。」

顔を上げるとカレンはまだ頬を赤くしていた。

「さっきからどうしたんだ？顔が真っ赤だぞ？」

「へっ！？そ、そんなことないわよ！」

「本当か？熱でもあるんじゃない？」

俺はカレンの額にそっと手をあててみる。特に熱はないようだ。

「熱は無いみたいだな、カレ…大丈夫か？」

カレンの額から手を離し、彼女の顔を見るとさらに顔が赤くなっていた。

「だっ、大丈夫っ！だから、ちょっと…忘れ物を…とってくるわ。」

「あ、ああ、分かった。」

カレンは慌てて部屋の外に飛び出していった。
なんか変なことしたかな？

・
・
・
・
・
・
・

「まったく、バカなんだから！」

カレンは扉の外で呟いていた。
彼女は少しの間下を向いて優しく微笑んでいるようだったが、やがて教室に向かって歩き出した。

MEMOLOGY 9 リフレイン

黒の騎士団はホテルジャック事件での華々しい登場以来、様々な警察や軍で裁けない悪を裁いてきた。

麻薬の密売や重火器の横流しなど民衆に害のある犯罪は日本人、ブリタニア人関係なくだ。

ゼロは正義の味方を目指すと言った。

黒の騎士団結成から二週間――まだまだやることは多そうだ。

…

…

…

俺はカレンと公園に来ていた。カレンとの租界巡りは当初の案内という目的から記憶の手がかりを探すという目的に変わっていた。

「もう何回も公園に来てるけどさ、やっぱりここはいいな。」

「そうね、みんな楽しそうに遊んでる。」

俺たちはベンチに腰掛け近くで遊んでいる子供たちを眺めていた。子供たちは一様に黒いマントを着ていた。

「黒の騎士団！」

子供たちは黒の騎士団をヒーローのように見ているのだろう。ゼロのマントを上げる仕草を真似している。

「なんか変な感じだな。自分たちの目の前で子供たちがこんな風に遊んでいると。」

「変な感じっ…て、どういうこと？」

カレンはこちらの顔を覗き込んでくる。

「なんとなく…かな？まさか子供に自分たちの真似をされるとは思わなかったからさ。でも、こんなふうにブリタニアの中で日本人の子供たちが遊んでいるのを見るとさ…気持ちが悪くなるよ。」

カレンの方を見ると彼女も同じように感じているようで優しく微笑んでいた。

「君のそんな顔、初めて見た。」

今までにないくらいのカレンの優しい笑顔につい口角があがってし

まう。

「そうかしら？…なんで笑ってるのよ。」

「いや、なんでもない。」

そう言って再び遊んでいる子供たちに目を戻す。すると、母親らしき女性が子供に近づいていった。

「いけません、黒の騎士団なんて！私たちはイレブンなのよ！ブリタニアに逆らうような人たちの真似はやめなさい！」

女性は子供から無理やりマントを外し、子供の腕を引っ張っていった。

「イレブン…か。」

カレンはどこか寂しそうな声でそう呟いた。

「そろそろ帰りましょう。日が暮れてしまうわ。」

「そうだね、家まで送っていくよ。」

「ありがとう。」

俺たちはベンチから立ち上がり、真っ赤な空の色に染められた並木道を歩き始めた。

：

……

……

黒の騎士団の結成からたったの2ヶ月しか経っていないのに、多くのレジスタンスが合流してきた。

これはほとんどが謎のカリスマ―ゼロと蒼の騎士―シェイドの名前に惹かれて合流した者たちだった。

しかも一つの組織として活動を開始したため京都六家の桐原公からの援助が少しずつ増えてきている。

おかげで騎士団の物量も充実してきた。

：

……

……

「黒の騎士団！」

カレンが授業中に突然立ち上がってそう叫んだ。
その言葉に教室が一瞬静まり返り、そのあとに大爆笑が起こった。
カレンは恥ずかしそうに頬を赤くすると教師に軽く頭を下げて席に座った。

授業後、俺の隣に座るカレンのもとにシャーリーやルルーシュなどの生徒会メンバーがやってきた。

「黒の騎士団とはな。またネットの友達に何か吹き込まれたのか？」

ルルーシュが冗談まじりの声でカレンに問いかける。

「え？ ええ、実はそうなの。みんな本気で黒の騎士団にハマっていて、そういった会話を聞いている内に擦り込まれてしまったみたい。」

「でも、カレンが居眠りなんて珍しいね。寝不足なの？」

シャーリーは心配そうに質問する。

「ええ、少しね。」

カレンは軽い笑みを浮かべた。
さっきのカレンの言葉には正直、少しヒヤッとしたが特に疑われることはなかったようだ。

…

……

………

放課後 生徒会室―

今日は騎士団としての活動はないので生徒会室で仕事をしていると、突然ミレイさんに話しかけられた。

「ねえ、トーヤ。放課後ちょっと時間ある？」

「この仕事が終われば大丈夫ですけど…、何か用事でも？」

「うん、ちょっと…ね。カレンの家までついてきてほしいの。」

ミレイさんはなぜか深刻そうな顔をする。

「分かりました…。」

俺はあえてその場で理由は聞かなかったが、それはすぐに分かることとなった。

…

…

…

「トーヤ！会長も、どうしたんですか？」

カレンが姿を現し、階段をゆっくりとした仕草で降りてくる。

「ちょっと渡すものがあってね。ちなみにトーヤは付き添いで来てもらったの。」

「そう…ですか。」

二人が会話しているのを横目に俺は初めて見るカレンの自宅の中を眺めていた。今までカレンを家まで送ってきたことは何度かあったが、さすがに家の中まで見たことはなかった。

「あなたは……いつもお嬢様がお世話になっているお方ですね？」

広い家の中を見渡しているとひとりのメイド服を着た女性に話しかけられた。

「えー…つと…ああ、あなたは。」

俺は一瞬考えたが、すぐに誰なのか分かった。優しげな表情を浮かべるその女性は俺がカレンを送ってくるといつも心配そうに敷地の入り口で待っていたからだ。

「カレンお嬢様、どちらへお通ししましょう？客間か…、それとも…」

「私の部屋へ！」

カレンはメイドの女性の言葉を遮るようにそう言い放った。

「あら、なんだ。女もいるなんてね。」

突然カレンが降りてきた階段の上から冷たい物言いをする女性が降りてきた。

「夜遊びに朝帰り、ゲッターにも出入りして。夫のいない間に、いろいろ好き勝手やっているようね。」

カレンは階段の中腹でこちらを見下ろしてくる女性に振り向き怒気の混じった声で言い返す。

「父の不在を楽しんでいるのはあなたでしょう！」

「フンッ、やはり血は争えないようね。」

カレンと言い合っている女性が俺を見てそう言った。

（どういう意味なのだろう…？）

そう思っていると近くにいたメイドの女性が台にぶつかって乗っていた花瓶を割ってしまった。

「あなた！なにやってるの！？」

「すみません、奥様すみません。」

メイドの女性は花瓶の欠片を拾い集めながら、奥様と呼ばれた女性に必死に謝っていた。

「これだから親子は…。」

奥様と呼ばれた女性はそう言い残し、上の階に消えていった。

…

…

…

「はい、これ。中学までの成績証明書。」

俺たちはカレンの部屋に来た。

カレンの部屋は本棚にピアノ、ベッドなど多くのものが置かれていたがそれでもスペースが余るほど広々とした部屋だった。

ミレイさんが封筒を差し出すとカレンは少し驚いたように目を見開いた。

「バレた…ってことですよね？私がイレブンのハーフということ
が。」

カレンは受け取った書類にサインをして封筒を返すと、すぐにお茶を入れてくれた。

「いろいろと大変みたいね。」

ミレイさんはお茶を受け取ると急に話し始める。大変とは、おそらくさっきのことを言っているのだろう。

カレンはお茶を入れ終わると座ってため息を吐いた。

「さっきのは継母です。…本当の母親は花瓶を割ったドジなメイドの方…。」

カレンはそう言うとは一度言葉を切った。確かにあのメイドの女性とカレンを比べてみると目元がよく似ているようだった。

「母はバカなんです。何もうまくできないからいくら酷いことを言われても言い返せなくて…、こんな家にいなくてもいいのに…、要するにすがってるんですよ。父の権力に…。」

そう説明するカレンの顔には暗い影が漂っていた。

「嫌いなよね、お母さんのこと…。」

「うっとうしいだけです。」

カレンはあっさりとそう言い放つ。いつもの彼女らしからぬ言動に俺は何も言えずにいた。

それでもミレイさんはゆっくりとした口調でカレンに話しかける。

「そっか…。正妻も妾もその娘も同じ家に住んでるなんてね。でも、安心して秘密は知りたがる方だけど誰かに話す趣味はないから。」

ミレイさんはそう言うのと荷物をまとめた。

「それじゃあ私は帰るから。」

「…はい、今日はありがとうございました。」

カレンの言葉を聞いて俺とミレイさんは部屋を出ようとするのとミレイさんが小声で話しかけてきた。

「ちょっとトーヤ！なんであなたまで帰るのよ！」

「えっ？」

「あなた来てから一言も喋ってないじゃない！今はカレンの側にいてあげて。それはあなたにしかできないことだから…。ねっ！」

ミレイさんはそう言って部屋から出て行った。

俺にしかできないこと…。それが本当にカレンの側にいることなら…。

俺は体を来た方向に向けて足を踏み出す。

「カレン…。」

うつむいたまま椅子に座っていたカレンに声をかけると、彼女は驚いたように顔を上げた。

「トーヤっ…！帰ったんじゃないの!？」

「ああ、今は君の側にいた方がいいってミレイさんに言われてね。」

「会長が…」

カレンはまた黙り込んでしまう。

俺はカレンにソツと近寄って右隣の椅子に腰掛ける。するとカレンは再び口を開いた。

「ごめんなさい、恥ずかしい所を見せてしまったわ。」

「……なあ、お母さんのこと…辛くはないのか？」

カレンはすぐさま答える。

「辛くないわ、お母さんのこと嫌いってさっきも言ったじゃない。」

カレンの言葉に俺は確信する。彼女は何も分かってない。

「やっぱり君はバカだ。」

「何よ急に…、何も分かってないくせに…！」

彼女は少し語気を強めた言葉を発した。

（もう我慢の限界だ！）

「カレン！何も分かってないのは君だ！」

立ち上がってカレンに怒鳴りつける。彼女はビクリしたらしく体をビクツとさせた。

「君の母親のことが嫌いだと言った！もし君が彼女の気持ちを知ってそう言うのなら俺だって何も言わない！…でもなあ、君のお母さんが君をどれだけ大切に思っているのか君は気づいてない！なんで気づこうとしないんだ！」

「な、何よ…何なのよ！私が何に気づいてないって言うの！？私のこと何も分かってないくせに、何なのよ！」

カレンも怒気混じりの声で言い返してくる。俺はさすがに言い過ぎたようだ。

「すまないカレン…。でもな、辛いときは辛いつて言っているんだ。一つ一つは耐えられることでも、積み重なればいつかは擦り切れてしまうんだ…。」

俺の必死の訴えにカレンはもう返事もしてくれなかった。今思えば自分でも何が言いたかったか分からない。残ったのはやり切れない思いだけだった…。

：

……

……

黒の騎士団 アジト―

俺とカレンはカレンの家で扇さんからの連絡を受け、すぐに騎士団のアジトに来ていた。

「トーヤ、こっちに来てくれ。ゼロが今日の作戦について説明するらしい。」

「了解…。」

この前カレンに正体を明かした後、俺は扇さんたちのように前から騎士団設立時のメンバーに正体を明かした。みんな蒼の騎士がブリタニアの学生と知ってかなりビクナリしていたのを覚えている。

「来たな、トーヤ。」

ラウンジに入るとゼロが出迎えてくれた。

「やあ、急な呼び出しだな。どうした？」

「すまないな。急に大きな取引の情報が入った。リフレインが数ト
ン流されるらしい。」

「リフレイン…。」

リフレインとはイレブンの間に蔓延する幸せだった過去にトリップ
できるという薬物だ。
もちろんこれで誰かが救われるわけではない、むしろ逆だ…。

「分かった、現場の地図を見せてくれ。」

現場は租界とゲットーの狭間、人が寄りつかない静閑な倉庫街だっ
た。

「トーヤ、君はカレンと共に無頼で突入してくれ。カレンもそれで
いいな？」

「…はい、ゼロがそう言うなら。」

部屋の隅にいたカレンが不機嫌な声で返事をする。彼女はそのまま
部屋から出て行ってしまった。

「トーヤ、カレンと何かあったのか？」

「何もないですよ、扇さん。それよりも作戦の準備をしてください。
時間がないですよ。」

俺はカレンの後を追いかけるように部屋を出た。

…

…

…

租界 倉庫街―

「なあ、俺たちこれでいいのかよ。」

玉城が突然声を出す。扇さんは彼に静かにするように合図した。

「でもよお、犯罪者ばかり制裁して…これじゃあ警察とやってること変わらねえじゃねえか。」

玉城の言葉は核心を突いている。俺たちはブリタニアを倒すために戦うはずだったのだが、やっていることは全然違うからだ。

「玉城、ブリタニアを倒すにはまず準備が必要だ。今までの行動は武器を集めたり、民衆の心を掴むためのものだ。けして無駄ではないんだ。」

「お前も意外と考えてんだな。まあ、そうならいいけどよ。」

俺の説得に玉城は納得してくれたようだ。

「ねえ、扇さん…。」

隣で無頼のコックピットに座っているカレンが口を開いた。

「何だ、カレン。」

「私たち…、本当にこれでいいのかな？」

「……」

扇さんはカレンの一言に答えることはできなかった。俺が今その理由を話した。それでみんなは納得したのだ。だが、彼女だけが納得

できない…その理由が分からないからだろう。

その時、南が声をあげた。

「おい、ゼロからの合図だ！」

「分かった。全員、突入！」

俺たちは隠れていた物陰から飛び出した。まずはゼロ率いる歩兵部隊が一斉射撃で奇襲をかける。

「行くぞ、カレン！」

「……」

俺はカレンに声をかけるもやはり返事は返ってこない…。カレンが先に突入した。

多少マシンガンによる反撃があったものの二機のナイトメアには通用しない。俺たちは逃げていく男たちを追い、建物の奥に侵攻した。

…だが、すぐにカレンが動きをとめた。

「どうしたカレン！？」

カレンの目の前に誰かがフラフラと歩いてきた。

「なっ…、あれは…！」

それはカレンの母親だった。リフレインによるトリップ状態に陥った彼女の母親…。

「くっ…、なぜっ…？」

カレンは転びかけた母親をナイトメアの手で受け止めた。

…だが、突然カレンの無頼に銃撃が浴びせられる。

『ああっ！』

「カレン！」

白い塗装！あれは…

「ナイトポリス！？警察だ！？」

「グルってことかよ、おい！」

「腐ってやがる。」

カレンの無頼は手にカレンの母親を乗せたまま走り出した。ナイトポリスも彼女を追いかける。

「援護する！」

「おい、待て！もう一機いるぞ！」

玉城の声の方には物陰からカレンね無頼を狙う機体があった。

「させない！」

俺はハンドガンを撃って手早く破壊するとそのままカレンの援護に走った。

カレンの無頼は転倒してナイトポリスと組み合っていた。

「うおおおおお！」

俺はナイトポリスにショルダータックルをくらわせ、転倒させた所で胴側部を思いっきり踏みつける。

「カレン！無事か！？」

俺は無頼から降りて母親のもとにいるカレンに駆け寄った。

「トーヤ…。」

「カレン……。」

こちらを向いたカレンはポロポロと目から涙を流していた。

「…私、分かったよ…。トーヤが言いたかったことも…、お母さんが…、どれだけ私を大切に思ってくれてたかも…」

俺はカレンの側に膝をつき彼女の肩にソツと手をのせた。

「…でも…、気づくのが…遅く…なっちゃった…私の…せいで…」

彼女は母親がリフレイン漬けになってしまったことを自分のせいだ
と思い、彼女なりに後悔しているようだ。でも…

「カレン、君のせいじゃない…」

カレンの涙で濡れた頬を拭う。彼女は体を震わせながらも俺の目を
しっかりと見つめてきた。

「…トーヤ…ごめん…なさい…」

「謝らなくていいよ。君は何も悪くない。ちゃんと気づけた君は…
立派だ。」

カレンの体を優しく抱き寄せる…。彼女は心が弱っているのか抵抗
をしなかった。カレンの頭の重みが右胸の上に感じられた。

「まだ…失ってないよ。君のお母さんはまだ生きてる…。それに悪
いのはたった一つ…平和を奪ったブリタニアだ！」

「…うん…、ありがとう…」

カレンは顔をあげる。涙は止まっていた。

「そう…だよ。まだ終わってない…。まだお母さんは生きてるから…」

カレンは涙の跡が残る顔で精一杯微笑んでくれた。

…

…

…

租界 病院―

カレンが母親の病室から出てきた。

「トーヤ、ごめんなさい、待たせてしまつて。」

「いいんだ、それより…覚悟はできたかい？」

カレンは真っ直ぐに窓の外の雲一つない空を見つめていた。

「ええ、覚悟はしたわ。…前に進むって…、生きるって覚悟を。」

「そっか。」

俺はもたれかかっていた壁から背中を離してカレンに近寄る。

「よし！それじゃあ、行こうか！君の好きなクレープをおごってあげるよ！」

「うん！行きましょう。」

カレンが差し出してきた手をしっかりと握り、歩き出す。

彼女の母親には懲役20年という重い罰が下された。

それでもカレンは前に進むと決意してくれた。未来へ進むと…。

その彼女のためならと…俺ももう一度覚悟を決める…。

守る…。俺の生きる意味はそこにある。

例え記憶がなくとも、俺の居場所はアッシュフォード学園であり、黒の騎士団だ。

大切な人たちもいる。
ルルーシュやナナリー、スザクなどの生徒会の面々やクラスのみんな。

カレンだってそうだし：

もう自分の居場所はここじゃないとか、生きる意味に迷わない。

ルルーシュは生きてるって嘘を言っていた。
でも俺は嘘だとは思わない。

人間は誰もが自分で息をし、考え、そして歩く。
人は与えられた命で必死に生きていく。

だから……！

MEMOLY-10

紅蓮 舞う（前書き）

すいません、適当な感じするかもしれないです。

黒の騎士団結成から約三週間。人数が増え、正式に京都からの援助も受けられるようになった。

ナイトメアに関してもブリタニアの第四世代KMFグラスゴーを日本が改造した機体―無頼を何機も送ってくれた。

そして何よりも嬉しい知らせは、まだ届いていないが俺の専用機が完成したことだ。

「ゼロ、黒の騎士団は人員や物資が充実し、戦力は整った。そろそろ動く時期なんじゃないか？」

俺はアジトの格納庫へ向かう通路をゼロと並んで歩いていた。

「確かに：俺の目的のためには動き出す頃合いだな。しかし、俺の狙いはコーネリア：やつを打ち取る機会がまわってこないとな。」

「コーネリアは今、日本中の反ブリタニア勢力を潰すため、積極的に遠征しているらしい。おそらくすぐにチャンスが来るだろう。」

「そうだいいいな…。」

少し歩き格納庫に出ると、目の前に紅いナイトメアフレームが立っていた。

これは初の純日本製ナイトメアフレーム―紅蓮 式式…単位時間あたりの運動量はサザードの1.6倍になるらしい。

つまりは出力や機動力は既存の機体を大きく上回っているということだ。

「玉城はともかく井上たちまで浮かれ気分か…」

ゼロは新しく入った団員と戯れている幹部たちを見てため息を吐いていた。

「カレン、京都は複数のレジスタンスに援助していると聞いたが。」

「はい、私たちもようやくその一つに入れてもらって。認められなければ援助はしてくれませんから。」

「間違っているぞ、カレン。これは試験だ。これに合格してこそ認められる。」

「それでも、そう思ってくれただけでも十分です。」

カレンは本当に嬉しそうだ。
そういえばカレンに渡すものがあるんだった。

「そうだ、カレン。」

「何？ トーヤ。」

「これを受け取ってもらいたい。」

俺は羽の形をしたキーをカレンに投げ渡す。

「これは…？」

「紅蓮式式のキーだ。こいつには君に乗ってもらおう。」

「ええっ！？ でも、これほどの機体ならあなたやゼロが乗った方が
いいんじゃない？」

「残念ながら俺にも専用機がある。新兵器の輻射波動は君の実力を
引き出してくれるだろう。それにゼロには…」

「私では紅蓮を扱いきれない。戦場での切り札は君とトーヤだ。期待している…。」

「はい！任せてください。」

こうなるとカレンは最前線で戦うことになり、危険が増える。守ってやらなければ…

そんなことを考えていると、俺たちが来た方向から扇さんが歩いてきた。

「なあ、ゼロ。入団希望のブリタニア人から新しい情報が入った。罠の可能性も高いが、無視するには大きすぎる情報だ。」

「なんだ、話してみろ。」

「ああ、実はナリタ連山にコーネリアが攻撃を仕掛けるらしい。」

扇さんはゼロに持っていたファイルを渡した。

「ナリタといえば、日本解放戦線の本拠地だ。なあ、ゼロ。俺たちもそろそろ。」

扇さんの言葉の途中で、ゼロはファイルを閉じた。

「週末はナリタまでハイキングかな。」

「週末か？」

「そうだ。トーヤ、何か都合が悪いか？」

「すまない、その日はナイトメアを京都に受け取りに行かなければならない。」

「そうか…ならば君は受け取りが済み次第こちらに合流してくれ。」

「分かった。」

…

…

…

この日、俺は部下の水野さんと河井さんと共に京都の本部がある富士プラントに来ていた。

プラントの格納庫に入る。

部屋の中央に他のナイトメアよりも少し大きな蒼銀の機体。

「こいつが…」

「事実上最初の第七世代ナイトメアフレーム、“ブルールナ” よお。」

突然俺の言葉を先読みする形で女性の声が聞こえてきた。

声の方向には額にチャクラの化粧をしたインド系ブリタニア人らしき女性がナイトメアを見上げて立っていた。

「あなたは？格好からすると技術者みたいだけど。」

「私はラクシャータ・チャウラー。ゼロからお呼びがかかってねえ。反ブリタニア勢力の技術開発に携わってるのよ。あんたのこと知ってる、日本のレジスタンスの中で最強との呼び声高い蒼の騎士。あんたのデータ見たけど、サイコーにイカしてたわあ。」

「ああ、ありがとう…。じゃあ、あなたがこの機体を改造したというわけか。」

「その通り。本当に面白かったわあ。」

ラクシャータは嬉しそうにキセルをふかした。

「この子、本当にスゴいわよ。まず使われているサクラダイトの量がハンパじゃないわ。あの紅蓮や白兜にだって勝るわよ。単位時間あたりの運動量だってサザーランドの二倍以上。でも：あんた本当にコレに乗るの？」

ラクシャータが疑問を抱くのも当たり前の性能だ。この機体はこの性能ゆえにテスト騎乗したパイロット―俺以外の37人は皆死んだ。唯一俺が乗ることができたのだ。

「もちろんだ。俺にしか乗れないなら：」

「そう：まあ、死なない程度に頑張っただけ。って、かなり改造してるから説明必要よねえ？」

「ああ、よろしく頼むよ。」

ラクシャータの説明によると、この機体は他の機体とは違い、大きい

さは5メートル程度と少し大きい。また消費エネルギーが著しく多いため、エナジーファイラーが二個装備されている。起動時間はそれ
 でしょうやく既存の機体の1・2倍になる。

装備に関しては敵の白兜のように両腕にスラッシュハーケンが内蔵
 されたシールドを装備している。腰の後ろには二本のMVSと呼ばれる
 高周波振動で切断力を強化した刀が交差するように装備されて
 いる。そして一番目についたのは背中に装備されている機体の大き
 さ程はある一本の長剣―これは紅蓮に装備されている特斬刀と呼ば
 れるものと同じ技術が使われているらしい。

「それともう一つ、左腕には紅蓮と同じ輻射波動機構が搭載されて
 いるわ。」

「その割には左右対照のようだけど？」

「この子には二つのモードがあってねえ。今は普通だけど、切り替
 えると左肘が伸びて射程が伸びるのよお。加えて波動の伝導率を上
 げるために左手の指先にサクラダイトを埋め込んで、爪みたいにエ
 ネルギーを射出するようにしたのよ。ただし爪に切断力はないから
 指って言った方がいいかもねえ。」

「ずいぶんと装備が多いんだな。」

「あんたなら大丈夫よお。まあ、後でハンドガンもつけてあげるか
 ら、まだ増えるわよ。」

「そっか。」

俺はもう一度目の前の機体を見上げる。日本による改造により、名前を変えられた機体。

両肩や腰回りには鎧のように防御力を高める装備がされている。

「君は誰だ？」

突然後ろから声をかけられ振り向くと、軍人が5人立っていた。

「あなた方は…、もしや、日本解放戦線の藤堂中佐に四聖剣では？」

「うむ、そうだ。君のようなブリタニアの学生がここに何の用があるか気になって声をかけたのだ。」

「ああ、申し遅れましたね。私はトールヤリカルド。またの名を蒼の騎士―シェイドと言います。」

「蒼の騎士！？まさか、君が？」

藤堂中佐は驚いているようだ。やはりブリタニアの高校生が蒼の騎士というのは信じがたいようだ。

「今回は無頼改を受け取りに来たんだが、君は？」

「私も自分の専用機を受け取りに来たんです。皆さんはこれからナリタへ戻るのですよね？」

「うむ、そうだが。」

「なら、気をつけてください。ナリタにコーネリアが向かっているとの情報があります。では。」

俺たちは俺の専用機が積まれたトラックと二機の無頼改が積まれたトラックに乗り込み、急ぎナリタへ向かった。

：

：

：

ナリタ連山―

「なあ、ゼロからなんか聞いてないか？」

玉城がつまらなそうな声で扇とカレンに質問していた。

「いや、何も…。」

「まあまったく、ゼロは何考えてんだかな。」

玉城からの通信を切り、扇は考えを巡らし始めた。

（ゼロはやる気だ。コーネリアの軍勢と真っ正面から。）

騎士団はすでにナリタ連山山頂に到着し、採掘作業を始めていた。

「なあ、ゼロはこれで温泉でも掘ろうってのかな？」

「ははっ、あり得るな。訓練後にみんなで入るんじゃないの？」

団員たちは完全に遊び気分だった。このことから騎士団は未だに軍として一つのまとまりを持っていないことが分かる。

「ゼロ！リーダーに反応複数！20…、40…！何これ…。」

井上の声により団員たちはようやく自分たちの置かれた状況を飲み込んだ。ナリタ連山を囲むようにコーネリアの軍勢が迫っていた。

「ゼロ、これは!？」

「始まったか。」

ゼロは迫り来る航空部隊を平然と見つめていた。

「ゼロ!こんなに包囲されちゃあ、帰りの道だって!」

「もう封鎖されているな。生き残るにはここで戦争するしかない。」

「戦争…。」

「ブリタニアと…。」

団員たちは皆固まっている。ゼロの行動についていけないか、軍勢に囲まれた恐怖からか。

「生き残るためには奇跡を起こすしかない。」

ゼロの言葉を聞いて玉城が激昂した。

「あのなあ、奇跡は安売りなんかしてねえんだよお！ やっぱりお前にリーダーは無理だ！ 俺こそがっ！」

玉城は肩にかけた銃を外してゼロに向けようとする…が、ゼロが先に銃をつきつけた。

しかしゼロは持っていた銃を回転させ、差し出すように持った。

「私抜きで勝てるというのなら、誰でもいい、私を撃て！」

その言葉に周りにいた団員たちは凍りつく。
そのまま時間が流れたが、杉山が口を開いた。

「ああ、あんたがリーダーだ。」

「そうね。」

「ありがとう…。」

ゼロたちは無頼に乗り込み戦闘準備に入った。

：

……

……

「トーヤ君、ブリタニアの交通規制が始まっている。」

「分かっている。無頼改の出撃準備！」

「了解！」

俺は後ろに積んであるナイトメアを起動させた。

：

……

……

「黒の騎士団！総員出撃！狙いはコーネリア！突破口を開くのは紅蓮式だ！」

『はい！』

通信からカレンの声が聞こえる。紅蓮が起動状態に入った。

『紅蓮式、起動状態確認。外界状態維持。』

カレンが深く息を吸い込んだ。

「外周伝達！」

地中深く差し込まれた採掘装置に紅蓮式が輻射波動を撃ち込んだ。

すると、山頂付近の岩が崩壊し、そして山が崩れ落ちた。

「よし、これでコーネリアは孤立する。ナイトメア部隊は私に続け！」

『日本を取り戻す。』

黒の騎士団は一直線に山を降る。

敵の一隊が目の前に現れた。

『黒の騎士団だと！？イレブンごときが！』

「カレン！こいつらは邪魔だ！片付けろ！」

『はい！』

カレンは紅蓮を突入させる。右手の輻射波動が先頭の敵に打ち込まれた。

敵の上半身は膨張し爆発する。

カレンは飛んでくる銃弾をうまくかわしつつ、残る三機にも輻射波動を撃ち込んだ。

…

…

…

「起動状態良好。エナジー残量100%。」

俺は蒼銀の機体に乗り込み、起動させる。

「各機、準備はいいな。」

『『はい!』』

「“蒼月”、発進する!」

俺は部下の二人が乗り込む二機の無頼改を引き連れナリタ連山へと急ぐ。

：

……

……

俺たち黒の騎士団の本隊は順調にコーネリアに近づいていたが、目の前に純血派の部隊がたちはだかる。

『見つけたぞ、ゼロオ!』

一機のサザーランドが襲いかかってくる。だが、紅蓮がそいつの攻撃を受け止めた。

『ゼロは私が守る!』

『私の邪魔をするなあ! オレンジの疑いを晴らすため、ゼロを討つ!』

どうやら乗り込んでいるのは純血派リーダーのジェレミア・ゴットバルトのようだ。

「フッフ、あなたの相手をしている暇はないのだよ、オレンジ君。」

「なっ…! ぐううう、私は、オレンジではない!」

ジェレミアの機体はこちらに突進してくる。だが、紅蓮式式の右手がサザーランドを掴んだ。

『ごめん…。』

輻射波動が撃ち込まれ、みるみるうちにサザーランドが膨張していく。

そしてコックピットが射出され、機体は爆破した。

『やれる、この紅蓮式式なら!』

カレンはそのまま紅蓮を敵部隊に向けるが、それは甘かった。

純血派の機体は左右に二機ずつ伏せられていて、カレンは合計7機に囲まれた。

『なっ、しまった!』

カレンはそう言うがもう遅い…。

紅蓮に向かって7機分の銃弾が撃ち込まれていった……。

MEMOLY-EX1 地味な二人（前書き）

地味なオリキャラ二人を追いかけてました。

MEMOLY—EX1 地味な二人

「なあ、絆創膏必要だったかな？」

「んゝ…、いいんじゃないかな？まだあるだろう。」

水野と河井は日課の買い出しからの帰りだった。

彼らはキョウトから派遣されたトーヤの部下である。

二人とも頭は切れ、ナイトメアの操縦技術もなかなかなのだが、日常はなんというか…緩い二人なのだ。

「なあ、トーヤ君って面白いよな。」

突然河井が口を開く。

だが、突然の言葉にも水野は動じずに答えた。

「ああ、面白いね。なんてゆうか真っ直ぐなんだよ。気持ちいいくらいに」

「そうなんだよな。記憶がないっていうハンデも気にしない心の強さがある。あれには俺たちの方が年上だけど見習わなきゃな。」

「そうだね。」

二人は騎士団のアジトに向かって歩き続ける。

「俺たちって、トーヤ君を見張るように言われてるけど…もし、トーヤ君がキョウトを裏切ったらどうするんだ？」

河井は深刻そうな質問を投げかけてくる。

確かにともと二人はトーヤが裏切らないかどうかを見張るために派遣されたのだ。

「俺は…、トーヤ君と行くよ。キョウトよりは…その方が面白い…」

「やっぱり水野もか…。俺もそう、いつもトーヤ君には助けられてばかりだし。なんてゆうか…放っておけないんだよ…」

「ああ。それに恩人から頼まれたからカレンちゃんを守るんじゃないかな。俺は自分の意志で守りたいと思ったただだよ。自分の気持ちに従っただけ」なんて言われちゃあね。」

二人の間に少しの沈黙が訪れる。

トーヤのために…と二人の思いは一致している。
その気持ちの再確認のための沈黙…。
先に口を開いたのは水野だ。

「俺はあいつのためなら命をかける…。日本人としての俺は…あいつに救われたんだからな…」

いつもは見せない鋭い病弱をした水野の言葉に河井も静かに頷く。

「俺もだ…。俺も救われた…。自分よりも年下の…17の少年に…」

二人は顔を見合わせる。

二人は自然と拳を突き出し軽くぶつける。

二人はここでトーヤに付き従っていくことを誓い合った…。

互いに笑みを交わすと再び騎士団のアジトに向かって走り始める。

「まあ、トーヤ君が租界から出てこないと何もできないしな。今は恩返しのを機会を待とう。」

河井はわざと大きな声を出す。

辛気くさいのが嫌いな彼らしい行動だった。

「ああ、帰ったら訓練だ。」

真っ赤に空を染める日の光がゲッターを歩く二人の背中を照らしていた。

：

……

……

アジトに二人が帰ってくるとラウンジにはゼロやカレンと話すトーヤがいた。

三人がいる部屋に二人は足を踏み入れる。

「あ、水野さん、河井さん。お帰りなさい。」

「ただいま。何の話をしてたんだい？」

「ちょうど二人の話をしてたんですよ。」

「俺たちの？」

二人は驚いた顔をする。

まあ、自分の話をしている所に入っていたのだから仕方がない。

「そうだ。お前たちは地味だと話していたんだ。」

「「は？」」

ゼロの言葉に二人はさらに驚く。

「ゼロ、それはストレートすぎるんじゃない。」

カレンがそれとなくゼロをたしなめる。

しかし、トーヤの言葉が二人にトドメを差した。

「まあ、それが二人なんだよ。地味なのはなかなか抜けないさ。」

「な…っ」

二人はさすがに堪えたようでがっくりと肩を落とす。
その様子を見てゼロがまた口を開く。

「影が薄いしな…。」

「んなあ…っ」

二人は凹んだ。

「あっ、凹んだ。」

トーヤは二人を見て笑う。

水野は河井を見て小声で囁く。

「さっきのやつ…俺、取り消すよ…。」

「俺も…」

二人は凹んだままラウンジの椅子に座ってトーヤたちの会話を聞く。

離れて見れば確かに二人は地味に見えた…。

MEMOLY—11 蒼月 翔ぶ

カレンは無数の銃弾に撃たれて死んだ…。彼女のいた場所は銃弾と砲弾によって土煙に覆われていた。

「カレン！」

扇はさけぶが、その声はおそらく彼女には届いていないだろう。

「カレンが…やられただと…？…ぐうっ！すまない…トーヤっ…お前の大切なものを…」

ゼロは言葉の中に悔しさを滲ませていた。トーヤが守りたいと言っていたカレンを死なせてしまった後悔からだ。

ゼロは粉塵の中に目を凝らす。生きているのではないかという淡い期待からだ。おそらく他の者も同じだろう。

戦場に少しの間沈黙が流れる。

だが、晴れていく土煙の中には誰もが予想もしていなかった情景があった。

「な、なんだあいつは!？」

土煙の中には紅蓮を守るようにシールドを展開している蒼と銀で塗装されたナイトメアがいた。
ゼロはそれを見たのだ。

「みんな、遅くなってすまない。」

「その声は…! シェイドか!？」

「そうだよ、ゼロ。」

俺はシールドをOFFにして敵のサザーランドと向き合う。

「君が無事でよかったよ…。」

カレンに通信で話しかける。紅蓮に損傷はないようだ。

「シェイド、来てくれたのね…。」

カレンから安堵の声が聞こえた。心配はないようだ。

「皆、下がっている。奴らは俺が…!」

腰に装備された二本のMVSを抜く。

敵は七機…集結されたが突破口はある。

俺の機体―“蒼月”なら!

俺は敵部隊に突撃する。ライフルやバズーカによる銃撃に曝されるが、木や岩をうまく使い全弾スレスレで交わす。

敵の目の前にあつという間にたどり着くと、MVSで敵の胴体を切り裂く。サザーランドは爆発する。

「まずは一機!」

『クソッ!なんでだ!?弾がすり抜けていく…。』

こちらの機動力に動揺している機体に狙いを定める。二本のMVSを一本につなぎ合わせ、右肩を切り落とす。

「二機目!」

近接戦闘に入った敵部隊は銃撃をやめ、スタントンファを展開して襲いかかってくる。

俺は機体を下げてかわし、左腕のスラッシュハーケンを放つ。

敵に命中すると首から肩にかけて簡単に切り落とした。

「ハーケンにもMVSが搭載されているらしいな。」

俺はハーケンを戻した左腕をモードを切り替えて指先に装備された“ルミナスフィンガー”を展開し、近くのスザーランドに輻射波動を撃ち込む。

スザーランドは上半身が膨張し始める。

『くそっ！動け！イレブンに負けてしまう！我々、ブリタニアの…』

スザーランドは爆発する。

仲間のスザーランドから声が発せられる。

『キューエル卿が…やられただと…？』

スザーランドを4機破壊した所でゼロから通信が入る。

「シェイドと紅蓮はポイント9に向かえ！後は我らで突破する！」

「了解！」

俺とカレンは方向を変え、ポイント9に急ぐ。と、カレンから急に通信が入る。

「トーヤ、さっきは…助けてくれてありがとう…。」

「言っただろう？守ると。俺がいるうちは誰も死なせはしないから。」

カレンは画面越しに笑っている。あろうことか戦場で…

「そうだったわね。あなたはゼロの騎士であると同時に私の騎士だものね。」

「フツ、そうだ。私は蒼の騎士だからな。」

レーダーに4機編成の小隊が映し出される。このまま進むとぶつか

る。

「カレン、戦闘準備を！」

「はい！」

俺が先に敵の前に姿を見せる。スピードを落とさずに突撃し、両腕のMVSハーケンで二機撃破する。

後から来たカレンも輻射波動で一機撃破した。

残る一機はライフルを乱射しながら後退する。しかし、それよりも早く俺は機体を寄せ、肉薄する。

腰のMVSを抜き、真っ二つに両断する。

目の前の障害を取り除いた俺たちはポイント9に向けて再び移動を始めた。

…

…

…

その頃、ブリタニアの本隊に奇襲をかけていた藤堂以下四聖剣は親衛隊相手に善戦していた。

「自在活殺陣をしけ！」

「「「承知！」」」

藤堂は“奇跡の藤堂”と呼ばれる日本屈指の猛者であり、その實力は騎士と將軍の器を持っているとブリタニアに言わせるほどである。

また、部下の四聖劍もかなりの實力をもっており、彼らのいる所に敗北はないと言われる。

藤堂はコーネリアの騎士のギルフォードと戦っているが、ほぼ互角に戦っている。

…

…

…

ポイント9についた俺たちはコーネリアの騎乗するグロースターと対峙していた。

「シェイド…、あいつは私がやる。あなたは見てて。」

モニターに映るカレンの瞳には強い意志が宿っていた。

俺は彼女の言葉に静かに頷く。

紅蓮はグロースターに向けて加速に入った。

『この…脆弱者が！』

紅蓮はコーネリアのグロースターと交差する。

後ろから紅蓮の右腕が掴もうとするが、なかなかの機動でグロースターは回避した。

二機が互いに距離をとると、ちょうどゼロ率いる本隊が到着したようだ。

「久しぶりだなコーネリア。あなたには捕まってもらう…聞きたいこともあるしな。ちなみに援軍は間に合わない。あなたの負けだ。」

ゼロがオープンチャンネルでコーネリアに話しかける。

『くっ…、ゼロか。…愚かな…、こいつらさえ倒せば活路は拓けるんだよ！』

コーネリアはランスを構え、紅蓮に突撃する。鮮烈な突きがグロースターから繰り出された。

しかし、紅蓮は右手でその攻撃を受け止めてランスに輻射波動を撃つ。

グロースターの右腕を破壊することに成功した。

また、ほぼ同時にゼロの射撃によってグロースターは左腕をも失った。

『ぐうつ…！後ろから撃つとは…卑怯だぞ！』

「卑怯？ならばあなた方の作戦は卑怯ではないと？」

これでコーネリアは絶体絶命の状況に陥ったことになる。

5対1…数的不利な上に両腕を失っている…。
突破は紅蓮と蒼月がいる限り不可能…。
完全なチェックだ。

『我が騎士、ギルフォードよ…。ダールトンと共にユフィを補佐してほしい…。』

『コーネリア様…！何を…』

『私は降伏はせん…。皇女として、最後まで戦うのみ！』

コーネリアは再び紅蓮に向けて突進を始めた。

コーネリアの言葉やそれから感じられる意志は一人の武人として称賛すべきものだろう。

…だが、それまでだ。

グロースターと紅蓮が相間みえる。
その刹那…、辺りを囲む岩壁を破壊して白いナイトメアと親衛隊の
騎乗するグロースターが一機現れた！

「また白兜か！」

『殿下、ご無事ですか？』

『特派の…いったい誰の命令で…』

白兜とグロースターはコーネリアを守るように寄り添う。
状況を見守っていると、援軍のグロースターからオープンで通信が
入った。

『お前たちが黒の騎士団だな？』

女性の声だ。俺もオープンチャンネルで返答する。

「そうだ…。お前は親衛隊のようだな。」

『私は親衛隊ではない。私は帝国最強の十二騎士の一人…ナイトオブナインーノネット・エニアグラムだ!』

「ナイトオブナインだと!?!」

ナイトオブブラウنز…帝国最強の十二騎士…。彼らは例外なく異常なまでのナイトメア操縦技量を持っている。

「なぜお前がこんな所に…?」

『お前たちに教える義理があるのか?』

ノネットのグロースターがランスを構える。

(戦うしかないか…)

「我が名は蒼の騎士ーシェイド!ノネット・エニアグラムよ!勝負だ!」

『面白い!やるかあ!?!』

「紅蓮！白兜の突破力は邪魔だ！そいつを破壊しろ！」

ゼロからの指示が飛ぶ。

同時に全機が戦闘態勢に入る。

俺はグロースター、紅蓮は白兜、ゼロたちはコーネリアと向かい合う。

「行くぞお！」

俺はかけ声と共に背中の中剣を抜き、ノネットに斬りかかる。
だが、相手も簡単にはやらせてくれない。ランスで受け止められてしまう。

他の機体も動き出したようで戦場は乱戦になっていた。

左腕のブレイズフィンガーを展開し、グロースターに輻射波動を撃とうとするが下がられてしまう。

『すごい機体だな…。』

グロースターから声が聞こえた。が、気にはしない。

ただ倒すまで！

腰からMVSを抜き二本を一本につなげて槍にする。

金色の長剣を突くように突進する。避けられるがスピードを落とさずに肉薄して機体を回転させる。

逆側に装備されたMVSで斬りつける。

『しまった！』

グロースターから発せられる声で攻撃が決まることを確信するが、白兜に脇腹を蹴られて態勢を崩してしまう。

そのまま態勢を立て直したグロースターに押され、岩壁に叩きつけられる。

「ぐあっ！」

モニターを見ると断崖に追い込まれていく紅蓮が映っていた。

「…っ、カレン…！」

身動きがとれない。

もがいているうちに紅蓮は崖下に転落してしまった。

「カレン！……貴様らああ！！」

グロースターに膝蹴りを食らわし、吹き飛ばし、態勢を整えられる前に剣で切り裂く。

『やるなあ…、私の負けだ。楽しかったぞ！』

ノネットはそう言うのと脱出していった。

俺は白兜にフルスロットルで接近する。

「死ねえ！」

力いっぱい長剣を振り下ろす。
だが、やはり受け止められてしまう。

左腕の輻射波動機構を展開し、白兜のシールドを破壊した。

その時、ゼロから通信が入る。

「シェイド！カレンなら無事だ！退けっ！」

「無事か…」

俺はチャフスモークを射出し、崖から飛び降りる。
下にはカレンの駆る紅蓮と扇さんと玉城の騎乗する無頼の三機がいた。

「カレン、大丈夫か!？」

「ああ…」

どうやら紅蓮は右腕を損傷しているようだ。

「みんなは退いてくれ、俺は解放戦線を援護する。」

「待って、私も行くわ!」

カレンも名乗りを上げるが、俺は手で制す。

「紅蓮は損傷していて満足には戦えないだろう。退くんだ。」

カレンが首肯で応える。

それを確認し、俺は方向を変えてアクセルを踏む。

しばらく行くと前方に5機程度の集団がレーダーに映った。

（こんな主戦場の外れにナイトメア？しかし、方向的にはコーネリアを救出するための部隊：親衛隊か。）

敵影が見えてくる。

やはりコーネリア親衛隊が騎乗するグロースターだった。

藤堂たちと交戦したらしくそれぞれ破損箇所が見られる。

『こいつがコーネリア様をやった新型機か！？皆、気を引き締めよ！』

先頭の機体が合図するとグロースターがこちらを囲むように散らばった。

「親衛隊とはいえ、蒼月には！」

俺は動きを止めて敵の出方を待つ。

右手には長剣―長斬刀とMVSをつなげたランスタイプの剣を持っている。

敵はまず二機で後方から襲いかかってきた。ランスの突きを払い、二機を一気に両断する。

残った三機は銃撃をしてくる。かわしつつ接近しさらに一機撃破する。

が、その隙に二機がすり抜けて逃げていった。

「親衛隊が聞いてあきれる。」

俺は再び解放戦線の主力部隊援護に向かう。

水野と河井を呼び寄せ、状況を確認する。

「トーヤ君、解放戦線はもうもたない。援護はしたんだが、コーネリア軍の物量に押されて…」

「くそっ、遅かったか！…二人とも、退くぞ！」

俺たちは解放戦線援護を諦め、騎士団の撤退するポイントへと急い

だ。

⋮

⋮⋮

⋮⋮⋮

ポイントに到着すると、黒の騎士団は歓喜に沸いていた。

コックピットを開き、みんなに顔を見せるとさらに歓声が大きくなる。

「お帰りなさい、トーヤ。」

カレンが話しかけてくる。ナイトメアに騎乗する時の服の上から騎士団の制服を羽織っていた。

「解放戦線はダメだったみたいだな。」

「すまない扇さん、俺が着いた時にはすでに部隊は総崩れになっていた。」

「あやまることはないさ。…それより、お前の活躍はスゴかったな！あのナイトオブラウンスを退けるなんて、奇跡が起こらない限り不可能だ！」

「そうよ、あなたの操縦は本当にスゴかった。私なんかよりずっと！」

「そうでもないさ。扇さんの言うとおり奇跡が起こっただけ。」

そう言うの一つのことに気づいた。

奇跡の立役者ゼロがいない。

「なあ、ゼロは戻ってきていないのか？」

「ああ、ゼロの無頼と連絡がつかない…。もしかしたら敵に…。」

頭の中に最悪のシナリオが浮かぶ、嫌な考えを振り払いケータイに電話する。

三度のコールの後にゼロが出る。

『トーヤか？』

「ああ、今どこにいるんだ？」

『心配をかけたようだな…すまない。ポイント10・8にいる。C.
C. も一緒だ。』

「了解。向かえに行くから待ってろ。」

『お前にはいつも世話になるな。』

「気にするな、親友—だろ？」

『そうだったな。ありがとう。』

ゼロはそう言って電話を切る。

「カレン、ゼロたちの居場所が分かった。迎えに行くからついてきてくれ。」

「ええ。」

俺とカレンは再びナイトメアに乗り込み、ゼロたちを回収するため

のポイントに向かった。

…

…

…

ポイントにたどり着くとゼロたちのいる洞窟の奥へ向かう。
しばらく行くとゼロたちがいた。

「ゼロ、迎えに来ました。…っ！誰！？」

カレンはC・C・に気づき、警戒しているようだ。

「安心しろカレン。彼女は私たちの大切な仲間だ。」

「えっ？じゃあ、トーヤもあの人を知ってるの！？」

「ああ、知ってるよ。まあ、話は後だ。ここから脱出しよう。」

「ああ…。C・C・！私はどうしつ雪が白いかは知らない。…しかし、白い雪は綺麗だと思う。私は嫌いではない。」

「そうか…。」

ゼロとC・C・はワケの分からないことを話していた。
だが、プライドの高いルルーシュと尊大に振る舞うC・C・…二人
の距離は確かに縮まったようだ。

「さあ、行こう。皆が英雄の帰りを待っているぞ。」

「ああ、帰ろう…。」

何があったかは知らないが、確かに何かが起こったのだろう。
帰ったら二人に聞いてみよう。

ナリタ連山から撤退し、騎士団のアジトとして使われているトレーラーに帰還した。

蒼月のキーを抜き、コックピットから降りると同時にカレンも降りてきた。

「お疲れ様。それって…そのナイトメアのキー？」

「ああ、そうだ。」

カレンの目の前にキーを差し出して見せる。
するとカレンも合わせてキーを差し出してきた。

「やっぱり、紅蓮は紅い羽の形だけど、あなたのは蒼い羽みたいね。」

「あつ、本当だ。偶然だな。」

紅蓮と蒼月のキーはちょうど対になる羽の形だった。
紅と蒼…色的にもちょうどいい。

「すごいな。ピッタリ対になる形だ。」

キーを手元に戻し、見つめる。
気にしていなかったが、キレイな蒼だ。

「私も紅蓮という力を手に入れた。これでようやく…あなたと肩を並べて戦える。」

カレンが嬉しそうに微笑む。

彼女は騎士団にいる時は活発な女の子だが、微笑む時は学園で見せる優雅で優しい笑顔なのだ。

俺もカレンにつられてつい頬が緩んでしまう。

しかし、それはカレンにつられたというだけではない。

蒼月という強大な力を手にして、守るための…ブリタニアを潰せる可能性が出てきたからだ。

「本当は男勝りな性格なのにな。」

ついそんな言葉が出てしまう。

「ちょっと、それ、どういう意味？」

カレンは急に不機嫌になった。
彼女はからかっていると本当に面白い。

「なんで学園ではあんなにモテるんだろうな、と思ってさ。」

「モテてると何か悪いの？」

「別に悪くないさ。ただ、もしみんなが君の本性を知ったらどんな反応をするか興味がある。」

「みんなに教えるつもりなんてないわよ！」

そんなふうにかレンと話していると、急に扇さんに呼ばれた。

「おい、二人とも。ゼロが呼んでる、ラウンジに来てくれ。」

「分かった。カレン、行こう。」

扇さんについてゼロのいるラウンジに向かう。部屋に入ると井上や玉城などの幹部が皆揃っていた。

「我らがツートップのご登場お。」

玉城が茶化すような声をかけてくるが、それを無視して先に部屋に入ったカレンがゼロに声をかける。

「ゼロ、何か用ですか？」

「ああ、今回の作戦についてだ。君たちの活躍なしにこの勝利は有り得なかった。」

「ありがとうございます。」

カレンは嬉しそうに元氣よく返事をする。

「カレンについては我らの突入口の確保。コーネリアに打撃を与え、白兎と互角に渡り合った。君なしでは我々はこけにすることはできなかっただろう。黒の騎士団はこれからも君の力に頼ることになるだろう。頼りにしている。」

カレンは嬉しそうな笑顔になる。

「また、トーヤ。君は途中からの参戦とはいえ、カレンを救い。ま

た、ナイトオブブラウンズや白兜を圧倒する操縦技量は賞賛に値する。
」

「運がよかつただけさ。」

「ククッ…、さすがは我が騎士だ。しかし、その能力を私だけに使うのはもったいない。君には戦闘隊長の地位に就いてもらう。ナイトメア部隊ね指揮・管理は全て任せよう。」

「了解した。」

「私は運がいい。こんなにも頼もしい仲間がいるのだから…」

ゼロは仮面に手を当て、さも感慨深そうに呟く。

「トーヤ、カレン！君たちには騎士団の双壁としてその力を奮ってもらう。頼んだぞ。」

「ああ、任せてくれ！」

話が終わると皆それぞれに座ったり部屋から出ていたりしていた。俺はゼロに近づき話しかける。

「騎士団の双壁…か。面白いことを言うな。」

「嫌か？君が俺のために戦ってくれるというからその地位を用意したんだ。」

「まあ、そうだな。俺は君たちのために戦う。大切なものを守るためにだ。」

「分かっているよ。いつもすまないな。」

ゼロは仮面の中で笑った。

俺は格納庫に戻り、蒼月の整備をすることにした。
そこに行くと扇さんが物資の入った箱に座ってため息をついていた。

「どうしたんですか？」

「ん？ああ、君か。いや、本当にこれでいいのかと思ってな。」

「えっ？」

「今回の戦いでは多くの犠牲が出ただろ。しかも仲間だけではなく、罪のない麓の住民にまで。」

確かに、崩れた山は山麓の街を破壊し、埋め尽くし、そして多くの犠牲が出た。

「扇さん…、それは後悔すべきだ。」

「えっ？…どうということだ？」

「もし自分の中でその行為が納得できなかったり、間違っていると
思うのなら変えようと動くべきなんだ。しかし、今は黒の騎士団。
ゼロには逆らえない…。だが、ブリタニアと戦う理由は間違っている
という考えからだろ？それにこれは戦争なんだ。守りたいのなら
…強くなれ…！」

扇さんはしばらく黙ったままでうつむいていた。

しかし、顔を上げると急にスッキリしたような声を出した。

「そうだよな、俺も強くなりたい。強くなって日本を取り戻す！」

「そうだ。でも、犠牲を嫌がる自分を忘れてはいけない。あなたは

人の上に立つ器がある。ゼロが犠牲を背負う、…だからあなたには生きている命を背負ってもらいたい。俺も、自分の意志で守るべき者を背負うから。」

「ああ、任せてくれトーヤ！俺はもう昔の文句ばかりの俺じゃないんだ。仲間の命を背負ってやる！」

扇さんは勢いよく立ち上がる。

「悩みは吹っ飛びましたか？」

「ああ！俺も頑張る、君のようにな！」

「それはよかった。」

扇さんは格納庫から走って出て行った。

きつと自分のできる仕事を探しに行くのだろう。
マメな人だ…

「カレン、いるんだろ？」

「あれっ？バレてたんだ。」

カレンが紅蓮の影から顔をだす。

「あなたが言い争ってるみたいだったから出て行きづらくて…」

「そんなんじゃないよ。扇さんは迷っていたから励ましたんだ。」

「そう…なんだ。」

「そう、君が人を殺すことに迷っているように。」

カレンは一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに平常の顔に戻る。

「まだ…分かんないよ…。でも、今、私は騎士団の双壁…。頑張らなくちゃね。」

カレンは少し辛そうだった。

やはり人を殺さなければならぬことに悩んでいるのだろう。

「カレン…。」

「ちょっと！そんな心配そうな顔しないでよ。…大丈夫、あなたと一緒に…戦えるから。」

そう言うとカレンは再び紅蓮の整備に戻る。
彼女の表情は晴れないままだった。

MEMOLYー12 キョウトからの使者（前書き）

すいません、間が空きすぎました。

またガンガン書きます！

よろしく！

MEMOLOGY-12 キョウトからの使者

ナリタ連山での戦いから2日。ナリタ攻防戦の功労者だからと俺とカレンには休みが与えられた。

ちなみに俺は今、授業をサボって屋上で寝ている。

授業で習うことは記憶を失う以前にほとんどを学んでいたようで、出なくても理解できるから安心だ。

このことも俺がどうして記憶を失ったのか、手がかりになると思ったが、全然役には立たなかった。

「お前もここにいたのか。」

誰かが屋上に設置されたハシゴを登ってきた。

「ああ、ルルーシュか。君もサボリか。」

「そうだ。せっかくみんながいろいろやってくれているんだ。しっかり休まないとな。」

「それには賛成。」

ルルーシュは俺の隣に来て本を広げる。
ナイトメアに関する本のような。

「ルルーシュ、こんな所でナイトメアの本を読むなよ。」

ルルーシュは本から目を離さずに返事をした。

「大丈夫、見られても俺にはギアスがある。スザクだって、仕事でいないしな。そういえばお前は何をしてたんだ？」

「空を見てた。」

「空？」

ルルーシュは不思議そうな顔をしている。まあ、空を見る人は多忙なブリタニア人にはいないからだろう。

「そう、青と白の色使いしかないけど、日本の空を見ているとすごく懐かしいんだ。」

「ほう…、だとするとお前は日本人なのかな。」

ルルーシュは表情を変えない。

「日本人だったら…いいな。」

「…そうか。」

ルルーシュは軽く微笑む。

特に理由はないだろう。ただ笑いたくなっただけ…。

（今はとりあえず先生が来るまで昼寝しよう。）

そう思い、吹いてくるそよ風の音に耳を傾けながら目を閉じた。

…

…

…

放課後―

今日もカレンと租界探索。

とは言え、何度も案内されているのでどこに何があるかとかは完全に覚えた。

「カレン、今日はどこに行くんだい？」

「あなた、昼休みに映画館の近くを入念に探索したいって言ったじゃない。」

「そうだったっけ？」

記憶を遡ってみる。昼休みにカレンに呼び出され、租界とゲットーを行き来する際には気をつけるように忠告された。だから、あまり行かなかった映画館近辺の路地などを確認したいと言ったのだった。

「そうよ。さあ、行きましょう。」

お嬢様モードのカレンはゆっくりと歩き始める。いつも思うが、お嬢様モードだと歩くのが遅い。

「なに？」

「なんでもない…。」

特に文句は言いづらいため口にはしないが…。

「今は…『シャルテの光』っていうのを上映しているみたいね。」

カレンは映画館の上の方に設置されている看板を見上げて言った。

この映画は記憶喪失の男が偶然自分を拾ったシャルテに恋をし、二人の仲が深まる程に記憶を取り戻すという魔法などのファンタジー要素が強い作品らしい。けっこう有名らしくてリヴァルが絶賛していたのを覚えている。

「あなたみたいね…。」

カレンは静かに呟いた。

「確かに……。俺も…この映画みたいにハッピーエンドになれたらいいな……。」

この映画のようにハッピーエンドになれるとは限らない……。ここまで思い出せないと思いつくのが嫌な記憶しかないのでは…と不安になる。

「大丈夫よ……。きつと……。」

カレンは俺を気遣ってか優しく話しかけてくる。

「そうだね、とにかく早く記憶を取り戻さないと。・・・そういえばこの映画、けっこう有名みたいだけど・・・見ていくかい？」

「ええっ！」

カレンはいきなりの俺の申し出に驚いているようだ。

次第に頬まで赤くなっていく。

なにか変なこと言ったかな？

「え、ええ・・・。それじゃあ、か、帰りに寄っていきましょう。」

そう言うとかレンはぎこちない動きで歩き出す。

（前に手をつないだ時はこんなに動揺はしなかったのに・・・）

そう思いつつもそんなカレンが珍しかったので、それ以降彼女をジッと観察した。

...

.....

.....

翌日――

「シャーリーからデートのお誘いかな？ ルルーシュ君。」

「なっ、バカ！ そんなことではない！」

ルルーシュは動揺しているようで声を荒げた。
彼の手にはコンサートのチケットが握られていた。

「だって彼女が君のこと好きなのはまる分かりだって・・・それにルルーシュだってシャーリーのこと、嫌いじゃないだろ？」

「確かに・・・嫌いではないが・・・」

ルルーシュはそう言って少しだけうつむき、優しい目をする。
ルルーシュがこんな反応を見せるのはシャーリーだけだ。いかに彼女がルルーシュの大切な存在かはそれでわかる。

「まあ、何も用事が入らないことを祈るんだな。応援してるから・・・」

「な・・・っ、バカ！そんな関係ではないぞ！」

ルルーシュは俺の勘ぐりを全力で否定した。

...

.....

.....

騎士団 アジト―

「はい。」

扇さんがゼロに手紙を手渡す。

「なんだこれは？」

「ラブレター。」

「何だと？ お前…」

「ギャアッハッハッハ！ そいつに冗談は通じねえって扇い！」

玉城がゼロが扇さんの冗談に真面目に返すのを見て爆笑し始めた。

「玉城笑いすぎ。」

紅蓮の取説を持ったカレンが玉城をたしなめる。

さっきのルールシュとの会話を聞いていたわけではないだろうが、あんな冗談を吐くとは扇さんもなかなか空気が読めている。

「ゼロ、これはキョウトからの手紙だ。」

ゼロはそこでようやく手紙を受け取った。

「ナリタでは紅蓮をうまく使ったって誉められたよ。」

「ああ、あれは感動だったな。」

扇さんの言葉を聞いて、杉山はさも感慨深げな声を出す。しかし、ゼロはどうでもいいらしく、手紙を開く。

「ナリタじゃあ、大活躍だったもんな！ なあ！ カレン。」

皆に誉められているのに紅蓮に乗っていたカレン本人はなぜか不機嫌そうな顔だった。

「でも、白兎に・・・」

「気にすんなって！引き分けだろ？ひ・き・わ・け！」

納得がいかなそうなカレンをよそに扇さんとゼロは話を続ける。

「で、ゼロ。キョウトは何だって？」

「フム・・・、どうやら私たちと会いたいということらしい。」

その言葉に場が驚きに包まれる。

「な・・・っ！キョウトが！？」

「嘘だろ？おい！」

「マジかよ・・・」

団員たちがそれぞれ反応を見せる。

誰もが面会したいと言われただけでここまでの反応を見せるのはキョウトというグループの強大さと格の高さを端的に表している。だが、ゼロだけはどうも反応が薄かった。

「フツ・・・、なんだそんなことか。」

「そんなことって・・・！？あのキョウトですよ。」

カレンはゼロがキョウトの凄さを知らないということにさらに驚いているようだ。

「カレン、無駄さ。こいつにはそういった常識は通じない。」

「確かにそうかもしれないけど・・・」

「ト、トーヤ！とりあえず準備しなきゃ！ええ・・・と・・・、何着ていけばいいかなっ？」

「いや、ちよっ・・・扇さん、騎士団の制服でいいでしょう？少し落ち着いて。」

しかし、気がつくともみんなが焦っている。

（この人たちは本当にレジスタンスなのか？）

そんな疑問が沸いてしまうほどみんなの慌てる様がおかしかった。

：

・・・

.....

とりあえずみんなが落ち着くと扇さんとゼロが再び話を始めた。

「まあ、ともかくキョウトから援助が受けられれば物資や隠れ家に困ることはないし、俺たちの苦しい財政だって」

「財政？私の割り振った予算通りなら問題はないはずだが？」

「うっ・・・それは・・・」

扇さんは言葉に詰まり玉城に視線を送る。ゼロも扇さんの視線の先にいる玉城を見た。

「なっ・・・し、仕方ねえだろ！俺たちはもう大組織なんだ！人員が増えりゃ、予定外の出費だって・・・」

「大物ぶって新人に奢りまくるのが予定外？」

カレンが玉城に厳しい言葉を浴びせる。そういえばカレンはそういう性格だった。

「なっ、んだとお！？」

「私知ってんだからね！どんな店に行ってるのか！」

「えっ？そうなの？」

怒り出した玉城がカレンの一言でおとなしくなった。どんな店に行っているのかそれだけで想像がつく。

というより俺も知っている。ここでは言わないが・・・

「カレン、やめてやれって。玉城が可愛いそうだろ？」

「な・・・っ、トーヤ！誰が可愛いそうだって！？」

「玉城・・・店の名前、バラすぞ。」

「うえっ！や、やめてくれえ！」

玉城が俺に懇願してくる。

そんなにバレたくないのかと思ってしまう。

「とにかくだ。これから会計は扇が仕切れ。」

「おい、ちょっと待てよ！俺が会計を仕切ってきたんだ！俺が……！」

玉城はゼロに反発して立ち上がるが、ゼロの判断は確かだ。

「信頼されたいのなら、能力を示せ。」

「あのなあ、お前がそれを言うかあ？仲間に素顔も見せねえ奴がよお！」

玉城の言葉に幹部連中が反応する。

やはり素顔を見せないゼロを疑っている人間がほとんどなのだろう。

「ちょっと……やめなさいよ！ゼロは私たちリーダーよ！」

カレンはゼロをかばうように両手を広げて玉城の前に立ちはだかった。

「カレン、そこをどけ！！」

「どかない！ゼロは私たちに勝利をくれたのよ！それ以外に何が必要だっていうの！？」

「カレン、やめろ。」

…

…

…

その場はなんとか収まったが、杉山と吉田に呼び出されゼロ抜き
の会談をすることになった。

「ゼロを信じていいのかよ？」

「妹のカレンは構わないが・・・ゼロは・・・」

各々ゼロが素顔を明かさないことに対する疑惑を持っているようだ。

「扇、お前がリーダーを譲るから・・・」

「仕方ないだろ。それにナリタの時はみんなだって・・・」

「でも、あれは脅迫に近かったし・・・」

場が沈黙する。

自分たちはこれでいいのかという不安の中にゼロについてきた後悔
も少しはあるのだろうし、ゼロをかばうカレンを思う気持ちもある
のだろう。

「なあ、みんなは俺を信じているか？」

「えっ？」

俺の言葉に皆の頭に疑問符がつく。俺の質問の意味が分からないだろう。答えは決まっているからだ。

“信じている”

彼らはそう思っている。元自分たちのリーダーであったカレンの兄の最期を看取り、その妹を守ろうとする俺を信頼しているのだ。それは彼らの俺に対する態度でもよく分かることだった。

「トーヤ、何を言っているんだ。信じているに決まっているだろ。」

扇さんが予想通りの答えを返してくれた。周りの幹部たちも彼に次々と同調する。

「では、どうして信頼してくれるんだ？俺はゼロのように仮面で素顔を隠し君たちに接近した。記憶喪失で過去も素性もわからない。こんなに怪しい俺を信じて、どうしてゼロを信じられないんだ？」

俺の言葉に皆が沈黙する。

この問いに答えられる者はいないだろう。記憶喪失という点ではある意味ゼロよりもたちが悪い。

「俺は最初に会ったときから信じてたよ。」

「えっ？」

扇さんの言葉に今度は俺が声を上げてしまう。

「どうしてですか？」

「君は俺とカレンにお茶をくれたんだ。」

俺はまた記憶を遡る。

それはスザクを強奪する準備を進めている時だった。

―真夜中の作業で疲れきっていたみんなにお茶をあげた。

確かに覚えている。お茶をあげたのだ、扇さんとカレンに。

「そんなことで・・・？」

「ああ、こんな気配りをできる人間に悪い人はいない。なんとなくだけど・・・そう思ってしまったんだ。」

扇さん・・・前からお人好しだと思っていたがここまで・・・。

「フフツ、扇さん・・・あなたはやはり人の上に立つべき人だ。」

「そんなことはない。みんなをまとめ、ここまで信頼される君こそがその器だ」

「ああ、そうかもしれないな。」

「杉山・・・」

「いや、そうに決まってるあ！」

「玉城・・・も」

「なっ、みんな君を頼り、信賴しているんだ。これからよろしく頼む蒼の騎士。」

「ありがとう扇さん、それにみんな。」

みんなの言葉が胸に染みる。

素性も過去も分からない……。それだけで彼らには俺を疑う権利がある。

でもそうはしない。彼らはそういった人間の集まりだから……。

「おいおい、泣くなつての！」

「泣いてない」

玉城に反論しながらも目元を指で拭ってみる。確かに少し指先が濡れていた。

「みんな、俺を信じてくれるのならゼロも少しは信じてほしい。彼はみんなには確かに素顔を見せてはくれない。それには理由があるからなんだ。頼む。」

「分かった。もうゼロを疑うようなマネはしない」

「本当ですか!？」

「ああ、俺たちのリーダーはゼロともう一人……。君だ。日本を取り戻すため、改めて俺たちに力を貸してくれ」

扇さんが頭を下げる。

すると座っていた人までが立ち上がり、「頼む」と頭を下げ始める。

「おやすいご用だ!」

みんなが頭を上げた時にはあまりにも涙腺が緩んでしまったため、慌ててその場を後にした。

…

……

………

「そこで何してるんだ?」

ゼロのいるラウンジに行くと扉の前でノックをためらうカレンに遭遇した。

「トーヤ・・・さっき、出すぎたことをしたから謝ろうと思って・・・」

カレンはそう言って視線を下に落とす。

やはり彼女の中にも葛藤があるのだろうか。ゼロの正体を知りたいという自分と今のゼロを信じたいという自分。

「君はゼロの正体を知りたいか?」

「えっ?」

彼女の顔が驚きと困惑が混じった表情になる。
彼女は短く縦に首を動かした。

「なら、ついて来い」

扉をノックし中に入る。

ゼロはいつも通り仮面を被り、いつも通りの場所でパソコンのモニターを開いていた。

「ゼロ、今の話・・聞こえていただろう？」

ゼロの仮面は動こうとはしなかった。

彼の言葉だけがこちらに向けられる。

「お前はいつも見透かしたような話し方をするな。唯一の・・・嫌いな所だ・・・」

「ああ、そうだろうな」

ゼロはこちらに向いて話し始める。その言葉にはわずかに怒りが混じっていた。

「さっきの答えならイエスだ。だが・・、私は自分の素顔を見せる気はない。お前はその理由を知っているだろう!？」

ゼロの中に感じられる微かな怒り・・・。

俺は今、ゼロを裏切ろうとしているのかもしれない。

だが、どうしていいか分からない。

扇さんは信じると言ってくれた。

でも、ゼロは信頼されようとは思わないだろう。

そうなれば扇さんたちはゼロを信じようとは思わない。

そう考えるということは、自分もみんなを信じようとはしていないのかもしれない。

突然、自分の中が冷めていった。

それはゼロやみんなに対してではない、自分に対しての軽蔑である。

「ああ、知っているよ。・・・すまない、お前がそう言うのなら・・・」

カレンの方へ目を向ける。彼女はゼロと俺のやり取りを見て、困惑しているようだった。

「ゼロの正体は教えられない」

それだけ言って、部屋から出る。

自分がおかしい。

いつものように喋れない、カレンが迷っているという時にあんな行動をし、ゼロを潰してしまふような言葉をかけた。

鏡で自分の顔を見てみると恐ろしく感情の感じられない表情をしていた。

自分の中に違う自分がいるような感覚。

とても冷めていて、とても残酷・・・。

もしかしたらこれが俺なのかもしれない・・・。

嫌な考えを振り切るように走って学園のクラブハウスまで戻った。

…
…
…

……

翌日――

「ルルーシュ、昨日はすまなかった」

朝、クラブハウスを出ようとする彼に後ろから声をかける。

彼はこちらを向くといつもの笑みを浮かべた。

「おはよう、トーヤ。学校に行くんだろう？早く来い」

「あ、ああ」

ルルーシュの態度に昨日のような怒りが一切感じられないことに驚きつつも目の前の階段を急いで駆け下りる。

待っていたルルーシュが俺を見て真剣な顔になった。

「昨日のお前はどこがおかしかった。あんなに冷たい目のお前は初めて見たぞ」

「確かに、自分でも驚いた。考えながら歩いていて偶然カレンに会った。そこから急に頭の中を不安に支配されてしまったんだ」

「不安？　いったい何に對してだ？」

「分からない。自分でも・・・」

ルルーシュの問いにうまく答えることはできない。
分からない――過去も自分も何もかもが・・・。

「まあ、あまり気にするな。昨日は驚いたが、今はいつものお前だ。それより、一緒に来てくれ。今日はキョウトへ何としても協力を取り付ける。」

「分かった」

…

…

…

「幹部の方々も共にお連れするようにと主から仰せつかったのですが」

あたりを濃霧に包み込まれた灰色の廃墟・・・そこがキョウトから指定された合流点だった。

キョウトから派遣された運転手は謙遜しながらもゼロにそう言い放つ。

つまりは幹部たちはどこにいるのだという疑問を提示している。

「今は万が一に備えて周囲を警戒させている。」

「そうですか。では、先に乗ってお待ちください。」

「ええ、ですがその前にあなたにはやってもらいたいことがある」
そう言ったゼロの仮面の左目部分が開き、瞳の赤い紋様が羽ばたいた。

…
…
…

「つたくよお、いつになったら着くんだよ！」

玉城の声が狭い車内に響き渡る。

カレンと扇、玉城といった幹部はゼロと共にキョウトからの迎えの車に乗っていた。

「少しは静かにしたら？ みつともない」

騒ぐ玉城をカレンがたしなめる。

二人のそういったやり取りはもはや恒例となった。

「あの、扇さん。トーヤはどうして来れないんですか？」

「ん？ ああ、キョウトからの要望であいつの出席は遠慮してほしいらしい。」

扇がカレンの問いに答えていると突然車を衝撃が襲った。

「なんだあ！？」

「車が・・・上がってる？」

さっきまで道路を走っていた車は停止し、なぜか上へと上っていく。しばらくすると急に車の上昇は止まり、運転手がドアを開けた。

「なにここ!？」

カレンの視線の先には信じられない光景があった。

「ここは・・富士鉱山!？なんで立ち入り禁止区域の中に!？」

大きく開けたガラス窓の先には見下ろす限りの白い裾野、ソーラーパネルに囲まれた租界、そして荒れ果てたゲッターが広がっていた。

「おいおい、嘘だろう？」

「侵入者は尋問なしに射殺されるっていうのに」

扇と玉城も驚きを隠せない。

動揺が顔と動きに現れていた。

ゼロだけが黙って静かに佇んでいた。

「間違いない!この色、この形!」

「待てよ!つーことはこの下にスクラダイトが埋まってんのか!？戦争の原因になったお宝がよお!」

『醜かろう?』

玉城たちが困惑していると背後からしわがれた、けれど重みのある声が聞こえた。

彼らの振り返った先には御簾の後ろで脇にボディガードを従えた男がいた。

「かつては山紫水明、水清き霊峰として名を馳せた富士山も今は、ブリタニアに陵辱された。我々日本人のようにな」

威厳のある声と話し方。

それだけで御簾の向こうにいる人物こそがキョウト六家の重鎮であると分かってしまう。

「顔を見せぬ非礼を詫びよう。しかしゼロ！それはお前も同じこと。その素顔・・・みせてもらおうか」

男の言葉につぶさにカレンが反応する。彼女はゼロの前に立ち、両手を広げた。

「待ってください！ゼロは私たちに勝利を与えてくれました！それを・・・」

「黙れい！私は見極めねばならぬ、ゼロが日本を背負う存在なのかを。」

男はカレンを一喝する。

カレンも退きはしなかったが、気圧されて言葉を失った。

「扇という者はおるか！？」

「あ、はい！」

男に突然指名され、扇は背筋を強ばらせた。

「お前がゼロの仮面をとるのだ」

扇はそう言われると一瞬躊躇った後、ゼロにゆっくり歩み寄った。

「ちょっと！扇さん！」

「すまないゼロ、俺もあんたを信じたんだ」

扇はゼロの仮面に手を伸ばす。

彼らはいったいどのような人間を想像しただろう。まさに切れ者といった賢い男か、それとも年のいった練達した男か。

しかし、仮面の下には誰の想像とはまったく違う答えが提示されていた。

「なっ・・・ゼロは女あ!？」

玉城が驚きに体を仰け反らせる。

扇も同様に驚いているようだ。

なぜなら仮面から出てきたのは緑色の長髪をゆらしたC・C。だったからだ。

「違う！この人はゼロじゃない！私は見た！ゼロとこの人が一緒にいる所を！」

カレンはすかさずゼロの正体は違うと否定する。

男もさすがに驚いたらしく、言葉が出るのが一歩遅れた。

「そこの女、真か？」

「ああ、私はゼロではない」

男の問いにC・C・はいともあっさりと答えた。

「むう……、お主、日本人ではないな？」

「答えはYESだ。キョウト六家の重鎮、桐原泰造。」

C・C・はまたもやあっさりとバラされたくないだろう相手の正体を言い放った。

素早く側に控えていたボディガードが動き出す。

「御前の正体を知られたからには生きて帰すわけにはいかない！」

「それが日本人であらざるなら尚更！」

彼らは殺気の混ざった声を発する。

すると左右の暗がりから無頼が二機ずつライフルを構えて姿を表した。

「皆、構わん！撃てえ！」

ライフルの銃口が扇たちに向けられた。

「死ぬ」誰もがそう思ったろう。

「止めろ、俺は関係ねえからー！」

玉城の最後になるであろう叫びが部屋に響く。

しかし、ライフルから銃弾は発射されなかった。

左右の無頼が一斉に同士討ちを始めたのだ。左右一機ずつが隣の無頼をスタントンファで叩き伏せ、桐原泰造に近づき銃口を向けた。

「ぬるいな。人種にこだわり、大局を見失った。だからあなた方は勝てないのだ！」

無頼のコックピットが開き、本物のゼロとトーヤが姿を現した。

「くっ！」

ボディガードの一人がゼロに銃口を向けるが、もう一人のボディガードが二人の手に握られているスイッチを見てそれを制した。

「やめろ！遠隔操作で射撃されるぞ！いいか、分かったなら誰も手を出すな！」

ゼロと俺は無頼から降り、桐原公に歩み寄る。

「桐原泰造、日本の枢木政権の影の立役者。ブリタニアの日本占領後は身を翻し、エリア支配業務を一手に取り仕切るキラハラ財閥の代表取締役。しかし、裏では日本全国のレジスタンスを援助するキョウト六家の重鎮。面従腹背か・・・安いな」

「貴様あ、御前のお気持ちを！」

「止めんかあ！」

ゼロの言葉にボディガードが激昂するが、桐原公がそれを抑えた。

「桐原公、あなたの察しているように、私は日本人ではない！」

ゼロの言葉に周囲が凍りつく。

救世主ゼロの正体は日本人ではない。その事実が衝撃的なものだ。

「マジかよ・・・そりゃあ、顔を見せられないはずだぜ」

玉城はゼロの素顔を明かさない理由に納得したようだ。

「ではお主、いったい何を望むのだ？」

桐原公の問いに対するゼロの答えは一つしかない。

「ブリタニアの崩壊を！」

「お主にそれができると？」

「できる！なぜなら私には、それを成さねばならない理由があるからだ！しかし、そのためにはあなたの協力が必要だ」

ゼロが仮面に手をかける。仮面を外すと桐原公の表情が驚きに変わった。

「お久しぶりです、桐原公」

「お主は・・・枢木の・・・」

余裕しゃくしゃくのゼロに対し桐原公は少しの間呆然としていたが、突然ニヤリと笑った。

「七年前に撒いた種が、花を咲かせるか・・・。扇よ！」

「は、はい！」

「この者はまごうことなきブリタニアの敵！素顔が明かせぬ訳も得

心もいった。隠れ家や情報の隠蔽は我らが協力しよう。ゼロについて行け！」

「は、はい！ありがとうございます！」

ゼロは納得したように頷く。

桐原公は彼にもう一つ質問を投げかけた。

「相手が儂でなければ、誘拐でもするつもりだったのかな？」

ルルーシュは珍しく殊勝な態度でそれに答えた。

「そんなことはしません。私にできるのはただお願いすることだけです」

そう言って俺たちはその場を後にしようとする。

「トーヤ、お前はこやつとともに進むか？修羅の道を」

「こいつが修羅となるのなら、俺は人でいよう。修羅が最も信頼し、頼れるただの人間に」

「ありがとう、トーヤ」

桐原公は俺への質問を終えたとルルーシュにも同じことを聞いた。

「行くか？修羅の道を」

「それが我が運命なら」

ルルーシュは仮面を被り、皆のもとに歩いていく。

ルルーシュが修羅となり、人を殺すのなら俺がその分彼の苦しみを人として俺が引き受ける。

それが俺の運命ならば・・・

...

.....

.....

隠れ家に戻り、俺はルルーシュと共に帰路についた。

「トーヤ、今日はよくやってくれた」

「ああ、さすがに疲れたよ。」

今日はゼロと共に格納庫に忍び込んだ。ゼロのおかげでギアスは使わずに済んだ。まだルルーシュには使えるとは言っていない・・・
正確には使いたくないのだが。

「ルルーシュ、まだ間に合うかもしれない。早くシャーリーの所に行ってやれ」

「ああ、じゃあ俺は行くよ」

ルルーシュは照れているのか顔を赤くしている。

「おまえ、初めて会ったときより人間らしくなったな」

ルルーシュの目は宙を漂っていたが、定まらない焦点をこちらに向けてきた。

「それをお前が言うか？ 最初は感情も見せないロボットみたいだったやつが」

「はははっ！ それもそうだな、じゃあ早く行ってこい！」

ルルーシュの背中をポンツと叩く。

「ああ、また後でな」

ルルーシュはそう言うのと走っていった。

（俺も戻ってカレンに会いに行こうかな）
そう思い来た道に戻ることにした。

運命は変えられる。

暮れかけた空は今にも泣き出しそうな厚く暗い雲に覆われていた・・・。

MEMOLY-13 魔神と少女(前書き)

PV30000、ユニーク4000をようやく超えました。

嬉しいです(^-^)/

MEMOLY-13 魔神と少女

どうしてだ…

自分の中で自問を繰り返す

目の前で耐えきれずに泣き出す女性が1人、地面に座り込む

後悔と自責―

感情はこんな言葉では言い尽くせないことを知る

言葉とはなんて無意味で無力なのだろうか

“守りたい”―

今やそう思ふべき対象はルルーシュやカレンだけではない

己の周囲にいてくれる人たち

だが、その人から大切なものを奪ってしまった

…

…

…

学園近郊の開けた場所…

俺たち生徒会メンバーはそこに来ている。

周囲は木々で囲まれ、吹いてくる風は空を覆う雲の多さに比例して冷たかった。

下に広がる地面は青々としている。その上には規則正しく配列されたみな一様に同じ形をした石が並ぶ。

ある一つの石の前に二人組の黒い服を着た女性が立っている。

一人はよく知っている顔。

もう一人は母親なのだろう。

皆無言でただ牧師の言葉に耳を傾けていた。

「彼は娘にとっては、よき父であり。また、妻にとってはよき夫であった。彼の魂はやがて神へ召され、安らかなる眠りにつくだろう…」

牧師は言葉を止め、左右に控えていたスコップを持った男たちに合図する。

彼らは土を棺桶の横たわる穴の中へ入れ始めたのだ。

「ああ…、止めてえ！もう埋めないで…、苦しませないでえ…！」

女性が悲痛な叫びと共に穴の前にひざまずいた。

隣にいたシャーリーが彼女をなだめようとソツと肩に触れている。

「お母さん…」

彼女は草を踏む音にさえかき消されそうな声で、そう呟いた。

今にも涙がこぼれ落ちそうになる。

まるで今日の空のように…

葬式が終わり、シャーリーの母親は参列者の男性になだめられつつもその場を後にした。

墓地にはうつむいたままこちらを向くシャーリーと何も言えずに立ち尽くす生徒会メンバーだけが残された。

「ごめん、シャーリー…」

かろうじて口から出た言葉は“ごめん”

それ以外に何も言うことができない。

言葉はあまりにも儚すぎる。

「何で…トーヤが謝るの？」

シャーリーの絞り出したような声に返事をする事ができない。
無理に気丈に振る舞う彼女は、あまりにも痛々しかった。

「俺も…ごめん！」

右隣にいたリヴァルは一步前に進み出て勢いよく頭を下げた。

「俺、ホテルジャックのことで黒の騎士団のことカッケーとか思っ
て、掲示板にもテキストなこと書き込んだりして…だからごめん！」

リヴァルは再び頭を下げた。

友人を思いやる気持ち…リヴァルの心に偽りはない。
それは彼の行動から痛いほど伝わってくる。

「何で？ どうしてリヴァルが謝るの？ 私は、別に…」

そこで会長がシャーリーの肩に手を当てて彼女の言葉を遮った。
恐らく彼女はリヴァルに“私は気にしてないから”と言おうとした
のだろう。

「止めなさい、シャーリー。そんなことよりも私はあなたの方が心
配。ちゃんと泣いた？ 今、変にガマンすると後で辛くなるよ？」

会長はシャーリーのことを心配している。まるで母親の様に…

「うん…。大丈夫。もう…十分泣いたから」

シャーリーは会長の問いに少しだけスッキリした顔で答えた。

「そっか…。じゃあ、私たちはもう行くから。待ってるからね、いつもの生徒会室で」

会長は少しだけ明るい声でそう言うのと学園に戻るように促して歩き出した。

俺もカレンと並んでその場にシャーリーとルルーシュを残して二人に背を向けた。

カレンが少し辛そうな表情をしていたので、みんなから少し離れて歩いているとカレンがか細い声を発した。

「トーヤ…私…」

カレンはうつむいたままだった。

シャーリーの父親はナリタ連山の戦いの時、連山の山麓で仕事をしていたらしい。そこをカレンの輻射波動が引き起こした土砂崩れに巻き込まれたのだ。

「カレン…、君のせいじゃない。」

「でも…」

カレンは立ち止まり、涙に潤んだ目でこちらを見上げてくる。

冷たいそよ風が彼女の肩までの紅い髪を揺らした。「大丈夫、君がその罪に苦しむのなら…俺も一緒に苦しもう。二人で分ければ…、少しは気持ち楽になれる」

彼女の手を優しく握る。

自分の手の中に収められた手は冷たく小刻みに揺れていた…

生徒会室に戻るとその場は自然とお開きになった。

罪悪感に苛まれていたカレンも「大丈夫」とだけ言って、すぐに部屋から出て行った。

一人になって部屋を見渡すいつものみんなが笑いあっていた生徒会室には見えない。

広く、そして暗い。

いつもの華やかな色合いは陰を潜め、空と同じ灰一色に染まっていた。

窓の外ではこちらの気持ちを見計らったかのようにパラパラと雨が降り始め、そして世界は色を失った。

しばらくするとルルーシュが生徒会室に来た。

彼も友達の父親を殺してしまった罪悪感を感じているらしく、暗く沈んでいた。

「トーヤ…」

「ルルーシュ、君も今日はもう休め。疲れがたまると大変だ」

「……。…お前は強いな…。こんな時にそんなにも冷静な顔をできる」

ルルーシュはそう言ってこちらに近づいてきて隣に座った。彼はさっき俺が冷静な顔をしていると言っていた。

もし、本当にそうなら俺は自分をぶん殴ってやりたかった。

「昨日…シャーリーとキスをした」

「えっ…?」

ルルーシュの突然の告白に思わず気の抜けた声を出してしまった。

「昨日、父親の遺体をナリタから引き取ってきたらしい…。約束の場所に行ったら…彼女は雨に打たれて泣いていたよ」

ルルーシュは必死でいつもの表情を作ろうとしているようだったが、彼の顔は生気があまり感じられなかった。

「ゼロは何でお父さんを殺したの?って聞かれたよ…。答えられるはずがなかった…。シャーリーのあんな姿を見たら…」

「ルルーシュ…、ゼロの仮面は…重いかな?」

「ああ…、重い…重すぎる…。今にも潰されてしまいそうだ…」

ルルーシュの中から何かが消え失せようとしていた。ブリタニアへの復讐心…、ゼロとしての自分…、そしてきっと望んでいるのだろう。ささやかな幸せを…

「それで？友人の父親を殺してしまったことを後悔しているのか？」

C・C・は沈むルルーシュに嘲るような声を浴びせた。

しかし心に傷を負ったルルーシュにその言葉は届かない。

「ナナリーのためのゼロなのだろう？何を迷う？」

またもやC・C・の嘲る声がルルーシュを射る。

もちろん彼はそれも受け止めようとはしない。

「子供だな。己の思い通りにいかなくなればすぐにぐずる…お前はバカだ」

「黙れ…」

相変わらずのC・C・の言葉にルルーシュは低い声でようやく答えた。

「お前は桐原に言ったな。ブリタニアを倒すと、自分は修羅の道を行くと」

確かに彼は言った。

自分は修羅の道を行くと。

そしてトーヤは苦しむ友を支える人となる…と。

「お前は桐原に甘いと言ったが、甘いのはお前の方だろうか？」

「黙れ……」

「お前は今まで多くの人間を殺してきた。そいつらには家族も恋人も、友人だっていた。それを知らなかったとでも言うつもりか？」

「黙れっ!!」

ルルーシュはベッドでチーズ君の抱き枕を抱えたC・C・に飛びかかる。

C・C・はベッドの上に押し倒された。

「黙れっ……お前に何が分かる!!?」

ルルーシュの声には怒気が混じり、その視線には殺気も含まれていた。

「お前にはっ、もう立ち止まったり、後悔したりする権利はない。……私を失望させるな」

「ぐ……」

ルルーシュはC・C・の言葉で自分がゼロであり、背負ってしまったあまりにも大きすぎる罪と命を思い知ったのだろうか。

彼は部屋を飛び出していった。

騎士団のアジトでは団員たちが慌ただしく動き回っていた。入り口付近に立っていると団員の一人に「幹部の方々が呼んでいる」と言われたのですぐにラウンジに向かった。

ラウンジに入ると幹部たちの中に混じる暗い顔をしたカレンといったものように尊大な態度で座っているゼロがいた。

「トーヤ、来てくれたか」

「ゼロ、今から何が始まるんだ？ 団員たちが慌ただしく動いているようだが？」

「ああ、そうだな。皆が揃った、扇、モニターを」

ゼロが指示すると扇さんはモニターのスイッチを入れる。すると地形図らしきものがそこに映し出された。

「今夜、日本解放戦線の残存勢力がタンカーで国外逃亡を図るらしい。だが、コーネリアはこれに気づき、奇襲をかけるという情報が入った」

「なにっ?! 解放戦線に藤堂中佐たちはまだ合流できていない。核たる武力もないままコーネリアと対決したら…」

「間違いなく解放戦線は壊滅する。そうだ、今夜は解放戦線の救援に向かう！ キョウトからもできれば合流してほしいと依頼が来た。今夜、我々は解放戦線を救援する！」

その後細かい作戦やそれぞれの配置を確認してそれぞれ準備に取りかかった。

俺も格納庫に行つて蒼月の整備をしようと思つていると、突然扇さんに肩を叩かれた。

「なんですか？」

「実はこの後、情報を提供してきたブリタニア人に会いに行く。一緒に来てくれないか？」

「それってディートハルトですか？」

ディートハルト・リートーナリタ連山の時も情報を提供してきたブリタニア人。

彼はTV局―特に軍内部の情報を扱う部署に所属し、何度も黒の騎士団に情報提供を行う熱心な入団希望者でもある。

「そうだ。そいつの最終審査に行く。」

「分かった。じゃあ、さっさと済まそうか」

ディートハルトとの待ち合わせ場所は人影もなく、ゲットーの中でもさらに荒廃した荒地だった。

「ディートハルト。今までの協力の功績によりゼロから正式に入団の許可が下りた。今夜の作戦から参加してもらう」

金色の長髪を束ねたディートハルトに“合格”の旨を伝えると彼は興奮した口調で話し始めた。

「そうですか。それはすばらしい！私はゼロのために全力で働かせてもらいますよ！」

「そうか。だが一つ覚えておけ。不審な動きをしたら俺の剣がお前を貫く」

ブリタニア人である彼に楔を刺そうとしたのだが、予想外に彼は気にもしなかった。

「分かっていますよ。所詮私は敵国の人間。その時が来ればどうぞ好きに」

「そうか。で、お前はコーネリア軍の情報を持っているのだな」

「ええ。ここにしっかりと」

彼は手に持ったフィルムを掲げ、これですとアピールした。

「よし、アジトに戻るぞ。扇さんはゼロに連絡を。すぐに動けるようにと」

「分かった」

租界内の港湾施設。そこではタンカーにサクラダイトを満載した日本解放戦線と日本解放戦線を壊滅させようとするコーネリア軍がいた。

我々黒の騎士団もコーネリア軍から離れた倉庫群に位置取り、戦闘準備を進めていた。

「今回は解放戦線の救援が目的だが、我らの狙いはコーネリアの首だ」

他の者たちより一段上に座るゼロが話す。俺は彼のすぐ隣に立っている。

「ちょっと待ってくれゼロ！キョウトからはできれば救援ではなく合流してほしいと依頼されている。それに軍に集中すれば敵の潜水用ナイトメアがタンカーを制圧してしまう」

扇さんの心配は妥当だ。

陸上の敵に力を注げば救援は疎かになり、この行動自体は無意味になってしまうからだ。

「扇。我々は何だ？」

「えっ？あ…。黒の騎士団だ」

「ならばまずは正義のために動け！コーネリアさえ叩けば後から合

流することは容易い！」

ゼロの言うことの方が正論だと思う。

コーネリアさえいなくなれば、海兵騎士団も力はなくなる。

「ゼロ、勝算は？」

「愚問だな…。」

ゼロの言葉に扇さんは笑みで返す。

そう。扇さんは信じると言ってくれた。

「ありがとう、扇さん」

「シェイド。約束は守る！安心してくれ」

俺は扇さんに頷いた。多分口角は上がっていた。

会話は終わりと判断したのでゼロに合図して出撃の準備をしようとする。

「あ、あの…」

カレンが遠慮がちに声を上げた。

振り向くと彼女は集団の一番前にいた。

「すまない。話はまた後だ」

カレンには悪いが今はルルーシュの様子が気になる。

俺たちは自分たちのために用意した部屋へ引き上げた。

「ゼロ……。大丈夫か……？」

「なにがだ？」

ルルーシュはいつも通りの声で返答してきた。
仮面で表情は分からない。

「シャーリーのことだ」

「……………。安心してくれ。もう……俺は迷わない……。どんな犠牲も受け入れる……。だが……」

ゼロはそこで言葉を切る。
立ち止まり、無言で俯いた。

「分かっている。シャーリー本人が心配なのだろう？　だが……、彼女の父親の死に……彼女自身に報いるために……嘘をつけ……」

ルルーシュはハツとして顔を上げた。

「今まで嘘をつくのは楽だったろう？　だがこれからは違う……。C・C・に言われて気づいただろう。お前は今まで奪った希望、未来、家族、幸せ、命……。お前はそれに報いるために前に進め……進まないなら俺が無理やり引っ張ってやる！　だって……犠牲のない平和に……意味はないと思うから」

ゼロは俺の顔を凝視したまま動かない。
彼は進めべきなのだ。奪った命、背負った願い、そして奪われたものに報いるために。

「トーヤ…」

「なんだ？」

「支えてくれるか？」

ルルーシュの口から出た他人を頼る言葉。今まで一人でなんでもしようとしてきた彼は今、大切なものに嘘をつき、そして大切な人から父親を奪った。

「その言葉を待ってた…」

俺とて悲しくないわけではない。辛くないわけではないのだ。

だが、立ち止まってはいけないことを知っている。

例えそれが修羅の道だろうと人間としての罪を背負うことは覚悟しているから。

「トーヤ。俺は進む。修羅としてもゼロとしても！俺は立ち止まらない！」

「そうだ！君の望む優しい世界を作るために…」

拳をルルーシュの前に突き出す。

彼も拳を出して軽くぶつけ合った。

「手伝ってほしいことがある。お前は嫌がるかもしれないが、私が修羅となり戦うために！」

「分かった。俺も今夜限りは修羅となろう。冷酷に戦わなければ今日は潰れてしまいそうだ…」

「トーヤ…」

辛い。それでも進む。
ただ守りたいから。

ゼロは卑怯だ！いつも人の尻馬に乗って自分は表にでない。
間違った方法で得た結果に意味はないのに！

今まではまだいい。
でも、今回はシャーリーの父親まで！

悔しさと怒りが胸の中にこみ上げてくる。止めることはできない。

どうしてゼロは…蒼の騎士は平気で人の命を奪うんだ！
なぜ分らないんだ！！

「殿下はまだ貴様を使うことに難色を示しているようだが、私は使える者は使う主義だ。それが日本首相の息子であってもな」

「……っ」

ダールトン將軍―コーネリア総督の最も信頼する部下。バレているのか。僕の素性は

「今回の目的は解放戦線リーダー片瀬の捕縛だ。それ以外の者たちは織滅せよ」

「織滅でありますか?!」

「そうだ。一人も生きて帰すな。……出世のチャンスだ気張れよ」

ダールトン將軍はそう言い残し、すぐに行ってしまった。

「踏み絵かなあ? フッフーン♪どうするの? スザクくん」

ロイドさんはいつもの調子だ。

でも、どうしようか。

僕は本当にこれでいいのだろうか。

ランスロットのキーを握りしめる。

そうだ。ゼロを放っておくわけにはいかない!

これでいいんだ…

「解放戦線を餌にするか」

蒼月の佇む格納庫内に戻って、濡れて疲れた体を休めていた。

「ああ、そうだ。俺は迷わない」

ルルーシュは体力がないせいかな今も息切れしている。
少しの間、しっかりと休もう。

格納庫の扉が開けられる音がする。

そちらを見るとカレンが立っていた。

まだウェットスーツを着たままでしかも上半身だけ脱いでいる俺たちを見てカレンは顔を赤くした。

「す、すみません！失礼します！」

彼女はそそくさと出て行こうとするがそれをゼロが止めた。

「待て。迷っているのだろう？」

彼女は足を止め、こちらに振り向いた。

不謹慎だろうが、彼女の辛そうな顔はかなり色っぽかった。

「私は……今まで戦ってきました。それでも！日本のためだと思
って人も殺しました！でも……」

「犠牲が出るか？」

ゼロの核心をつく言葉。それがカレンの心にのしかかる。

「カレン。我々は進めべきだ。死んでいった者たちだって願いがあった。幸せを望んだ……。立ち止まることは許されない。ならば流した血の分だけ更なる血を流して見せよう！だが……カレン。今ならまだ引き返せる……。君が決めろ」

ゼロの言葉……それは彼女の心に悲しげでキレイな音を鳴らせたはず。カレンが決める。

心の中でゼロの言葉を復唱する。

「共に進みます。私は……あなたたちと共に……」

顔を上げたカレンは驚く程スッキリした表情をしていて俺たちは何も言えなかった。ただ、彼女の心の強さ……それを単純に凄いと思えた。

“罪を背負う覚悟”

聞こえはいいが生半可な苦しみではない。カレンはそこに俺たちと

共に身を投じようとしている。

無意識のうちに立ち上がり、気づけば彼女を抱きしめていた。

「ありがとう」

彼女が俺の腕の中で波の音よりも小さな声で言った一言がしっかりと耳に届いた。

「ここは…?」

頭がまだぼんやりする。

殴られた後のような痛みでジンジンする。足元がフラついてしかない。

「私は……様の…下へ…っ」

苦しそうに歩く謎の少女は嵐の前の静けさに包まれたトーキョー租界港湾部に一人。

今回の俺の任務はコーネリア軍の後方から強襲。包囲網に穴を開け、コーネリアの捕縛に向かうことだ。俺はゼロたち本体とは逆方面から単騎で突入する。理由は簡単だ。撤退するルートを作らない

と何かあった時退けないからだ。

格納庫で蒼月に乗り込もうとすると同じく紅蓮に乗り込もうとするカレンと目が合った。

「無理するなよ」

カレンに声をかけると彼女は笑顔になった。

「大丈夫よ。これでも騎士団の双壁、つまり騎士団のエースの一人なんですからね」 明るいついでに彼女がハツラツとして見てて気持ちよかった。

「それでもさ、すぐに行くから待ってろよ」

カレンに背を向けて蒼月に乗り込んだ。

「おい、ゼロ！このままでは解放戦線が！」

通信を通して扇さんの声が聞こえてきた。俺はゼロの作戦については知らないということにすると言われても、やはり割り切ることができなかった。

「総員出撃！解放戦線を救援する！」

作戦開始の合図と共に隠れていた倉庫から飛び出す。と同時に海の方から轟音と衝撃が襲ってきた。

普通の爆発では起こり得ない巨大な火柱。解放戦線のタンカーが爆発したからだ。全てはゼロの作戦通りに。

「全軍怯むな！コーネリア本陣に突っ込むぞ！シェイドもそのまま敵本陣に突っ込め！」

「了解！」

ゼロの激が全員に飛ぶ。

「解放戦線の血に報いたければ今夜、この場所で、日本と平和を取

り戻せ！」

そう、迷うことは俺には許されない。ゼロやカレンにだって。人間とは自分勝手だ。だからもう、戦うことに迷いはない。

俺は迷うことなく包囲網を作っていたサザーランド一機と数両の戦闘車両で構成された部隊に借りてきたライフルをフルオートで打ち込む。

爆発に気を取られていたのか手応えもなく全機撃破する事に成功する。

このまま突っ込む！スピードを落とさずに敵本陣を目指すと目の前に親衛隊の騎乗するグロースターが二機、騒動に気づき迫ってきた。

背中の長斬刀を抜く。

「俺の邪魔をするなあ！！」

まずは左側の機体に剣を突き刺す。狭い道のため左右に回避することができないグロースターは胸を貫かれ沈黙した。もう一機のグロースターは距離をとるが、蒼月の機動力にかなうはずもない。一撃で胴体部を真っ二つに両断する。

敵本陣に到着するとすでに戦闘は始まっていた。紅蓮はコーネリアのグロースター。ゼロは白兜ーランスロットと対峙していた。

俺は迷わず白兜に襲いかかる。ゼロの無頼は損傷しておりまともに戦える状態では無かったからだ。

「ゼロに近づくな！」

斬りつけるがランスロットもMVSで受け止める。

「今日ここで平和を取り戻す！邪魔をするなあ！」

左手のブレイズフィンガーを展開し掴もうとする。しかし騎士団を何度も苦戦させた機体。さすがに決まりはしなかった。俺が乱入するとコーネリアもグロースターを後退させ、こちらの出方を伺うようだ。

「殿下、ご無事ですか？！」

敵が後退すると二機のグロースターが登場した。

「また会ったなあ。蒼の騎士君」

オープンチャンネルから声が聞こえてくる。この声は：

「ナイトオブナイン：ノネット・エニアグラムかっ？！」

帝国最強の十二騎士。彼女の乗るグロースターはすぐに分かった。他の機体とは明らかに異なる無駄な装甲を無くしたシャープなシルエット。手にはランスではなくMVSを装備していた。

「私のグロースターはひと味違うのだな。今度は負けはせん！」

そう言い放つと示し合わせたのか三機のグロースターが同時に襲いかかってきた。

「ねえ！あなた、大丈夫？！」

戦場に似つかわしくない少女の声。

その持ち主はシャーリー・フェネット。黒の騎士団に実の父親を奪われた少女。

彼女の目の前には自分と同じくらいの年頃の白いベルトのついた服を着た茶髪の美少女が苦しそうに立っていた。

「ほっといてくれないかな？」

茶髪の少女は苛立った声で言葉を返すとシャーリーを避けるように歩き出した。

「待って！あなたすごい汗：それに熱だって！」

シャーリーは少女の腕を掴む。明らかに常人の体温ではない。少女は額だけではなく首筋や恐らく服の中まで汗をかいている。

「ほっといてよ！」

少女はそう言うどダッシュでシャーリーを振り切る。シャーリーは一人黒の騎士団とブリタニア軍がぶつかり合う戦場に取り残され

た。

「なかなか手強いな」

目の前にはグロースター三機。真ん中のこちらにMVSの切っ先を向ける機体はナイトオブナイン、ノネット・エニアグラムの騎乗するものだ。

ランスロットは紅蓮が抑えているため、ゼロには手出しができていない。

「損傷は軽微。敵はノネット以外はほぼ中破。ならば！」

まずは長斬刀を構え、先頭でMVSを構えるグロースターに切りかかる。

数回刃を合わせるとコーネリアとギルフォードの騎乗するグロースターが後ろに回り込む。

そのタイミングを見計らいランドスピナーを逆に回転させ、後退し、急制動でコーネリアのグロースターの前に出る。

「しまった！」

コーネリアがそう言ったときにはすでに長斬刀がグロースターの左肩を切り落としていた。

「貴様あ！よくもコーネリア様を！」

激昂したギルフォードがランスを構え突進してくる。だがその行動は愚かだ。

コーネリアのグロースターは健在でかろうじて動いていた。

それに怒りに任せた直線的な攻撃はあしらいやすかった。

左腕のルミナスフィンガーを展開しランスを掴み、輻射波動を撃ち込む。

そのまま長斬刀で両腕を切り落とす。

しかし、トドメを刺そうとした時にノネットが邪魔された。

「しかし」

そう。グロースター二機はもう戦えない。残るはノネット・エニアグラムだけ……だが、カレンの声がそれを不可能にさせた。

「ゼロ！……っ、ああっ！」

後ろを向くとランスロットによりゼロの無頼は無残に破壊されて紅蓮も胸のあたりの装甲を損傷していた。

「くっ…、マズいな。全軍、退けっ！いずれまた機会はある！」

「でも、コーネリアが目の中にいるのに！」

カレンは紅蓮を進めようとする。

前に立ちふさがりなんとか取り押さえる。

「離して！私が、コーネリアをつ！」

「カレン！ダメだ！君を死なせたくないんだ…。頼む……」

「トーヤ…。……ごめんなさい。今はあなたの指示に従うわ…」

カレンは紅蓮に搭載されていたチャフスモークを発射し、引き上げてくれた。

彼女の目の前に黒い塊がある。

無頼のコックピット。その中には黒い仮面をかぶった男。

ゼロがいた。

「えっ？この人って…」

シャーリーは目の前の現実から一歩後ずさる。

コッソンと彼女の足に何かが当たった。

銃だ…。

恐らくゼロのもの。

恐る恐る手に取ってみると、それは冷たく重かった。

彼女は自分の心に闇が住み着いていることに気づいていた。

しかし抵抗はしない。だって闇に従った方が楽だからだ。

「ゼロ：お父さんの：かたき：っ！」

シャーリーは手にした銃をゼロに向ける。

「うっ…」

その時、ゼロが一瞬動いた。動いた拍子でゼロの仮面が外れ素顔が露わになる。

「……っは…！」

シャーリーはゼロの素顔を目にすると動きを止めた。

そう。

目の前にいるゼロの正体…。

それはシャーリーにとって最愛の人ルルーシュ・ランペルージ

MEMOLY-13 魔神と少女（後書き）

オリキャラのフラグ立ちました。

お楽しみに（＾－＾）／

MEMOLY-14 優しい嘘（前書き）

原作とは違っていきます。

MEMOLY-14 優しい嘘

暗い夜空に響く金属のぶつかり合う音が小さくなっていく頃。

扇に無線で連絡が入った。

「ゼロか?!」

「いや、C・C・だ。ゼロからの伝言だ。全軍を撤収させろ。このままでは我々の損害が大きくなる」

「?ゼロはどうしたんだ?」

「訳あって今は動けない。頼んだぞ、扇」

C・C・は一方的に通信を切った。彼女の後ろには呆然と立っているゼロがいた。

「珍しいな。指揮もとれない程動揺するなんて。それほどコーネリアを逃がしたことが」

「違う。俺の銃がなくなっているんだ!」

「銃が?」

ゼロは慌てたように話す。彼の話にC・C・も事の深刻さを理解し始めた。

「ああ、俺が気絶している間にだ」

C・C・がゼロを発見したときには彼の仮面は外れ、素顔がさらされていった。

「……ということとは」

「…素顔を見られた」

ゼロは現場に残された血痕を指差す。

それからある一つの可能性が導き出される。

「撃った奴と撃たれた奴。少なくとも2人…。それに…」

そこまで言ってゼロは口をつぐんでしまう。C・C・は怪訝そうな表情で言葉の続きを待つ。「コーネリアを撃とうとしたとき、シャ

ーリーを見た気がする…」

「まさか：あいつがこの戦場に？それは確かなのか？」

ルルーシュが見た影。あまりにも身近でありながらも記憶に焼き付けられている。

しかし、それはありえない、あり得るはずがないと脳が否定する。

「分からない…」

C・C・は怪訝な表情を崩そうとはしない。

とにかく今はアジトにひきあげるしかない。

「見られた…か…」

アジトの中のゼロ専用の指令室。そこには軽傷を負ったルルーシュ、C・C・、そして俺の三人。

呼ばれて来てみれば『素顔を見られた』と言われ、犯人は俺たちがよく知る人間の可能性が高いと聞かされた。

「お前が見たのは：本当にシャーリーだったのか？」

ルルーシュに問うてみるが『分からない』と煙に巻かれただけだった。

「とにかく犯人は見つけけないとな。撃たれた人間は重傷を負ったはずだ。そちらは後回し。まずは：心苦しいが、シャーリーを当たってみよう…」

ルルーシュは俺の言葉に無言で頷いた。友達を疑うなんて今までの俺では考えられない。そう思うとなんだか自分の心が冷えきっているような感覚に襲われる。

そんな自分を見られることに嫌気が差してきて、「じゃあ」とだけ言って部屋から退出した。

翌日、朝のHRの前の教室は騒然としていた。とりあえずルルーシユとシャーリー以外の生徒会メンバーが集まっていたので、彼らに理由を聞いてみる。

「みんなおはよう。なんでこんなに騒いでるんだ？」

あいさつついでに質問すると振り向いたリヴァルが答えてくれた。

「おっ、トーヤじゃん。今みんなと転入生の話をしてたんだよ」

「転入生？」

今の時期に転入？そんなことを考えながらもリヴァルの話に耳を傾ける。

「そ。この時期に転入生なんて珍しいからって言って、気になる奴らが写真を撮ってきたんだよ」

「……」

そこまで気になるか？

「で、その写真がこれだあ！」

リヴァルが勢いよくケータイの画面をこちらに向ける。

そこには肩を少し越すくらいの茶髪の少女が写っていた。アッシユフォード学園の制服を着ていて、胸元を少しだけ着崩したスタイルが季節とマッチしてよく似合っていた。

「これ、どう思うよ？！」

「なかなか……いや、かなりキレイだとおもうけど？」

思ったことを口に出す。するとカレンの視線が少しキツくなった。色白で女性にしては長身。モデルと言っても通じるだろう。

「だろー？！これはヤバいってみんなで言ってたんだ」「ふうん……」

カレンの視線が痛いのでとりあえず曖昧な返事を返す。

しかし、髪でちゃんと顔の見えない少女になぜか既視感を覚えた。

（記憶に関係あるのか？）

リヴァル情報だとこのクラスに転入してくるらしい。

その時に顔を拝見させてもらおう。

「ほら、席につけー」

担任がドアを開けて入ってくるとみんなが一斉に席につく。

「えー、今日はみんなに転校生を紹介する。入ってくれ」

担任が教室の外に手招きをすると写真で見たとおり、制服の胸の部分…、まあネクタイを緩めた服装の可愛い少女が入ってきた。クラス中が再び騒然となる。

「うおっ！なんだよあれ！マジでかわいー！」

リヴァルが小声で叫ぶ。クラス中の男子が同じようにおおー！とかヤバツとかそれぞれ声を発する。

教師の隣に着いた彼女がこちらを向く。「ぐっ…！（なんだ…この痛みっ）」

少女の顔を見たたん、頭に激痛が走った。ナオトさんに助けられて研究施設から抜け出した当初、頻繁に起こった頭痛に似ていた。

「ちょっと…！大丈夫？！」

隣に座るカレンが小声で話しかけてくる。その声には心配の色が見えた。

「……………大丈夫…みたいだ」

カレンに話しかけられて落ち着いたのか、頭痛は少しずつだが治まってきた。

「私の名前は、エレナ・メイリンです。これといった特技や趣味はないんですが、皆さんよろしくお願いします！」

頭痛に気を取られている内に彼女は自己紹介を終えた。

「エレナさんは家庭の事情によりクラブハウスで生活することにな

った。生徒会に入ることにも決まっている。これも何かの縁と言うことで、同じような境遇のトーヤとルルーシュは彼女を案内してやってくれ」

（クラブハウス？それはマズイ！カレンが…）

恐る恐る隣に目を向ける。しかしカレンの手の中でシャーペンがミシミシ音をたてていたので視線をすぐにもとに戻す。「分かったのか？二人とも」担任の教師が返事を促してきたので「はい」とだけ答えた。

しかし返事は一つだけ。

「ん？ルルーシュは…またサボりか。まあ、今回は見逃してやるか」担任の教師はルルーシュがシャーリーのことと落ち込んでいると察したのかそれ以降口にすることはなかった。

「そうだな…。席はトーヤの隣の窓際の席にするか。同じ転入生のようにみだ」

「は…？」

それはさらにマズイだろ！すぐ隣から何かがバキッと折れたような音が聞こえてきたが、きかなかったことにした。「よし、エレナ。あそこの銀髪のやつの隣の席だ。」

結局そのまま決まってしまった。エレナはハキハキとした仕草でこちらに近づいてきた。

だが、なぜか席に座る直前で彼女は立ち止まる。

不思議に思い見上げると彼女の髪が揺れたのが分かった。「やっ」と会えましたね……………イ様……………」

「は？（今、なんて？）」

彼女は何か喋ったようだが声が小さいのと動揺していたせいで上手く聞き取れなかった。

「私は……………あなたに会うために来たんです！！」

「はあ…、って…はあっ?!」

「!!?」

エレナはいきなり教室中に響くほど大きな声でそう言い放った。

隣のカレンもビックリしているじゃないか!!

「あなた……まさか!」

「えっ?! いや、ちよっ…」

カレンが睨んでくる。いや、クラス中の男子が睨んでくる。

みんなの視線が痛い…。

その場はそのまま流れた? が、カレンが怒って喋ってくれなくなつた…。

「で? 君はなんであんなことを言ったんだ?」

青い空が見える屋上。教室では話づらいので彼女を無理矢理つれてきた。

「けっこう強引なんだね」

彼女は俺の質問を無視して意味の分からないことを言い始める。

「答えろ。なんであんなことを言ったんだ?」

自由奔放な振る舞いをする彼女を前について語気が強まってしまう。でも、エレナはそんなことを気にせずに答える。

「分からない」

「は?」

「分からないって言ったの。」「……（こいつ…何がしたいんだ?）」

言葉から俺の過去、つまり失った記憶に関するのには確実だ。

敵か味方か…。

「私…記憶がないの」

「記憶がない? 記憶喪失なのか?」

「そう。記憶喪失よ。あなたと一緒に」

この子も記憶喪失。つまり過去に関係のあった確率はかなり低い。しかし、なぜ彼女が俺が記憶喪失であることを知っているんだ? 自分の記憶については疑問が増えるばかりだ。

ふと彼女を見ると吹いてくる風に髪をなびかせながら気持ちよさ

そんな表情をしていた。

その時、屋上の扉を開けて会長が現れた。「あゝ、やっぱりここにいた」

「会長？何か用ですか？」 手すりに寄りかかる俺たちに会長は小走りで走りよってきた。

「こんにちはミレイさん」

隣のエレナがいつの間にか振り返り会長に挨拶していた。

「二人とも知り合いなんですか？」

「ええ。この子ね、あなたみたいに学校の敷地内で倒れてたの。話を聞いたら記憶喪失だって言うし、放っとけなくて」

会長はそう言うと言苦笑する。彼女はそういう人なのだ。困っている人を放っとけない、優しくして面倒見がいい。

この人がいるから自分がここにいれるということと思うとやはり感謝しなければいけないかと思う。

「だからクラブハウスに住まわせるんですか」

「ええ。でもやっぱり女子寮の方がいいかな？」

会長は後ろのエレナに目を向ける。彼女は少し考えるような仕草をした。

「やっぱり女子寮がいいですね。トーヤ君が怖いんですよ、ミレイさん」

エレナは冗談とかの雰囲気はいつさい出さずに真顔でそう言い放った。

「ん？トーヤ、何かしたの？」

会長が疑うような目でこちらを見てくる。「違います」と棒読みで返事をする。冷たい態度だと思われるかもしれないが、最近の自分の異常とは関係はない。

とゆーか彼女はなんなんだ！？

女子寮の部屋の前の廊下に紫色の髪の少女が立っている。通りかかった友達が彼女に質問した。

「何してるの？ファイナ」

「待ってるのよ、部屋の除菌が終わるのを」

そう言ったフィーナと呼ばれた少女の瞳は赤く染まっていた。

「なぜ私がこんなことを…、貸しは高くつくぞ」

部屋の中ではルルーシュとC. C. がシャーリーが奪ったと思われる銃がないか探していた。

C. C. は他人の下着をあさることに抵抗があるようだ。

「分かっている！」

ルルーシュは返事をしながらもせかせかと動いている。

「まったく。お前はプライドだけがなくて困る。好きな男にやられるなら、あの女だって」

「……？」

ルルーシュはC・C・がうるさいので黙らせようと振り返る。しかしその拍子に机の上にあった箱をひっくり返してしまった。

床に落ちた箱の中から十枚近い写真が出てきた。その写真全てにルルーシュが写っている。

「あ……」

一瞬戸惑いながらもルルーシュは写真の手に取りもの寂しそうな目で見始めた。

C. C. はシャーリーの愛用している日記を開いていた。

「ん？ 11日までしか書いていない」

その言葉にルルーシュはすかさず反応した。

「その日は……！……シャーリーの父親が亡くなった日だ……」

ルルーシュの表情に暗い影がかかる。トーヤには迷わないと言った。しかし、やはりシャーリーの父親を殺したことは簡単に割り切っていないことではないのだ。

時刻表を手に取り付箋の貼られているページを開くとペンで線が引かれていた。

「ん？これは…」 ナリタ行きの列車の欄に引かれたオレンジ色の線。

「C・C。行き先はナリタだ」

「ねえ、エレナさん」

廊下を歩いていると紅い髪の女の子に話しかけられた。

トーヤから聞いた話だとカレン・シュタットフェルトだっけ？

「エレナでいいわ。何か用？」

彼女は顔を少ししかめながら話し始めた。

「あの：何でトーヤにあんなこと言ったの？」

（なんだそんなことか）

まあでも学校の人から聞く限りだとトーヤとカレンはつき合ってるって噂もあるし、やっぱり気になるんだね。

「分からないの。私も彼と同じ：記憶喪失だから」

「えっ？」

カレンはあからさまに驚いた表情を浮かべた。

「ただ：最初に何か気になったのは確かよ。ごめんなさい、二人の仲を邪魔するつもりはないから。」

私は彼女にできるだけの笑顔を見せて「サヨナラ」と言った。こちらを見ていた男子生徒が一瞬倒れそうになったが大丈夫そうなの

で気にせずに立ち去る。

「あ：ちよっと！」

「そうだ。生徒会よろしくね！」

（まったく：なんなんだあの子）

生徒会室で文化祭のクラスごとの出し物の集計をしている。

ルルーシュはどうやら学校にはいないようだがどこに行ったのだろうか？

そんなことを考えつつも仕事を続ける。今日は午前授業で午後からはみんなで文化祭準備を進めるはずだったが、まだ誰も来ない。

「まったく：」

ぼやいていると誰かがドアを開けて入ってきた。

「あれ？まだトーヤ一人？」

スザクだ。彼に手を上げてあいさつをする。

「やあ、まだみんな来てないよ。軍の仕事はもういいんだ？」

「ああ、うん：」

スザクは浮かない顔をしている。何かあったのだろうか。

「トーヤ、君は黒の騎士団をどう思う？」

「！：？」

いきなりそんなことを聞かれるとバレていないはずなのにやはり反応してしまう。

「黒の騎士団：か。日本人からしたら義賊、ブリタニアからしたら驚異的なテロリストって所だろう。シャーリーの父親は残念だったけど：、彼らは立場の違いで悪にも善にもなる」

「確かにそうだけど：トーヤにとってはどうなんだ？」

「……………」

随分答えづらい質問だ。

「憎むべき相手だ。だが、憎むだけではどうにもならない。俺は今のブリタニアを変える可能性には期待していると思う。スザク…、君にだって変えられる可能性があるんだ。君はユフィと仲がいいんだろ？」

「えっ？ ああ、うん…」

「昨日ユフィからメールが来たよ。今のブリタニアはダメだって、変えていきたいって」

ユフィは堅い性格のスザクには話せないことを時々メールや電話で相談してくれる。ユフィはブリタニアの中でも高い位置にいる。

黒の騎士団はブリタニアの外から、スザクとユフィはブリタニアの中から世界を変えようとしているのだ。

「そんなユフィと仲のいい君はブリタニアを変える、日本人としての希望だと思う」

「……………」

スザクは黙り込んでしまった。

考えることがあるのだろう。しばらく口を開かなかった。「やっぱり：君にはかなわないな」

スザクは苦笑しながら笑っている。

「でも、僕は黒の騎士団のやり方は間違っていると思う。間違った方法で手に入れた結果に意味はないと思うから…」

「そうか。でも正しい方法でも間違った方法でもいい。平和には犠牲があるからこそ尊いんだと俺は思うよ」

スザクは再び苦笑している。

「君は偉いよ」

スザクの言葉にこちらにも笑みで答えた。

あの後結局みんなが来なかったので中庭に来た。寝転んで空を見上げてみる。

穏やかな風が心地良く、柔らかな黄色い日差しが体を包んでくれた。トーヤは正直今のままでもいいのではないかと思い始めていた。

記憶の戻る気配はない、しかしこの学園で過ごす日々はとても安らかでとても心地よかった。

（ルルーシュは進むと決めた。カレンもきっと迷いはないだろう。でも、俺は…）

自分の心に問うてみる。表には出さないが迷い、苦しみ、今にも騎士団としての自分に押しつぶされてしまいそうになる。

「黒の騎士団……か」

「誰っ?!」

呟きように放った独り言に反応した人物がいた。

大きなカバンを肩からかけたシャーリーが出かけようとしていた。

「シャーリー?…大丈夫か?…なんだか顔色が…」

「来ないで!」

シャーリーに近づこうとすると彼女の白い手に握られたものが向けられた。

黒く重厚な雰囲気を持つ金属の物体―銃だ…。

「シャーリー!?!何を!?!」

「あなたも黒の騎士団なの?! 私…お父さんをつ…!」

銃を持つ彼女の手は震えていた。彼女にゆっくりと近づこうとする。

「動かないで!」

「くっ!」

シャーリーはどうやら極度の興奮状態のようだ。

最愛の人が父親を殺したとしたら仕方のないことかもしれない。「ねえ、なんで? どうして私のお父さんを殺したの…?」

シャーリーの瞳から涙が零れる。

彼女にゆっくり近づく抵抗することなくその場にへたり込んでしまった。

「ごめん…なさい…。あなたが黒の騎士団の訳ないのに…」

「シャーリー…」

違うんだ…。俺も黒の騎士団なんだ…。「私…もうダメかもしれない…。人を撃っちゃった…」

違う…。君は悪くない…。悪いのは…

頭が回らなくなる、言いたいことも言葉にならない。自分たちの行動の結果はこうして自分たちに返ってくる。

知っているはずなのに、体から覚悟と決意が抜けていく。

「私…お父さんのお見舞いに行ってくるから…。それじゃ…」

シャーリーは銃をしまって歩いてしまった。

彼女は励まして欲しかったに違いない。間違いを犯した自分を許して欲しかったのだ。

だが…。

気づけば俺はさっきまで立っていたはずの場所に座り込んで泣いていた。

自分のことが分からない。どうすればいいか分からない。覚悟も決意もきえてしまった…。自分のせいで守りたかったものが崩れていく。

何が正義の味方だ…。

何が覚悟を決めろだ…。

傷ついた大切な人をみただけで心は折れてしまう。

「ちょっと…トーヤ！どうしたの！？」

カレンが近づいてくる。

俺は彼女も傷つけている。勝手なことを言って、心をねじ曲げて…。

「俺は…っ…、僕はっ…！」

どうすることもできずに泣いた。スザクが以前ルルーシュにゼロ

は独善だと言っていたのを思い出した。

「独善的なのは…俺だ…」

生徒会室に行ってみるとミレイさんとリヴァル、ニーナがいた。

「あら？ エレナ、来てくれたのね」

ミレイさんが近寄ってくる。とても嬉しそうだ。

「聞いていたより人が少ないですね。どうしたんですか？」

質問すると彼女の顔が少し曇った。

「んー、後で話してあげるわ。それよりこの書類、提出してきてちょうだい。人手が足りないの」

彼女は申し訳なさそうな顔をして頼み込んできた。

「分かりました」

養ってもらっているからには断れない。書類の山を抱えて職員室に向かう。

途中で茶髪の男の子に話しかけられた。「重そうだね、手伝うよ」

そう言って書類半分持って行かれた。

「あれ？ 君はもしかして、エレナさん？」

「ええ、そうだけど。あなたは？」

「僕はスザク。生徒会のメンバーだよ。君のことは会長から聞いたんだ」

会長…。ああ、ミレイさんか。

「そう。ごめんね、手伝ってもらって」

「いいって」

そう言う私たちは並んで廊下を歩き出した。

ナリタに向かう列車の中。コスプレイヤーのような格好のC.C.が口を開いた。

「お前はシャーリーに会ってどうするのだ？ 殺す気か？」

この女はいつも答えづらいことばかり聞く。

「…いや…」

「では、どうするつもりだ？ ギラスでも使うのか？」

ギラス…この力が存在したことを初めて疎ましく思った。

「ねえ、僕の所属する職場に来てみない？」

書類を提出して生徒会室に戻る途中。スザクは唐突にそう言った。

「なんで？ もしかして…軟派？」

「えっ?! ち、違うよ! ただ単に調べてもらえばに君のことについて何か分かるんじゃないかって思っただけだよ!」

スザクは面白い。からかうたびにオーバーリアクションで返してくれる。

「分かってるよ。そのことは考えておくから」

スザクの反応がおかしくて苦笑してしまう。笑っているとスザクまで笑い始めた。

「君、ようやく笑った」

「え? ああ…、うん」

スザクの言葉でようやく笑っていると自覚した。

「君はトーヤと似てるね。記憶喪失とかそーゆうことじゃなくて、最初の頃のトーヤに」

「?どーいうこと?」

スザクの言っている意味が分からないので聞いてみる。彼はまた苦笑しながら話してくれた。

「トーヤは最初の頃、笑ってたのに笑ってなかった。言葉の中にどこか冷たさがあったんだ。今は大分マシになってきたけどね」

「私はそんなこと思わなかったけどな」

彼とトーヤが会ったのは聞く限りだと約二ヶ月前。やはり長いしないと分からないこともあるのかな。

「あまり長く一緒にいる必要はないんだ。君のことさっきトーヤに似ているって言っただろ?君は心から笑うとき以外はどこか冷たいんだ」

確かに。そう思ってしまう。このスザクという男はなかなか人をよく見ている。

「なかなか鋭いね」

「いつもは鈍いって言われるんだけどね」

スザクがまた苦笑いするのがおかしくて笑ってしまう。

「いいわよ。明日あなたの職場に連れてって」

「本当に?!分かった!」

スザクは嬉しそうに歩いていく。内心子供みたいと思っていたのは秘密だ。

「無駄だよ、君の考えなんてぜーんぶお見通しさ」

ナリタ連山に伸びるモノレールの中でチェスで対局していた。

相手は白い挑発にサングラスをかけたマオという中国人。

しかし、そんなことはどうでもいい。俺が：負けているだど！？

「君、いったい誰に説明してるの？」

「っ……！」

また思考を読まれた。こいつ、まさか！「正解、正解、大正解だよ。僕の可能性について21のパターンが浮かんだねー。しかもその一つは大正解。そう、僕もギアス能力者だ」

マオがサングラスを外すと血走ったように赤い瞳が見えた。

ギアス……！？ 相手の心を読むギアスか？！

結局その力の前に対局に敗北してしまう。だが、それだけでは終わらなかった。

「負けたなら罰ゲームを受けてもらうよ」 モノレールの窓の外に夕日に溶けてしまいうような髪を揺らしてシャーリーが姿を表す。

「シャーリー！」

彼女は俺に銃を向けた。

「トーヤ、ねえトーヤ！」

さっきトーヤに会ってから様子がおかしい。俯いて泣き続ける彼はいつものトーヤには見えなかった。

「カレン……。ごめん……」

そう言うとは彼はまた俯いてしまった。何があったかは分からないけど、彼は今まで背負ってきたものに押しつぶされようとしている。そんな気がした。「トーヤ。辛いときは辛いつて言っているよ。一つ一つは耐えられることでも、積み重なればいつかは崩れてしまうのだから」

俺はその言葉にハッと顔をあげる。前に同じことを彼女に言った。『辛いときは辛いつて言っていていいんだ。一つ一つは耐えられることでも、積み重なればいつかは崩れてしまうのだから』
そんななんでもなくかけた言葉をカレンが覚えていたことに驚いた。

でも：

「カレン：すまない：1人にしてくれないか：？」

彼女は寂しそうな目で頷くだけだった。「カレン：っ：僕はっ：もう間違ってはいけないのに：っ！」

「ねえ、死んで？私も一緒にしんであげるから」

涙ぐんだシャーリーの声、彼女は今俺に銃口を向けて立っている。

「シャーリー！この男に何をされたんだ？！」

「動かないで！」

シャーリーは銃を握る手に力を込める。「ルルがゼロなんでしょ？私もね：あなたと一緒に人を殺しちゃったの：。だから：」

「待つんだシャーリー！お前の撃った奴は本当に死んだのか？こいつに騙されているだけじゃないのか？！」

「うるさい！ねえ：、死のう？一緒に罪を償おう？」

くっ：！どうすれば：

「人を撃つことが罪だと言うのならこれ以上罪を重ねるな！」

「うまい！なるほどね」

マオが拍手しながらいちいち相槌を入れてくる。

「くっ：！シャーリー！」

「一か八かシャーリーに近づこうとする。「来ないで！」

シャーリーの手に今までにないくらい力が込められた。パンツという乾いた音が聞こえた。

「ぐっ…」

球はかすただけだが驚いて後ろに倒れてしまった。

「あっ…」

倒れた衝撃で懷に入れていた写真を落としてしまった。

「いや…、…したくないよ…。ルル…っ」

「なんだこの女？頭の中がグチャグチャだ。こうなったら僕が」
マオがこちらに銃口を向ける。

「やめてえ！」

シャーリーは再び引き金を引いた。それはマオの近くの柱に着弾し、高い音を奏でた。

「分かった分かった。後は二人でどうぞご自由に」

マオは手を挙げてイラだったような仕草をしながらモノレールの中に消えた。

瞬間、シャーリーの体が崩れ落ちる。

「シャーリー！」

なんとか受け止めた彼女を抱き寄せる。彼女の瞳から涙が流れるのが分かった。

「ねえ…ルル…っ。私、人を殺しちゃった…」

「大丈夫、死んでないよ」

「それにルルのことも撃った…」

「俺はまだ死んでない！」

「お父さんを利用して優しくされようとした…っ」

「その何が悪いっ?!」

シャーリーの体を離し、目を見つめる。「大丈夫。君は俺を許してくれた。俺も…君を許すから…」

ルルーシュは心を決めた。

「だから…辛いことは俺が忘れさせてやるから…」

ルルーシュの瞳が赤く染まっていく。

シャーリーもそれに気づいたのかルルーシュの手を振りほどこうとした。

「ルル、ダメエー！ー！ー！！！！」

ナリタにおける戦闘で亡くなった人間を祀った慰霊碑の前にシャーリーは立っていた。

彼女が帰ろうと振り向くと見知らぬ黒髪の男の子が立っていた。

「あの…どうしたんですか？」

まるで生気のない表情の彼は今にも泣きそうなほど辟易しているようだった。

「あなたも…誰かを亡くしたんですか？」

そこで黒髪の彼が口を開いた。

「多分…とても大切な人を…。…自分が彼女の笑顔にどれだけ癒されていたか…。…どれだけ彼女が愛してくれていたとか…。…失ってみて分かることって…あるんですね…」

「好きだったんですね…その人のこと…」

彼は悲しそうな顔をして俯いていた。

「朝は…来ますよ」

「えっ…？」

彼は顔を上げてくれた。暗い夜空に流れ星が流れていく。

「どんなに辛くても、どんなに悲しくても必ず…朝は来るじゃないですか。私、さっきまで何しに來たか分からなかったけど、多分自分の中に区切りをつけたかったんだと思います」

黒髪の彼は薄い笑みで答えてくれた。少し懐かしい気がする。

まるで夜空に溶けてしまいそうな黒い髪。

「必ず朝は来ますか……。そうですね……。いつか……。きっと……。その時まで……。さようなら……」

「えっ？」

自分に言われたのかな？　そう思いながらも彼女は遠くなっていく
悲しそうな背中を見つめていた。

MEMOLY-14. 28 支配を憎み そして立つ (前書き)

エレナ視点。

少しの間にトーヤには休んでもらいます。

今日はスザクの提案で彼の職場、特殊派遣響動部（略称―特派）に赴くことになった。

今は校門の前でスザクを待っている。

「やあ、早いねエレナ」

スザクが手を挙げながら走ってくる。見慣れない橙色の服に身を包んでいた。

「おはよう、スザク。その服って特派の制服？」

「ああ、これ？ そうだよ。特派は軍とは人事権が切り離されてるから正規軍とは制服が違うんだけどね」

彼に質問すると自分の服をつまみながら説明してくれた。

「とりあえず僕の職場に案内するよ」

スザクは道を横切って歩き出す。と思っただけ止まった。

「ここだよ」

「はやっ！ ここって…」

目の前の建物を見上げてみる。

アッシュフォード学園のちょうど真向かいに位置するこの建物は大学のキャンパスだ。

「そう。大学だよ！ この中に部屋を借りて研究してるんだ」

スザクは大学の構内にズンズン歩いていく。ふと思いついた疑問を彼にぶつけてみる。

「そういえばトーヤには言ったの？ 特派に来て体を調べてみようって」

スザクは一瞬言おうか迷った素振りを見せたが話してくれた。

「トーヤにも話したんだけどね。軍には行きたくないって断られちゃって。それに…」

「それに？」

スザクがなぜか話したがろうとしない。なにかあったのかな？

「トーヤに何かあった？」

「……。うん。実は昨日トーヤに会ったんだけど……まるで生気のない顔をしていて声をかけられなかったんだ……」

トーヤはスザクの誰も傷つかない、死なない世界は甘いと考えていた。しかし甘いのは自分の方だったと彼は思い知ったのだ。すべてを守るほどの力もないのに守ってみせると自分の力を過信した罰。

「何があつたかは分からない……。でも気丈に振る舞っていた彼の境遇を考えるなら、心が耐えきれなくなったんだろうね……」 スザクは寂しそうな顔をした。

ミレイさんから聞いていた彼は特にトーヤとまだ会ってない副会長のルルーシュ・ランペルージ？と仲がいいらしい。

「やっぱりあなたはトーヤと仲がいいのね」

私の言葉にスザクは薄く笑みを浮かべた。でもどこか寂しそうな顔……。

「着いたよ」

スザクはこちらから顔を逸らし、扉を開けて中に入っていく。部屋の中には青い髪の女性がいた。

「あら、おはようスザクくん。そちらがあなたが言っていた……」

「エレナ・メイリンです。」

彼女が私の名前を思い出すのを待たずに自己紹介をした。

「よろしくエレナさん。私はセシル・クルーミーよ。今日の検診を担当させてもらうわ」

セシルと名乗った女性は人の良さそうな笑顔で迎えてくれた。見てるだけで幸せな気持ちになってくる感じ。

「あれ？ロイドさんはどうしたんですか？」

「採集データの解析をしているわ」

セシルさんは少し怒ったような困ったような顔をした。

「ロイドさんらしいですね」

スザクも苦笑している。

二人の会話からロイドとは研究熱心な人なんだと理解できた。

「すいません。早くやってちゃっちゃと終わらせちゃいませんか？」

二人の会話に入れそうもないので無理やり言葉を割り込ませた。

「ええ、そうね。スザクくん、廊下に出ててくれる？」

「え？なんですか？」

スザクは理由が分からないのかポカンとした表情でセシルさんのことを見ている。

確かにこういった所は鈍いんだね。

理由の分からないスザクに理由を教えてあげることにした。

「スザク。あなたは私の裸を見たいわけ？」

「へっ？」

スザクは変な声を上げた。

それでも状況が分からないようなのでちゃんと教えてあげる。

「だ・か・ら。今から私は検診のために服を脱ぐの！見せてもいいよ……」

「！！？」

スザクは私の言葉に反応して頬を赤く染めて行く。

『なっ？！そーゆーことは俺の前で言うな！！』

頭の中に懐かしいどこかで聞いたことのあるような声が聞こえてきた。誰よりも愛おしい人の声……。

「ご、ごめん！じゃ、じゃあまた！」

スザクの声に現実に取り戻されると彼は部屋から飛び出していった。

隣ではセシルさんが笑っている。

「スザクくんのこと分かっているわね」

そう言いながらも彼女はクスクス笑い続ける。

「ええ。鈍くて素直ってことは分かりました」

笑い続ける彼女に私も笑みで返した。

俺はシャーリーを失った。

だが死んだわけではない。彼女は俺の存在を忘れ、平和に暮らせるだろう。

前に進む決意。これはもはや揺るがぬものとなった。

しかし、問題が一つ増えた。

トーヤだ…。

「なあ、ゼロ。トーヤ、何かあったのか？あいつ…今までにないくらい落ち込んでる」

扇の言うとおり、トーヤの心が折れた。騎士団のアジトには来るが何もしない。ただボーっと虚空を見つづけている。

あいつは俺にも何も話してくれなかった。あいつの側にいてやれない自分が齒がゆい。

「ゼロ、水野と河井が呼んでるぜ」

ひょっこりと顔を出した玉城が部屋に入ってくる。

「分かった」

俺は立ち上がり、皆の集まっているラウンジに向かった。

「今日はみんなに話したいことがある…。トーヤ君と俺たちとの関係だ…」

ラウンジには抜け殻となったトーヤと彼に付き添うカレン以外の幹部が集まっていた。

水野は神妙な面もちで話し始める。

「俺たちとトーヤ君はみんなと初めて共闘したシンジユク事変の1ヶ月前に出会った。その時にキョウトからの監視役に俺たちが選ば

れたんだ…」

水野が淡々と語る内容は騎士団幹部なら皆が承知していることだった。

続けて河井が口を開いた。

「俺たちは…罪人だった…。大量殺人の罪で…殺されかけた…」

彼の言葉に一同が驚愕する。

普段の彼らは人当たりがよく、地味だが色々と気を回してくれる優しい人間だと皆が認識しているからだ。

「驚かせてすまない…だが…ここからは俺たちの昔話につきあってくれ…」

彼ら…水野と河井はもとから他を逸した実力の持ち主だった。キョウト内部においても1、2を争う腕前。

しかし、それが不運だった。

力に溺れた彼らは多くの人間を殺した。

ブリタニア軍との戦闘の中でもブリタニア人日本人関係なく…。

そしてとうとう彼らは桐原に咎められた。彼らの罪状は罪のない一般市民百余人の虐殺…。

罰として彼らは大切な家族を目の前で殺された。弟は拷問を受け、見るも無惨な姿になり、恋人は犯され、壊されて死んだ…。

目の前で大切な者たちをもっとも残酷な方法で殺されたのだ。

彼らは今でもその時の夢にさいなまれる。目の前でこちらに手を伸ばし『兄…さ…』と呟いた血まみれの弟…。悲鳴も出なくなるまで壊された大切な恋人…。

全員が死んだ時にはもはや二人の瞳からは涙も流れず、本物の生きる屍と化していた。

だが、死にたいとすら感じていた彼らに光が差した。

謎の少年トーヤだ。

彼が目の前に現れた時、彼らは光輝くトーヤの姿に目を奪われた。

背後から太陽の光を浴びる彼はまるで天使のように見えたらしい。

『生きる』

全てを失い、死にたいと願った心に小さな光が灯った。

『全てを失い、全てに捨てられても…生きる。生きることは難しい…。しかし、だからこそ生きていてほしいんだ…』

全てを失った彼らにその言葉はどれほどの救いとなり、どれほどの重しとなっただろう…。

うるさいと拒むこともできたはずなのに彼らは出来なかった。

『生きたい』

心の中でそう思ってしまったからだ。

彼らの話を聞き終わるとみんながただ黙って下を向いていた。

彼らのトーヤへの忠誠…そこにあるのは闇であつたからだ。

「俺たちはあの時のトーヤ君の笑顔を忘れられない…」

「彼がいなければ生きること忘れ、無惨に死んでいただろう…」
暗い過去。それをトーヤは彼らと共に背負ったのだ…。

後から拷問の様子も見ていたと聞いた。彼は始めから背負うつもりだったのだ。

「トーヤは…君たち二人の…未来を背負ったんだな…」

扇が口を開くも一言話すだけで精一杯だった。

「あいつは…だから潰れたんだ…。ゼロとしての迷いを背負い…、カレンの苦しみを背負い…そして…騎士団の皆の命を背負ったから…」

ゼロはやつと理解した。

自分が…自分たちが彼を追いつめていたのだと…。

自分たちのせいで彼の心は擦り切れてしまったのだと…。

「はい。これで検診は終わりよ」

「ありがとうございます」

礼を言いながらも服を着る。するとドアを開けて誰かが入ってきた。

「おい、ロイド伯爵はいないか？」

エレナは初めて見る顔に驚いた。

「あなたって…ナイトオブナインのノネット・エニアグラム！？本物?!」

エレナの反応を見てノネットは愉快そうに高い笑い声を上げた。

「はっはっはっは！そんなに驚くことでもないだろう。私がエリア11に赴任していることは公にされている。君だなあ…エレナというのは。ふむ…」

ノネットはこちらに視線を向け、私の体をゆっくりと眺め回した。

「なんというか…ロイドが一目惚れしてしまいそうな体だな」

女性になんと不躰なことを言うのだろう。彼女の言葉に不機嫌な顔を作ってみせる。

「はははっ！スマン、スマン。気を悪くするな、艶っぽい理由じゃない」

またもや彼女の言葉に顔をしかめてしまう。他にどんな理由があるのだろうか。

「お前の体は引き締まっついていてまるでモデルみたいだが、それは柔軟な筋肉があればこそだ。ロイドはすぐにでもナイトメアに乗せられるだろうな」

彼女はあっけらかんと言いつ切る。

そしてその会話を聞いていたのではないかというタイミングで白衣を着た明らかに変人らしい…一目でロイド博士だと分かる人が入ってきた。

「あれ？みんな、何してるの？そして君は誰？」

ロイドはこちらを向くと指を指して素性を聞いてくる。

「エレナ・メイリンです、ロイド博士」

営業スマイルで彼に挨拶すると呆けた顔で立ったままのロイドにセシルが少し怒ったように「昨日話したじゃないですか」と説明する。

「あれ〜？ そうだったっけ？ まあいいや。どれどれ、検診。終わってたんでしょ？ データを見せてよ」

ロイド博士は私の身体データが読み込まれたパソコンの画面に目を通す。

見ていく度に彼の顔がにやけていくのが不快だった。

「あはあ〜。これはこれは…。」

やがて目を通し終わったように彼は顔を上げた。

「君。うちのデヴァイサーにならない？」

楽しそうに目を輝かせる彼はいきなり理解不能なことを口にした。「ちょっと、ロイドさん！ 今日初めて会った人に何を言うんですか！」

「ねえ、君。確か記憶喪失なんだよね？」

起こり始めたセシルさんを見無視して彼はこちらに言葉を向けてきた。

てゆーか記憶喪失なの覚えてるんじゃない。

「なら今は時間があるんじゃない？ うちで働きなよ〜」

楽しそうに微笑むロイドを見かねてスザクに目をやると彼もセシルさんと同じく怒った目をしていた。

「ロイドさん！ 彼女は一般人です！ そんな危険なまねをさせるわけには…」

「やります。デヴァイサーですよね？」

私はスザクの言葉を遮り、デヴァイサーとなる旨を伝えた。

スザクは驚いた表情で私を見つめてきた。

「エレナ…っ！？ 何を言うんだ！？ 命の危険があるんだぞ！」

「あれ？ デヴァイサーって危険な仕事なの？ スザクはただの技術員

だと言ったじゃない」

「うっ…それは…」

スザクがみんなに危険な仕事をしていることを隠していたことは分かっていた。

「それに私は私の進む道を誰にも曲げさせない！ロイド博士。私はデヴァイサーとして働きます！」

すべては私の目的のために！

その後私の検診のデータの解析とともにロイド博士の提案でナイトメアのシミュレーターに乗った。

彼の提案にセシルさんとスザクは顔をしかめていたが、気づかない振りをした。

「お疲れ様、エレナさん」

シミュレーターから降りるとセシルさんが気遣うように近づいてきた。

「大丈夫ですよ、このくらい」

そう言うときセシルさんはスザクとロイド博士が見つめているモニターに目を向けた。

「あはあ。すごいよお。エレナくんのデータあ。ムフフフ…」

「エレナ、君はもしかしたらブリタニアの騎士だったのかもしれないね！」

ロイド博士は先ほどと同じように奇妙な笑い方をし、さっきまで怒っていたはずのスザクは楽しそうに笑っていた。

二人が見ていたモニターを見てみる。

「…915点…。いい方ですか？」

「きみいゝ、いい所じゃないよお。」

ロイド博士に聞いたのはバカだった。

セシルさんに聞いてみよう。

「普通は400点以上で適正ありと判断するのだけどね。あなたの点数は異常と言ってもいいくらいよね」

彼女は微笑みながら話してくる。

「コーネリア殿下の親衛隊でもこんな点数は出ないよ。僕の新しい作品のいいデヴァイサーだよ、君いゝ」

「新しい作品？」

ロイド博士の言葉に質問してみる。

「そう。もう何回かシミュレーターに乗ってて、僕はちょっと抜けるから」

そう言ってロイド博士は行ってしまった。

「奴は研究熱心な上に変人だからな、あまり気にするな」

ノネットさんは私を気遣ってか笑って話しかけてくる。

「気にしてませんよ。それよりもあなたって本当に強いんですか？

蒼の騎士に一度敗れたと聞きましたか？」

私の嫌みに近い言葉にも彼女は高笑いで答えてくれた。

「ああ、そうだ。やつは強い：が、まだナイトメアの性能に頼っている部分がある。私の専用機も明日到着する。そうすればやつにも引けはとらないさ」

彼女の目は強い光を放っている。獲物を狙っている目。

「専用機？」

「ああ、私の専用機——言うなれば準第七世代KMFルーカンだ。」

その後も私はシミュレーターに乗らせてもらい、一日の内に実戦にそくした一対複数の戦闘シミュレーションまでクリアした。

「すごいな。三機の無頼を27秒で」

スザクはやけに誉めてくるが、基準が分からないからすごいという実感が無い。

「これって本当にスゴいの？」

「ああ、スゴい。なんたって同じシミュレーターを私は22秒でクリアしたんだからな」

ノネットさんは笑いながらスゴいと褒めてくれるが

「ノネットさんの方が5秒も早いじゃないですか」

「ああ、ナイトオブ라운ズの私と比べても大差はない。お前はこれらの騎士よりもずっと腕がたつ」

なぜか彼女が誇らしそうに笑っている。それがおかしくてつい吹き出してしまった。

「はっはっはっは！お前はまだ若い。若い女は笑顔でいないとモテないぞ」

「それって今、関係ないじゃないですか」

でもなぜかこういう会話から彼女のスゴさが伝わってくる。

スザクもセシルさんも笑ってこちらを見ている。

―昔はいつもこうだった。私の周りには　　笑顔があって、それを守りたいと思っ　　てた。　　笑顔があって、そ

くすんだ銀髪あの人はいつも側にい　　てくれた。

この思いは届かなかったけど…

「おっまたせー！ウフフ。」

物思いにふけているとロイド博士が部屋に戻ってきた。

「ロイドさん？やけに嬉しそうですね？」

ロイド博士のハイテンションを不思議に思ったのか、スザクが口を開いた。

「当たり前だよ。僕は隣の部屋でモニターを見ながらレポート書

いてただけだよ。あ。この子お、やっぱり今作ってる僕の作品にピツタリなんだよ。」

ロイド博士は本当に嬉しそうだ。

「子どもみたいです。」

「フッフーン♪いっつもセシルくんに言われてるから慣れてるんだよ。」

この人には嫌みは通じなさそうだ。

「それじゃあ、僕とセシルくん今日のデータまとめちゃうから二人は今日は帰っていいよ。」

「ならば私も帰るか。今日は面白かったぞ、共に戦える時を楽しみにしている」

ノネットさんは手をヒラヒラさせながら部屋を出て行った。

「僕たちも帰ろうか。送っていくよ」

「スザク、それより行きたいところがあるの」

私はスザクを引っ張って人で賑わう繁華街を抜け、子どもたちの戯れる公園を抜け、ボロボロになったコンクリートが地面を埋め尽くすゲットーと呼ばれた廃墟の街にでた。

「君が来たかったのは…ここかい？」

「そう…ここから見える…」

租界とゲットーの狭間、キレイな道と荒れた道。そこに位置している少し小高い場所に登り、ゲットーを見渡す。

「なんなの？これ…」

「これが結果さ…。ブリタニアは間違った方法で…力で…日本という国を…自由を奪った…。僕はブリタニアを内から変えてみせる…。」

正しい方法…理解を得るという方法で！」

スザクはギョツと手を強く握り締めた。彼は今の状況を快しとせず、間違った国を変えていこうとしている…。

「こんなの…間違ってるよ…。みんな幸せじゃなきゃ…やだよ…」

力無く生きる人たちの姿。それは不幸せを形にしたもの…。

それは彼女の心に作用し、彼女の守りたいと思う信念に再び火を灯した。

夕日に赤く染まる廃墟の街…。

そこに正しい方法で世界を変えたいと思う少年と少女二人。

MEMOLOGY-14. 28 支配を憎み　そして立つ（後書き）

ノネットさんの専用機ルーカン。

円卓の騎士から名前をいただきました。

攻撃と防御のバランスを重視したKMFにしたいと考えています。

MVSは本当の槍みたいにしたいです。

何かアイディアあったらお願いします。

MEMOLY-15 蒼い空（前書き）

約一カ月ぶりの投稿です。

大学生活って辛いですね（涙）

飲みすぎたり、朝帰りで体調崩しちゃいました（焦）

この期間で読者が離れていないか心配です。

どうかよろしくお願いします。

大学の構内をアッシュフォード学園の女子生徒が颯爽と歩いていた。

青い空は凜と澄み、心地よい風が道行く人を包み込む晴れた昼下がり。

普段は大学生で賑わう構内も日曜日にはグラウンドに生徒がいるくらいで閑散としていた。

「やあ。もう来てたんだね」

歩いて行く少女に後ろから軍服を着た少年が声をかけた。

「あつ、ちょうどよかった。道に迷って困ってたの」

少女がためらいもなくそう口にすると少年は楽しそうな笑みを浮かべた。

「まあ。この大学、意外と広いからね。会えてよかったよ。早く行こっか。ロイドさんがまだ来ないのか、ってうるさいんだ」

少年はそう言いつつも楽しそうに笑っている。しかし、対照的に少女は少しつまらなそうな顔をしていた。

「やっぱりね。早く行きましょう。あの人は小言が始まると面倒くさそうだから」

「そうだね。こっちだよ」

少年は少女に行く方向を指示しながらゆっくりと木漏れ日の中を歩き出した。

研究室に着くと、ロイドがあまりにも分かりやすくソワソワと

していた。

「ちよっと、2人とも遅いんじゃないの？」

2人の姿に気がつくとか立ったように声を発した。

スザクはそれに動じることはなかった。「すいません、私が迷子になっちゃって…。」

エレナは申し訳なさそうにするわけでもなく言い切った。

「まあいいや。じゃあ早速シミュレーターに乗ってみて…：…痛い！」

突然ロイドが痛みを訴えた。2人が彼をよく見てみると耳をセシルが力一杯つまんで引っ張っていた。

「ロオイドオさああん」

セシルの表情は笑顔だが、コノ場にいる全員が今現在、彼女が怒っている最中なのを理解していた。

「フフフッ」

エレナは口元に手を当てて笑った。スザクも同様に笑っていた。

「ごめんなさいね、エレナさん。この人は他の人とは少し変わっているから」

なぜかセシルが申し訳なさそうに謝罪を始めた。原因はもちろんロイドであるのだが、当の本人は床に倒れている。

「いえ、もう分かってますから大丈夫ですよ。それに、私も早くやってみたいと思ってましたから」

「よし！じゃあ、早く始めちゃおう！」

さっきまで床に突っ伏していたはずのロイドは勢いよく起き上がってキビキビとシミュレーターの準備を始めた。

「まったく。この人は」

スザクは呆れたように笑った。つられてエレナの顔にも笑みが浮かんだ。

「よし、準備できたよ。ムフフ…：。ほらほら、早く乗って乗っ

て！」

ロイドはまるで好奇心旺盛な子供のようにはしゃぎ始めた。

「ちよっとロイドさん！落ち着いてください！」

セシルがなだめようとするが、彼は本質的におかしい人間なので耳を貸そうとはしない。

「セシルさん、放っとけばいいんじゃないですか？」

エレナもスザク同様呆れた顔をしていた。

「…まあ、そうね。じゃあ、エレナさん。コックピットを開けるから中に入って」

セシルに促されてエレナはシミュレーション用のコックピットの前に移動した。

セシルの操作によってコックピットが開き、彼女はその中に入っていた。

「それではシミュレーションを始めます。本日は実戦を想定した多人数による戦闘シミュレーションです」

通信からセシルさんの声が聞こえてくる。指示に耳を傾けながらも期待のチェックを始める。

「エレナくん。実はこのプログラム、倒しただけ敵が出てくるようになってるから、行けるところまで行ってみてよ」

ロイド博士の言葉を聞くと苦笑するしかなかった。まさか二回目のシミュレーションでそんなことをさせられるとは…。

「いきなり無茶させるんですね」

引きつる口元を動かしながら彼に嫌みったらしく言葉を返した。

「まあ、君なら大丈夫だよ」

…この人に嫌みは通じないんだった…。「敵編成、無頼3機。まもなく交戦距離に入ります！」

セシルさんの言葉でレーダーを見してみる。光点が3つこちらに近づいてくる。

深く息を吸いゆっくり吐き出す。

操縦桿を握り、現れた目の敵に意識を向けた。

青い空はどんよりとした色に映る。曇っていたり、暮れてきたわけではない：要は心の問題だ。

「ねえ…、気分はどう？」

隣にいるカレンが優しく話しかけてくる。彼女は様子がおかしい心配してくれてここ数日間、ずっと側にいてくれた。

「うん。大丈夫。君こそ大丈夫か？」

「何が？」

彼女に問いかけると分からないといった表情で聞き返してきた。

「いや、なんとなく：君が俺の側にいることで何か…。いや、なんでもない」

途中で何を言いたかったのか分からなくなり、言葉を切った。

公園では子どもたちが元気よく走り回っていた。

「いいわよ、無理しなくて…。私があなたの側にいたいと思った。

…ただそれだけよ」

カレンを見つめると彼女の頬が髪と同じ紅に染まっていて、そこに優しい笑みを浮かべていた。

「…カレン…」

そんな彼女を愛おしく想いながらも、すぐそばに置かれたその手を握ることすらできなかった。

（すまない……。もう…戦いたくないんだ…）

「後方に敵影：サザーランド5機?!」

私は未だに実戦シミュレーションを行っていた。ロイドさんはなかなかくせ者だ。シミュレーション二回目でかなり無茶をさせられている。

「左スタントンフア破損。左アーム機能停止。アサルトライフル残弾ゼロ、エナジーファイラー残量30パーセント。エレナさん、頑張るって」

「ハア：ハア：」

シミュレーションが終わったのはそれから敵を7機破壊してからだ。

「エレナ、お疲れ様。フフツ、相当きつかったみたいだね」

「ちよつと：笑わないでよ。これでも頑張ったんだから：」

スザクに笑われたことで彼女は不機嫌そうに頬を膨らませた。その様子を見てセシルも笑い始めた。

「フフフツ、あなたたちは仲がいいわね」

「よくないですよ」

再び不機嫌そうに頬を膨らませたエレナを見て、スザクはどうとう腹を抱えて笑い始めた。

「ちよつと……」

エレナはさらに不機嫌な顔をしたが、スザクが笑い止むことはない。

汗だくの彼女はセシルに助けを求めようと視線を向けるが、セシルもクスクス笑っていて、ただただ呆れるばかりだった。

「わざわざすまない。本当はこちらが送る側なのにな」

トーヤはカレンに送られて自分の生活する学園のクラブハウスまでやってきた。

「いいのよ。こんなあなたを放っておけるわけないもの」

カレン優しい笑み。今のトーヤにはそれが鋭い針のように胸を刺す。

「……っ…！あ、ああ、ありがとう…」

できるだけ優しく微笑み返そうとするもうまく笑顔を作ることができなかった。

「…あれ…？」

自分がうまく笑えないことにトーヤは今、気づいた。

「どうしたの？」

「…いやっ…！なんでもない…っ」

カレンに気づかれないように笑顔を作れない自分を隠した。

（なん…で…）

今までは普通に笑っていた。

カレンやルルーシュ、ナナリーやスザク、生徒会のみんな、クラスメート。

そういった近しい人の前ではいつも笑うように心がけていた。

いや、自然と笑えたのだ。

みんなという時は気づかないうちに頬が緩み、口角が上がり、腹から声を出して笑っていた。

なのに…

「ねえ…、あなたの部屋に寄っていい？」

「えっ…?! あっ、ああ、いいけど」

カレンの申し出を了承すると、トーヤに中に入るように促しながら

ら彼女はズンズンと階段を登り始めた。

「どうしたんだ、カレン？」

部屋に入るとカレンは部屋の鍵を閉めた。しかし、顔をあげずに俯いているため、どんな表情をしているか分からない。

「…今日はね…。あなたの本心を聞きたかったの…」

「えっ…？それはどういう…」

トーヤはカレンに問いかけようとして言葉を切った。彼女の手には重厚な雰囲気醸し出す金属の塊が握られていて、その切っ先が自分の心臓を向いていたからだ。

「なっ…！なにをする気だ…?!」

柄にもなくトーヤは取り乱した。自分が守りたいと思った大切な…、いや、彼にとって特別と言える女性が自分に刃を向けて立っているからだ。

「…トーヤ…、聞かせてよ…。どうして戦いたくないなんて言うの？理由によつては…」

ナイフを握るカレンの両手に力が入る。トーヤはカレンの行動に戸惑っていた。どうしてカレンが自分に刃を向けるのか…、しかしそれ以上にどうして彼女が涙を流しているのか、と。

「ねえ…、教えてよ…。トーヤ…！」

カレンの持つ刃の切っ先がトーヤにゆっくりと近づき始めた。

だが、彼は取り乱した様子から一変して優しく微笑んでいた。

そしてゆっくりと、しかし素早く彼女に近づいていた。

「あ…」

気づくとナイフは床に落ち、カレンはトーヤに抱きしめられていた。とても優しく、とても暖かく…。

「カレン…。俺は知ったんだ…。世界に抗おうとすると…人は死ぬ…。…本当に大切なものを守るためには…自ら戦場に出る必要

はないんだ…。シャーリーだって守れないなら…友達すら守れない俺には…」

カレンの背中にまわさせた両腕の圧力が無くなる。代わりにカレンは肩を掴まれていた。

「…俺には…何も守れはしない…」

トーヤの頬を一筋の雫が流れた。

しかしカレンはそれに気づかない。

彼女は座り込んでただただ涙を流していた。恐らく自分の無力さを悟ったのだろう。愛した人を勇気づけることすらできない自分を…。

その状態のままどれほど時間が流れただろう。一日千秋…。一秒が一時間にすら匹敵するようだった。

「ねえ…」

何時間経っただろう。実際には20分位だろうか。カレンが口を開いた。

「…じゃあ…、もう…あなたは…私を守ってくれないの？」

「……」

（違うよ…俺だって守りたいんだ…）

「あなたは…私を…見捨てるの…？」

「…っ…?!…違う…俺はっ…?!…」

「何が違うのよ?! あなたは私も生徒会のもんなも、騎士団のみんなだって見捨てるんでしょっ?!」

カレンは急に立ち上がり、怒鳴り始めた。トーヤはその勢いに押されてしまった。

「ま、待ってくれ!俺は…君を…」

「また守りたいって言うんでしょっ?!もう聞きあきたわよ!あなたがそんな口だけの男だなんて思わなかった!もう二度と私にも騎士団のみんなの前にも顔を見せないで!!……あなたなんて大っ嫌い…」

そう言ってカレンは部屋を飛び出して行った。

「…カレン…嘘だろ…？また…みんな…俺の側から離れてくのか…？俺は…また…：ぐうつ…！」

トーヤは自分以外誰もいなくなった部屋の中で激しい頭痛に襲われた。

『行け…み…：ろし…：ろ』

頭の中にイメージが浮かび上がってくる。人々が手に手に剣を振りかざし走っていく。

『待て…今…は…：！』

多くの人々を見下ろす形で銀髪の男が立っていた。彼の側にいた黒髪の美しい女性と女性と同じ黒髪の少女、茶髪の少女はいなくなっていた。

「ダメ…だ…：俺…を…：一人に…：しないで…：く…：れ…：」

トーヤは痛みの余りその場に倒れ込んでしまった。

「…頼む…：。思い出させないで…：くれ…：っ！」

彼は最後に悲痛な叫びを上げて気を失った。

すでに赤く染まった光が彼の姿をぼんやりと映し出していた。

カレンはクラブハウスの出口まで走り切ると、急に立ち止まった。

その場で後ろを振り向き来た道を見た。「あなたなんて…：嫌いよ…：」

涙で滲む目に強い光を宿しながら彼女は今日も日本を取り戻すために戦おうとする。

「さよなら…：トーヤ…：」

「今日はお疲れ様」

セシルは笑顔でエレナの労を労っていた。ロイドはデータのモニタリングを行い、スザクはそれを手伝っている。

「ウフフ♪面白いね、君のデータ。特にその回避率。君は弾を全てギリギリで回避する、つまりほとんど動いてないように見えるんだ。相手のナイトメアに人が乗ってたら亡霊みたいに見えるんじゃないかなあ？」

「亡霊：ですか…」

（確かに…私にはピッタリな名前だわ…） エレナは自嘲気味の笑みを浮かべていた。それに気づく者はこの場にはいなかった。

「そう。やっぱり、君になら安心して預けられそうだね」

「え？ いったい何をですか？」

「ウフフ♪見てのお楽しみだよ♪」

エレナは首を傾げ、スザクを見るが、スザクもなんのことか分からないようで、彼も不思議そうな表情をしていた。

嬉しそうにハシャぐロイドについて一同は格納庫へ向かった。

格納庫に到着すると白い布を被せられたKMFらしき物体がランスロットの隣に佇んでいた。

「ナイトメア？」

「そうだよ。セシルくん、布を外して」
「はい」

セシルが手元の機械を操作すると、布が外れ、蒼と白で塗装されたナイトメアが現れた。

「これは…ランスロットに…似てる…」

そう。色は全くランスロットとは違うのだが、その形状はランス

ロットに瓜二つだった。

「その通り。これはランスロットのデータをフィードバックして製作した、二機目の第七世代KMF―ランスロット・クラブ。通称はクラブ、君の専用機だよ」

「えっ？ 私の…専用機?!」

エレナは驚いていた。

理由は簡単。

（まさかこんなに早く専用機が手にはいるなんて…）

「じゃあ、武装の説明をするよ。まあ、まず性能に関してだけ予算の都合でランスロットほどサクラダイトは使えなかったから出力は落ちるけど、サザーランドを圧倒する性能だよ。それに君にはある癖があるみたいだね」

「クセ？」

「そう、君は多人数と戦うとき必ず1対1の状況を作ろうとする。だからランスロットと同じ『ヴァリス』を改造して長距離から狙撃できるようにしたからね」

「そう…なんですか」

エレナは再び驚いていた。ロイドとはまだ会って間もないのにもう自分のクセを見抜いている。

（外見に似合わずけっこう鋭いのね）

エレナはここでロイドとスザクは意外と似た者同士ではないかと思ひ、苦笑してしまった。

「よお！ みんな元気か？」

クラブの説明を受けていると突然入り口の方から声が聞こえてきた。

「これはこれはエニアグラム卿。今日はどうしたんですか？」

ロイドが出迎えると彼女の後ろからトラックがバックで格納庫に

入ってきた。

「まさか…ついたんですか？」

ロイドが恐る恐るノネットに聞くと、彼女はにと笑った。

「ああ、とうとう着いたぞ！私の専用機ルーカンがな！」

エレナはスザクと共に帰路についていた。赤い夕焼けに染まった空を見ながらエレナは歩いていった。

「上ばかり向いていると危ないよ」

スザクが彼女に注意するが、エレナは視線を下げようとしなない。

「ダメよ、下を向いたら空は見えないでしょ」

赤に染まった彼女の顔はスッキリしていた。隣を歩いているスザクも彼女に見入っていた。

「早く…明日にならないかな？」

「えっ？どうしてだい？」

エレナの一言は脈絡がなく、スザクはその意味が分からなかった。だって、明日になればまた…青い空が見えるじゃない」

ようやく意識を取り戻し立ち上がると、眩しい光に目を瞑る。

「朝…？」

トーヤは気を失って、そのまま眠ってしまったようだった。

「カレン…」

トーヤは昨日のことを思い出す。涙する彼女が最後に見せた強い光

…。その光はトーヤの胸に棘となって突き刺さっている。

「…カレン…、君は…逃がさない…。俺は…君がなんと言おうと…君を守ってみせる…」

トーヤは手を強く握り締め、立ち上がった。その目に小さな光を湛えて。

MEMOLY-16 never give up (前書き)

なんか良さそうなアイデアが浮かんだんで、投稿します！

でも自分で書いたのって自分では面白いとか分からないですよね。

そんなわけでどうぞ、お読みください。

『しっかり意識を保て！お前は…お前だけは…絶対に死なせない！』

荒野の真ん中で銀髪の男が茶髪の少女を抱きしめている。

『う…様…。ごめん…なさい…。あなたに…いただいた…い…ちを…無駄に…してしまっ…て…』

『喋るな！母や妹のようにお前まで…。絶対に…死なせない…っ！…L・L・L！どこだ…っ？！どこにいる…っ？！』

涙を流しながら叫ぶ男…。その叫びがどんどん遠くなっていった。

「今のは…夢…？か？あの男…誰かに…それに…あの少女は…」

トーヤは気がついた後、再び眠りについた。そしてまた不思議な夢をみたのだ。

「まさか…な」

前髪をかきあげてみる。目にかかっていた髪がなくなって視界がハッキリした。

「行くか…。また…失うわけにはいかない…」

トーヤは立ち上がると、弱々しい足取りで部屋を出て行った。

「なあ、トーヤのやついったいどうしちゃったんだ？」

騎士団のアジトで幹部たちがゼロ抜きでミーティングを開いていた。

議題として上げられたのはトーヤのことだった。

「分からない。騎士団にすら顔を見せないんだ。今どうしているかも分からない」

扇はそう言うとかレンを見た。

「カレン。何か知らないか？」

彼はもうここには来ませんよ、私たちを裏切ったんです」

「…なっ…、それはいったいどういうことなんだ?!」

辛辣な態度で話すカレンの口から発せられた言葉は信じられないものだった。

唯一反応できたのは扇だけ、他の者たちは言葉を失い、カレンを茫然と見ていた。

「ふっ…ふざけんなよカレン! あいつが…俺の戦友が敵に寝返ったとでも言うつもりかよ!!」

玉城が信じられないとかレンの言葉を否定する。しかし、カレンは表情を変えなかった。

「ブリタニアに寝返ったわけじゃないわ。でも、私はこの耳で聞いた。『戦いたくない』って言ってたのを!」

その時、扉が開いた音がした。

全員の注意がそちらを向くと、そこには仮面を被りマントを来た男がいた。

「トーヤ! いったい今まで何をしていたんだ?!」

「皆、すまない。迷惑をかけた。私は失ったものを取り戻す再び舞い戻った!」

「トーヤ? 何か…様子がおかしいぞ? いったいどうしたんだ?」

扇が声をかけると仮面を被った男はやれやれといった素振りですく首を振った。

「扇、お前は間違っているぞ。私はトーヤではない…ゼロの騎士シェイドだ!」

シェイドはマントを払い、自分はシェイドだと言い放った。

その言葉に幹部たちはただ黙るしかなかった。彼が正体を明かして

からずっと、トーヤと呼んできた。

皆、普段の彼ではないと容易に気づいていた。

「カレン…、私は逃げない。裏切りなどしない！私は私の掴む未来のために戦うのだからな！それはおそらく…君たち黒の騎士団と同じ道。道はまだ続いているのだ！」

シェイドはそう言うのと部屋から出て行った。残された者たちはただただ呆然とするしかなかった。

「蒼月はどうなっている？」

格納庫でシェイドは自分の愛機を探していた。

「奥の方でラクシャータさんたちの技術チームが整備してますよ」

「ありがとう」

シェイドが団員から聞いた方へ行くと蒼い塗装のナイトメアの周りに技術者がいるのが分かった。

「あら？久しぶりじゃない？」ラクシャータがシェイドに気づいて声をかけてきたが、その表情はすぐに怪訝そうなものに変わった。

「ちょっと…あんた…」

彼女の表情が変化した理由は簡単。アジトでトーヤが蒼の騎士の仮面をかぶることはなかったからだ。

「ああ…これか…。あまり気にするな。それより蒼月の整備は終わっているか？」

仮面の下表情を見ることはできないが、ラクシャータは感じていた。

いつもの彼とは何かが違うことを…。

シェイドの発する雰囲気为例えるなら氷のような冷たさ、と言えるだろう。

今のトーヤは何かがおかしかった。

「…まあ…、大体わね…。もう少し待っててよ、すぐに仕上げるから…」

「そうか…」

そう言うとシェイドは格納庫を出て行った。ラクシャータは頬を流れ落ちる汗を指先で拭いながら思った。

ただ『怖い』と…。

「準備は整ったか!？」

ノネットはせわしく動き回る兵士たちの真ん中で指示をとばしていた。

側には彼女の専用機ルーカンが佇んでいる。また、その隣にはランスロットとクラブが並んでいた。

「エニアグラム卿。黒の騎士団は本当に来るのでしょうか？」

セシルはKMFの整備をしながらも、ノネットに質問した。

ノネットはそれに対して力強く「絶対に来る」と答えた。

「しかし来るのは騎士団ではない」

「んん？それはどういうこと？」

ロイドはノネットの言葉の意味が分からずに聞き返した。

「来るのは蒼の騎士だ。騎士団のアジトに一人の密偵を送り込んだ。しかし、GPSを狂わせるジャミングがかかっていてな。位置情報を送らせるのは諦めさせて、蒼の騎士に情報をリークするように指示した。つまり、今から始めるカナガワゲットー壊滅作戦はエサというわけだ。これに関してはコーネリア総督からの許可をもらっているが、わざわざ人を殺す必要はないからな。作戦は実行しない」ノネットはニヤリと笑って腕を組んだ。

「つまりは…復讐戦ってことですか…？」

エレナは少し戸惑った様子でノネットに質問する。

「ああ、だから最初は1対1の真剣勝負を仕掛ける。…しかし…、

妙に殿下が心配されてな…。制限時間をつけられた。時間切れになったら全軍でかかり、蒼の騎士を殺害しろとのことだ」

ノネットはコーネリアの心配性に呆れたのか、頭をかいいた。

「制限時間…。それって…どのくらいですか…?」

「ん? ああ…。10分以内だそうだ」

ノネットはいてもたってもいられないという様子でソワソワし始めた。

すると一人の兵士が彼女のもとへ走ってきた。

「ナイトオブナイン様! 準備が整いました!」

兵士の報告を聞くとノネットは再びニヤリと笑い。自分のケータイのダイヤルを押した。

「さあ、張り切っていきましょうか!」

「シェイド! 大変です! ブ:ブリタニア軍が、カナガワゲットの壊滅作戦を始めました」

一人の団員がシェイドにそう報告する。

「そうか…。分かった。お前は他の者たちにもそれを伝えよ!」

「はっ!」

団員は走ってシェイドのもとから離れていった。その顔にはニヤリとした笑みが浮かんでいた。

(私が…やらねばならない!)

シェイドは急ぎ足で格納庫へ引き返した。蒼月のもとには作業を終えたと思われるラクシャータのチームがいた。

「ご苦労、コイツを持っていくぞ」

「えっ…? あんた…どこに行く気だい?」

ラクシャータの問いかけに答えは返ってこなかった。

シェイドは愛機を起動させ、単身出撃した。

「ちよっと…待ちな!」

ラクシャータの叫びも空しくシェイドの乗る蒼月は地下道の暗闇に消えてなくなった。

「くっ…! いったい何を考えてるのよ?! あんた! 急いで幹部連中にこのことを知らせて! 早く! ゼロには私が行く!」

「はっ…、はい!」

ラクシャータのチームの技術者は急いでラウンジへと走っていった。ラクシャータもゼロのもとへ向かおうとすると急に声をかけられた。「ラクシャータ? 何を焦ってるんだ?」

彼女が声の方向を見ると、水野と河井がいた。

「あんたら…。そうだ! 2人は急いでトーヤ君を追って! 今のあの子は何をするか分からない!」

ラクシャータの言葉を聞いて2人は顔を見合わせ強く頷いた。

「「任せてくれ」」

2人は自分たちの駆る無頼改乗り込み、トーヤの後を追った。

「何だって?! トーヤが単騎で出撃した?! いったいどうして?!」
扇は座っていた椅子から立ち上がった。報告していた技術者は威圧されて肩を縮ませた。

「は…、はい…! 理由は分かりませんが、突然機体に取り込んで…」
「トーヤ、いったいどうして?」

幹部たちが戸惑っている中、ドアを開いてカレンとゼロが入ってきた。

「原因はこいつだ」
ゼロの視線の先には顔をボコボコに腫らした男が、カレンに押さえつけられて俯いていた。

「こいつはトーヤにだけ偽情報を流した。ブリタニアの狙いはトーヤだ！全軍出撃！あいつを死なせてはならない！」

ゼロの指示がとぶと取り乱していた幹部たちは頷きあった。

「みんな、行くぞ！仲間を死なせるな！」

扇は幹部たちを先導して部屋から出て行った。

その場にはカレンとゼロだけが残された。

（トーヤ…、どうしてこんなことを…?! しかし…、今は考えてる場合ではない！友を…俺の『親友』を死なせるわけにはいかない！）

「カレン！行くぞ、我々…も…」

ゼロはカレンを促して出撃しようとして言葉を失った。

カレンは普段みせることのない涙をポロポロと流していた。

「ゼロ…。私は…彼に…ヒドいことを言ってしまった…」

カレンは俯き、表情を見せようとしないが、泣いていることは床に落ちた涙の後で明らかだった。

ゼロは何もできずに立ち尽くしていた。

「…どうしよう…。私のせいで…彼が死んだら…私…」

「カレン…」

ゼロはカレンに背を向け、部屋を出ようとする。

「まだ、あいつは死んでいない。ならば、やることがあるだろう」

カレンはハッとして顔を上げた。ゼロの言葉はまだ続く。

「君が本当に彼を愛しているなら…側にいてやるべきだ…。大切なモノはいつまでも掴んでおくべきだと私は思うが…? トーヤのおかげで我らはここにいる。私たちは…進まなければならぬんだ…」
カレンは再び俯いて手をギュッと握った。指の隙間から血がポタポタと落ち、床を朱に染めていく。

カレンは覚悟を決めたように顔を上げると、ゼロの横を通り格納庫に向けて走った。

（トーヤ…ごめんなさい…。いつも助けてくれた…、守ってくれたあなたの苦悩に気づけなくて…。私…あなたのことが好きだから…死なないでよ…）

カレンは溢れそうになる涙をグッとこらえて格納庫への通路を走った。

「どういことだ？」

シェイドは思わず呟いた。

報告されたカナガワゲッターについたのはいいが、ブリタニア軍による織滅作戦は行われていなかった。

代わりに見覚えのないKMFが一機いるだけだった。

「待っていたぞ、蒼の騎士」

「ん？この声は…ナイトオブナイン、ノネット・エニアグラム卿か。あなたがここにいるということは…再戦の申し込みかな？」

シェイドは顔に笑みを浮かべつつも、目の前の敵に意識を集中させつつあった。

「そうだ。ナリタの屈辱はここで返させてもらおう！」

ノネットは長柄の槍を思わせるMVSを抜き構えた。

「面白い…また、負かしてやろう」

シェイドも背中に装備された長斬刀とMVSを一本抜き、構えた。

「行くぞ！シェイドオ！」

「かかってこい！ノネット・エニアグラムウ！！」

こうして日本最強の騎士と帝国最強の十二騎士の戦端は開かれた。

「まさかだねえ…。あのエニアグラム卿が押されてるなんてねえ…」

ロイドは珍しく危惧するような言葉を発した。

モニターに映る激しい戦いは蒼の騎士が優勢に運んでいた。

ノネットは下がってライフルを撃つ、しかしシェイドは真っ直ぐに彼女に向かい剣を振り下ろす。

ノネットもそれを防ぐが間髪入れずに放たれたスラッシュハーケンによって右肩を損傷してしまう。

「もうすぐ10分経ちます。スザクさんとエレナさんはナイトメアに乗り込んで準備して」

「イエス・マイ・ロード！」

「イエス・マイ・ロード！」

スザクは意気揚々とランスロットに乗り込もうとする。

（蒼の騎士……。こんなやり方は間違っていると思う。でも、今日で僕たちの因縁を終わらせよう！）

しかしスザクと対称的にエレナは戸惑うような素振りを見せていた。
（人を殺す……。すみません、我が主。こんな時代でも私は……。また……）

その後、戦況はあまり動くことなく10分が経過した。

「10分が経過しました！ KMF部隊は全軍出撃してください！」

「ランスロット！」

「ランスロット・クラブ！」

「発進します！」

第七世代KMF二機が真っ先にシェイドに向かって突進する。

「くっ！ 新手かっ？！」

ノネットに向けて剣が降り下ろされようとした時、蒼月のリーダーに新たな光点が映し出された。

「5：10：30?! 兵を伏せていたのか?!」

シェイドが戸惑っている間にもランスロットとクラブはMVSを抜き蒼月に斬りかかった。

シェイドはそれを跳躍して回避すると、目視できたサザーランドにライフルを撃ち込む。二機を撃破するが、敵はゾロゾロと周囲を取り囲んでいた。

「罠：だと? しかし、こんな所で死んでやるほど私は甘くない!」
シェイドはランスロットたちを相手にするのは危険だと感じ、周囲のサザーランドの破壊を開始した。

「伝令! KMF部隊8割戦闘不能! サザーランド6機は距離を保ちつつ砲撃してください!」

シェイドの奮闘によりサザーランドを二十余機破壊することに成功した。

しかし、クラブやランスロットは無傷のまま。蒼月は損傷が酷く、脱出は困難だった。

「くっ…、このままでは…」

シェイドはサザーランドをさらに一機撃破。だが、その時静観していた。三機が動きを見せた。

ランスロットが二本のMVSを抜き斬りかかってくる。

それを防いでいるとノネットの槍が左から突き出されてくる。

それをギリギリで回避し、態勢を立て直した。だがその時、機体に衝撃が走った。

「ぐうっ…!」

クラブの遠距離の射撃により、左肩を破損した。
だが、ランスロットやルーカン は絶え間なく攻撃を繰り返してくる。

（マズい…っ。このままでは…っ!）

三機の連携をなんとかシェイドは回避するが、やはり数の差は大きくだんだん追い込まれていく。

「うああっ!!」

シェイドは思わず目を瞑った。

ルーカンのランスが蒼月の腹部に突き刺さった。

続いていつの間にか接近してきたクラブはMVSで蒼月の左腕を切り落とす。

シェイドはランスロットの斬撃をなんとか交わすも腹部に強烈な蹴りをくらい、吹き飛ばされてしまう。

シェイドはその衝撃で頭を打ち、意識が朦朧としてくる。

（俺は…ここで…終わるのか…？何も守れずに…自分の非力さに…気づきながら…。ああ、すまないルルーシュ…、もうクラブハウスには帰れそうにないよ…。ナナリー…折り紙を教える約束…破ってすまない…。ミレイさん…、すいません。お世話になりっぱなしで何もできなかった…。カレン…：君は俺が死んだら泣いてくれるだろうか…？俺は未だに君のことが好きだ…。君が俺に呪いの言葉を吐きかけようとも…ずっと…）

その時トーヤの瞳から涙が頬を伝い流れ落ちた。

彼は何かに気づいたように微笑むと涙を拭い、再び操縦桿を握った。

「そうだ…カレン…。せめて…君の夢の障害となるものを排除しよう…それが俺にできる最後のことだから…」

近くの壁にハーケンを打ち込み、機体を起こす。

ボロボロで片腕を失った蒼月…それで敵と対峙することは不可能である。

「でも…やらないきゃいけない…。俺の望んだ明日のためにも！」

ランスロットとルーカンが立ち上がった蒼月に向かい突進を始める。

（蒼の騎士…これは間違った道を歩んだ報いだ…）

スザクはMVSを振りかざし、斬りかかる。しかし、その剣は何かによって止められる。

「なっ…！」

同じようにルーカンの槍も止められていた。蒼月と二機の間は無頼が割り込み、廻転刃刀で攻撃を受け止めたのだ。

「大丈夫かい？ 蒼の騎士くん？」

「お前たち…なんで…」

トーヤの危機を救ったのは水野と河井だった。しかし、第四世代と第七世代…双方の差は大きく、いつまでも防げるわけではない。

「君は覚えているかな？ 俺たちを救ってくれた日のことを…」

「二人を…救った日？」

トーヤは記憶を遡る。

壁に鎖によってつながれた二人。

痛々しい傷がありながらも治療された跡もなく。虚ろな目をしていた。

その二人を助けなければいけないと思った。漠然とした考えで行ったことであった。しかし、2人はあまりにも忠実に仕えてくれた。まるで本当の兄のように思えた。とうとう助けたことは偶然ではなく必然だと思うようになった。

トーヤにとって大切な…とても大切な人となったから…。

「覚えている…。だが、今そんなことはいい！ 逃げろ！ 無頼ではこいつらに勝てない！」

しかし2人は動こうとはしない。

「おい！ 死にたいのかっ？！」

「トーヤくん、ありがとう…。俺たちは君のおかげで再び生を掴めた…。感謝してもしきれない…」

「おいっ！ なにを」

水野はそこで通信をオフにした。

河井も同様に通信を切った。

「おい、河井。ビビるなよ」

「ああ、俺を誰だと思ってるんだ？ お前こそビビるなよ」

2人は笑みを浮かべながら、敵の武器を弾き対峙する。

「行くぞお！」

2人はそれぞれの前にいる敵に斬りかかった。

「ほう。グラスゴーもどきで立ち向かってくるか……。だが！」

ルーカンはランスを振り、河合の無頼を腰から真つ二つに斬る。

「トーヤ君……。ありがとう……」

河合を乗せた無頼は脱出する間もなく爆散した。

「河合さん……。おい……。返事をしてくれ！なあ……。勝手に……。死ぬなよ……！」

トーヤは通信をオープンにして河合に問いかける。しかし、返事が返ってくることは二度となかった。

「河井がやられたか……。だが……。俺は簡単にやられはしない！」

水野はアクセルを踏み込みランスロットに斬りかかる。

MVSで受け止められるがすぐに剣を引き、再び斬りかかる。

「くっ……。なんだこの無頼？！普通じゃないっ！」

水野の猛攻にスザクも少しの間受け身にまわるしかなかった。

だが性能の差は大きく、すぐに立場は逆転した。

水野の駆る無頼はランスロットの蹴りをまともに受け、壁に叩きつけられてしまう。

「水野！」

トーヤは水野に近づこうとするがクラブの狙撃に阻まれ近づくことはできなかった。

「くそっ……。バカが……。俺のために死のうとするなよ……。河井……。家族みたいに思ってたのに……。どうして……。？でも、せめて水野だけは……。っ！」

「トーヤっ！」
意を決して救出に動こうとした時、通信から聞き慣れた声が聞こえた。

「まさか……。カレン……。っ？！来て……。くれたのか……」

「バカ！勝手に死のうとしないでよ！」

カレンの声は涙ぐんでいるような声だった。しかし今は……。

「みんな！水野を救出してくれ！あいつを死なせないでくれ！」

トーヤの叫びに答えたのはゼロだった。

「全軍、水野の援護にまわれ！カレンは少しの間向こうの二機を牽制しろ！」

全軍がゼロの指揮通りに動き出す。

ホッと一息つく。しかし、そんな安堵は一瞬で吹き飛んだ。

「トーヤ…君…。君は…生きてくれ…」

水野の無頼は再びランスロットの蹴りを喰らい、機能を停止した。

「全軍、撤退してください！敵の兵力はこちらの数倍、すでに囲まれつつあります！」

「むっ？仕方がない、蒼の騎士よ！決着は預けておくぞ！」

セシルの指示によりブリタニア軍が撤退を始めた。

トーヤはすでにボロボロとなりうまく動かない蒼月を降り、水野の無頼に近づいた。

「水野さんっ！返事をしてくれ！頼む…っ」

彼の悲痛な叫びを聞いたのか、無頼のコックピットが開き頭を強く打ち、血だらけになった水野が力なく転がり出てきた。

「トーヤ…君…」

「良かった…。まだ生きて…。早く医療班を！急いでくれ！」

「聞いて…くれ…。君は…俺に…命と…家族を…くれた…」

水野は唯一無傷の左腕を上げてトーヤの服を掴んだ。

「喋っちゃダメだ！頼む…っ、喋るな…っ！」

しかし水野はトーヤの訴えを聞き入れることなく、しゃべり続けた。

「君といた日々は…いい思い出だよ…。三人で笑って…たまに喧嘩して…でも…楽しかった…」

「水野さん…」

トーヤは目からこぼれ落ちる涙を止めることはできなかった。

それは水野をよく知る幹部たちも同じだった。

「…君は…何も諦めることはない…。君が行く道を…俺は…ずっと…見ている…か…ら…」

トーヤの服を掴んでいた手が力を失い、地面に落下した。

あたりには仲間の死を悲しむ声が溢れた。壁を殴りつけるもの、地面にへたり込む者。水野と河井は騎士団にとってかけがえのない一片のピース…。

それが失われた瞬間だった。

人々の悲しみを包むように雨が降り始めた。

トーヤは割れた仮面から見える目を空に向けた。

「トーヤ…」

泣きそうな顔をしたカレンがトーヤの隣に来た。お互いにお互いの手をさぐり合って握った…。

「河合さん…、水野さん…。見てくれ…、2人が…見たかった未来…掴んでみせるから…」

トーヤは叫んだ。

悲しみに従って。

そんな彼を止める者は誰もいなかった…。

MEMOLY—16. 13 乗り越えた 先（前書き）

何も言えない…。

とりあえず疲れた…。

MEMOLY—16. 13 乗り越えた 先

翌日―アッシュフォード学園ではいつものように学生たちがそれぞれの生活を送っていた。

昨日起こった出来事はニュースの端に登った程度で誰の記憶にも遺らず消えていた。

「おはよう」

柔らかな声を背中に浴び、振り向くとそこには紅い髪を揺らしてカレンが立っていた。

「やあ、おはよう」

彼女に立ち止まって挨拶する。

カレンはゆっくりと隣に来た。

ふと中庭の中央に目が留まる……。色鮮やかな青い羽を止め、一羽の蝶が縁にとまっていた。

「昨日のこと……、大丈夫……？」

心配そうな顔でカレンが声をかけてきた。しかしそう言った彼女の瞳も少し潤んでいた。

「ほら、ハンカチ」

彼女にポケットに入っていたハンカチを渡す。一瞬、驚いたような表情をしたが受け取ってくれた。

「……ごめんなさい。辛いのは……あなたの方なのに……」

目にハンカチをあてながら彼女は辛そうだった。

我慢しようとしているが、涙は止まらない。

「ほら、こっち」

カレンの手を引いて階段を登る。

ドアを開くと高いビルだらけの租界を見渡せる屋上に出た。
空に白い雲が一つ：浮いている。

「大丈夫か？」

「うん：トーヤは：強いね：」

「……そうでもないさ：」

悲しくないわけではない。

辛くないわけではない。

ただ、今は…。

「諦めるなって：言われたから：」

水野さんの最期の言葉を思い出すとなぜか少し笑えた。

「今までは：自分勝手なことばっか言ってさ。勝手なこととして：勝手に逃げたそうとした：。でも気づいたんだ。今はもう1人じゃないって：目覚めたばかりの時の様に孤独じゃないって：」

「……」

カレンは泣いているのだろうか、それとも俺の話を聴いてくれているのだろうか。確認はせずにただ空を見上げた。

白い雲は動かずにまだそこにいた…。

「今はミレイさんやルルーシュ、ナナリーにスザク、それ以外にもたくさん大切な人ができた：。こんな世界でも：確かにみんな笑って生きてる：。みんなを：君を守りたい：。君はまた嘘だって言うかもしれない。スザクは独善だと言うかもしれないけど：。でも、今の自分にとっては：それがなによりも：大切なことだから：」

カレンを見える…。

彼女は嗚咽を漏らしながら涙していた…。

「：嘘だなんて……言わないわよ……。もう：あなた：を：疑ったり：しないから：」

「大丈夫。あの時のことは気にしてないから。ほら、もう顔上げて彼女の頬に触れる…。

ゆっくり上げられた顔が急に近くなって唇に触れた。

一瞬気づかずに啞然としたがすぐに何があったか理解した。

思わず唇を抑える。今の自分はきつと顔が真っ赤になっているにちがいない。

そう思うほど一気に顔が熱くなった。

「ありがとう」カレンが目には涙を溜めながら笑った。

見とれていると彼女の腕が自分の首にまわされた…。

突然のことで体重を支えられずにしりもちをついてしまう…。

「ありがとう…」

カレンは先程よりもかなり小さい声でそう囁いた。

彼女の背中に腕をまわすとカレンはさらに体重をかけ、こちらに体を預けてくる…。

彼女の体は思っていたよりずっと軽く、そして華奢だった…。

「どういたしまして」

カレンを抱く腕にさらに力を込める…。

つと頬を涙が流れた…。

守るべきものはここにある…。

そう知っていると嘘をついていたのかもしれない…。

…でも、今度はきつと嘘ではないだろう…。

一人ではないと知ったから…。

気づくと日が真上に見えた。

ケータイで午前中の授業が終了していることを確認して立ち上がる。思えば今まで自分が1人だったことはなかった…。

桐原に会ってゲッターに来てから水野さんと河井さんはずっと一緒にいてくれた。いろんなことを教わった…。

無理やり酒を飲まされてつぶされたこともあったし、何日も戻らないと本当に心配してくれた…。

ただの仲間ではなく家族のように思っていたことを今になって思い知る。

でも今は前に進める…。

2人のおかげで…。

空に向かって大きく背伸びをすると、先程まであった白い雲はなくなっていた。

代わりに色鮮やかな青い羽の蝶がひらひらと空にとけ込むように飛んでいった…。

MEMOLYー17 囚われのナナリー（前書き）

久しぶりに更新します。

生活が忙しくなかなか更新できませんでした…。

これからもなにかと更新が遅くなることもありますが、よろしくお願ひします。

MEMORY—17 囚われのナナリ

エレナside

手が震えた…。

自分の記憶の中では人が死ぬのを見るのは初めてではなかったし、自分の手で人を殺したこともあったのに…。

「エレナ？」

「えっ…？ ああ、スザク…。どうかした？」

「いや、何か考え込んでるみたいだったからさ。この間のことかい？」

まいった。

スザクには全て見透かされていたようだ。考え込んでいるということとはやはり気になるのだろう。

心の中に重しを抱えていても仕方がない。

「…まあ…ね…。今回は私が手を下したわけではないけど…、人が死ぬのはやっぱりいい気分ではないわ…」

「そういうことは抱え込まない方がいいと思うよ。君はまだ軍に入ったばかりだ。無理はよくない」

先立って歩くスザクはそう言ってくれる。1人でもそんなことを言ってくれる人がいると思うと、気持ちも軽くなった。

「確かにそうね。ありがとう」

「どういたしまして」

生徒会室のドアを開きながらスザクがにつこり笑う。

彼の笑顔は私のことも元気にしてくれるみたいだ。

私も思わず笑顔になった。

トーヤside

「おはよう。目は覚めてるか？」

いつもよく聞く声で目が覚めた。朝の眩しい光が目には痛い。きっと外は昨日よりも暑い陽気に包まれているのだろう。

ベッドの中は気持ちのよい暖かさで起きあがるのがつらかった。

「トーヤさん。朝ご飯の準備はできてますよ。起きてください」
起きる気力が萎えかけた時にかわいらしい声が耳に届く。

ナナリーの少し怒ったような声にはさすがに逆らえない…。
ゆっくりと眠い体を起こした。

「おはよう…二人とも…」

眠い目をこすりながら朝の挨拶をする。窓の外に目をやるとやはり太陽がさんさんと紫外線を振りまいていた。

「まったく…のんきなやつだ。学校に遅刻するぞ」

ルルーシュに言われて時計に目をやると準備して学校に行くのに十分な時間があつた。

「まだこんな時間じゃないか…。起こすなよ…」

文句を言い終えると欠伸がでてしまい口を手で抑える。

「でも朝ご飯が冷めてしまします。早く起きてください」

笑いながら急かしてくるナナリーの言葉に負けベッドから体を出す。
眠気を抑えながら朝食をとるためにリビングへ向かった。

カレン side

今日は土日が終わり学園生活一週間の最初—つまりは月曜日。
普通学生だったらやる気が起きなかったりするものだが、私の足は

とても軽かった。：理由は簡単。

学園に来れば会える人がいるからだ。

「おはよう、カレン」

待ちこがれていた声に振り向く。

そこには銀色の髪の下に見える目を眠そうにこするトーヤがいた。

「おはよう。なんか：眠そうね」

「ああ：ルルーシュに無理やりたたき起こされた：。」

トーヤが後ろを指差す。

そこにはいつものように不敵な笑みを浮かべたルルーシュがいた。

「お前が起きないのが悪い。早く起きていれば朝食も冷めなかったのに」

ルルーシュはあきれたようにため息をついた。

本当に何を考えているか分からない奴：。

「おはよう、みんな」

スザクが校門の方から歩いてくる。

すると彼の後ろから土煙が見えた。

「ルルーシュー！！」

突然バイクの音が鳴り響く。

リヴァルが慌ててこちらに突っ込んでくる。

「はあはあ：。おい！会長がお見合いするって：」

「本当だ」

「んなあ！」

会話が終了するとリヴァルが頭を抱えてへたれこんでしまった。

「リヴァル、大丈夫だよ。僕も知らなかったから」

スザクが天然でリヴァルを励まそうとする。

しかし励ましになるはずがない：。

「そうだ。スザク、今夜空いてるか？」

「ん？どうしたのルルーシュ」

「いや、一緒に夕食でもどうかなっておもってき。お前がくればナナリーも喜ぶ」

「うん、大丈夫。今日は非番だからね」

「よし、じゃあナナリーに報せてくる！」

ルルーシュは元来た道を走り出した。

「ちょっと！授業に遅れるよ！」

「大丈夫！報せてくるだけだって！」

ルルーシュはスザクの言葉をスルーしてクラブハウスの方へ消えていった。

「親友の悩みはスルーかよ…」

リヴァルは空しくうなだれている。

「へっ…、きゃっ！」

突然目の前を影が通り、私の体に何かが倒れ込んできた。

「すー…すー…すー…」

「えっ？トーヤ…？」

「すー…すー…」

「ぐっすり寝てるみたいだね」

トーヤは私の体に寄りかかって眠っていた。

彼の髪の毛いに少しドキドキしてしまう。正直、ずっとこのままでもいいと思えた…。

「仕方ないね。カレン、僕が生徒会室まで運ぶよ」

「えっ？ええ！お願いスザク」

スザクはトーヤを背負うと歩き始める。

私も彼に着いて生徒会室へ向かった。

カレン part end
トーヤ part

目を開ける。

やけに部屋がうるさい。辺りを見回すとあることに気づく。

「あれ…？生徒会室…？」

「ようやく起きたわね」

「えっ…？カレン？なんで俺…生徒会室で…？」

みんなが文化祭に向けて準備を進めていた。

「あなた…話してた途中で突然寝始めたの。まったく…びっくりしたわよ」

「はは…そうだったのか…。すまないな、わざわざ運んでもらって」

「ふふ…お礼ならスザクに言って」

カレンはそう言ってアーサーの方へ歩いていく。

「そう言えば最近シャーリーとルルーシュ、おかしくない？」

唐突にリヴァルがそんなことを言い始めた。

「というか今まで眠っていたから話についていけないだけかもしれない。」

「え？そうかな？」

スザクはいつものように間の抜けた返答をする。

まあ、他人ごっこは…厳しい嘘だな…。

「どうせただの夫婦喧嘩よ、ねー」

カレンがアーサーに向かって話しかけている。

くそっ…！かわいいじゃないか…！

とカレンに見とれているといつの間にかミレイさんが隣に出現していた。

「なにになに…？そんな熱い視線で…。カレンに見とれてたのかな…？」

「なっ…！…ってか急に現れないでくださいよ！」

「ははっ！ごめんごめん」

ミレイさんが立ち上がる。

するとルルーシュが扉を開け、息を乱しながら入ってきた。

「ここにもいないか…」

「あっ！ルルーシュ、どうしたの？」

「ああ…スザク…。いや、なんでもない」

ルルーシュはそう言って部屋から飛び出していった。
明らかにルルーシュの様子がおかしい…。

「スザク！」

目でスザクに合図する。

彼もうなずいてくれたので二人でルルーシュを追いかけた。

「ルルーシュ！」

階段の踊場にいるルルーシュを発見し駆け寄る。

「お前ら！あつ…」

慌てたのかルルーシュはポケットから何かを落とした。

「なっ…！これはっ…！」

ルルーシュのポケットから落ちたもの…それはイスにロープで縛られたナナリーの写真だった。

「ルルーシュ…これは…」

スザクも俺同様に驚いている。

「ルルーシュ…。何があったか聞かせてくれないか？」

「そうか…分かった」

ルルーシュの慌てていた理由…それは

「ナナリーが誘拐されたから…か。軍や警察には？」

スザクが対処しようと提案するが、ルルーシュは首を横に振る。

「ダメだ…。これは…」

「君が皇族だとバレたのか？」

「ああ…だから！」

ルルーシュとナナリーが皇族だと知られると命を狙われる可能性がある…。

狙うのはブリタニアを憎む日本人か…それとも二人を捨てたブリタ

ニアという国か…。

どちらにしろ一つだけ分かったことがある…。

それは…

『嘘だろう？』

スザクが体育倉庫内を搜索し始めた時にふと小声で聞いてみた。

「えっ…？あ、ああ…。やったのはマオだ…。以前シャーリーに…
ク…ッ！」

ルルーシュはそこで言葉を切った。

前に聞いた話…。

シャーリーがマオと名乗るギアス能力者によって操られ、ルルーシュを殺そうとした…。

その一件はシャーリーの記憶をギアスで消したことで一応の終息を
みせたらしいが…。

「マオ…」

シャーリーの父親を殺したのは黒の騎士団…つまり俺たちだ。

しかし…！

傷ついたシャーリーの心を弄んだマオを…許すわけにはいかない！

「ルルーシュ…俺は別の場所を捜してくる…。何か分かったら連絡
してくれ」

「ああ、頼む」

ルルーシュに別れを告げ手分けして探すことにした。

「マオめ…」

ナナリー part

「どうしてこんなことをするのですか？」

水の流れ落ちる音が聞こえる。

多分ここは学園地下の水道施設。

私の目の前にいる男は…マオ。

「ん？自分で考えてみなよ」

「私をさらって…お兄様に何かする気なのですか!？」

「まあ、そうだね。あの泥棒猫に借りを作ったままにしておく訳にはいかないしね…。君にはルルを苦しめるための道具になってもらうよ」

「…っ!」

私が歩けたら…私の目が見えたら…。

ごめんなさい…お兄様…っ!

トーヤ part

「くそっ!」

いくら探し回ってもどこにもマオがいない!

落ち着け!

一度ゆっくり考え直すんだ、俺!

まず…マオは必ず500m以内にいる。

そして誘拐をしているのなら一目につかない場所にいるはずだ…。

しかし、学園の中はすべて…

「んっ!そうだ…ファイルの中にあった…」

前にミレイさんに頼まれたファイルの中にあった書類に地下の水道施設の記述があった。

もうあそこしかない!

「ルルーシュ、出てくれよ」

ルルーシュに電話をする。

2コール目で彼は出てくれた。

「ルルーシュ！ナナリーの居場所が分かった！地下の水道施設だ！」
『ああ！俺たちはもう向かっている！エレベーター前で落ち合おう！』

「了解！」

通話を切り、エレベーターに向けて走る。

「待っていてくれ、ナナリー……！」

エレベーターにたどり着くとちょうど反対側から2人が走ってきた。

「ルルーシュ！」

「ああ、早いくこう」

エレベーターの扉を開こうとするが開かない。

「パスワードを変更されている……」

「トーヤ、僕たちでドアを破壊しよう」

スザクの提案に頷いてドアを破壊しようすると難なく扉が開いていく。

「もう開いた」

ルルーシュがパスワードを解読し入力していた。

「時間がかからなくて助かるな」

できるだけの笑顔を2人に向けてエレベーターに乗り込む。

「さあ、早くナナリーを助けないと」

エレベーターが下降を始める。

それにしてもルルーシュの手際には驚いた。

「ルルーシュ」

突然スザクが口を開いた。

「何だ？」

「君はこの地下水道を利用して抜け出していたのかい？」

「ああ……何回かな……」

決戦の前のたわいのない会話……

エレベーターが止まり、扉が開く。

廊下の先には二機のセンサー式マシンガンが設置されていた。

「やはりな…さあ、どうするか…。あっ！おい！」

ルルーシュが考えを巡らせる前に俺とスザクは動いた。

2人で交差しながら走りマシンガンの反応を鈍らせ、近付いて蹴り壊す。

「この方が手っ取り早いだろ？」

冗談のつもりでスザクがルルーシュに言った。

「このバカ！ヘタすればお前たちは死んでいたんだぞ！」

「まあ、落ちて着けルルーシュ…。もうナナリーは目の前だ」

三人で一斉に奥へ走る。

カギのかかったドアをスザクと2人で蹴り破る。

扉の先には車椅子に縛られたナナリーがいた。

「ナナリー！」

ルルーシュが近寄ろうとするのを手で制する。

「待つんだ！上を見ろ！」

「なにっ？…あれはっ！？」

ルルーシュの視線の先には天井からロープに吊され、ゆっくりと振り子のように動く物体があった。

「爆弾だ…。ナナリーに近づくと恐らく…ドカンだ…」

「くっ！マオめ…！」

ルルーシュが悲痛な声を上げる中、スザクは動じていないようだった…。

「ルルーシュ、あの爆弾の仕組みは分かるか？」

「えっ？あ、ああ…。あれは配線を切れば止まるが…」

「なら、僕が…」

「バカを言うな！あの爆弾は一定のリズムで動いている！そのリズムを崩さずにラインを切るなんて…人間技じゃない…」

絶望的な事実を聞きながらもスザクはいたって冷静だった。

「ルルーシュ、僕が軍人であるという情報…。これを使えないか？」
スザクはすでに手にナイフを持っていた。

ルルーシュ part

マオは未だに人質をとった有利な状況にいる。

しかし、こちらの思考を読める500m以内に必ずいるはず。

地下にいないのなら…後は！

礼拝堂の扉を開ける。

教壇の所にマオはいた。

「やあ、ルルーシュ。ようやくおでましだね」

「無駄話はいい！ここで待っていたということは次のゲームを用意しているのだろう！？」

「そうだね。これがラストゲームだ」

マオは自分の背後に用意されたチェス盤を指差した。

「それじゃあルールの説明だ。チェスは正規のルールに従って行う。問題はこの天秤だよ」

マオは盤のすぐ横に用意された天秤に触れる。

「この天秤はいわばスイッチだ。互いにとったコマをそれぞれ皿に乗せていく。皿が君の方に向いたら爆弾は解除される。逆に僕の方に向いたら…分かるよね？」

「…！説明は十分だ…！さっさと始めるぞ！」

NO part

「ぐっ…！」

ルルーシュはマオの心を読むギアスの前に苦戦を強いられていた。一つ、また一つと黒の駒がとられていく。

「うまい！同時に7つのことを考えて混乱させる気だね！でもさ…」マオの手はまた一つ黒の駒を皿にのせる。針が今にもラインを超えそうになる。

「はっ…！」

ルルーシュは触れる針を見て一息つく。

しかしマオの攻撃はやまない。

「ほらほら、どうしたの？このままじゃナナリーが死んじゃうよ？早く次の手を考えなきゃ」

ルルーシュは駒を持つ手をウロウロさせている。

彼は明らかに動揺している。

「本当にそんな手でいいの？あっ！そうくるんだ。そっちだと取られちゃうよー」「あ…」

ルルーシュは放心状態で手の赴くまま駒を進めた。

もはや彼の心はここにはない。

それを楽しむかのようにマオはコインを床に落とした。

「はっ…！」

「おっと、ごめんごめん。さて、君はもう詰みだね」マオが駒を進めようとする。

「待て！」

「ん？何？もう終わりだよ」

ルルーシュは悲痛な表情を浮かべた。

「頼む…もう…許してくれ…。俺の負けだ…」

プライドの高い彼にとって他人に頭を下げるのは苦痛だった。大切なものを守るために彼は必死に自分の意識をつないでいただけかもしれない。

ふらふらになった足はもう地面を掴んではいなかった。

「あっははははは！ようやく君の心からの声を聞けたよ。でも…ダメだ」

マオの手から黒の駒が放り投げられる。それが皿にのった瞬間、モニターの針は振り切った。

「うああああああ！！ナナリー…」

礼拝堂の中にルルーシュの叫びとマオの高らかな笑い声が響き渡る。絶望と歓喜は混ざり合い、相反しながらも共に存在していた。

「さて、ナナリーの死んだ姿でも見るか。ん？」

マオはモニターを見て動きを止めた。

モニターには無傷でたたずむナナリーがいた。

「なぜだ！どうしてっ…」

マオが混乱する中、礼拝堂のステンドグラスが割れた。

スザクとトーヤが部屋に飛び込んだのだ。

「観念しろ！」

スザクがマオに向かっていく。

「くそっ！」

マオはスザクに向けて銃を放とうとする。しかし、彼の銃を握る手にガラスが鋭く突き刺さった。

「ぐあっ！」

「往生際が悪いな」

ガラスはトーヤの手から放たれていた。

怯んだ隙にスザクがマオを取り押さえる。

「スザク！？どうして？」

ルルーシュは不思議そうな顔をした。

「何を言っているんだ？悲鳴が聞こえたら飛び込めと君が言ったのだろう？」

ルルーシュはふとあることを思い出した。自分の中にある絶対遵守の力に…。

「（そうか！俺は…！）」

ルルーシュはケータイを鏡代わりに自分の目を見た。

「（やはりな！）マオ！お前は俺の作戦にハマった！観念するんだな」

そう！ルルーシュは気づいたのだ。

ギアスという絶対遵守の力によって自分の記憶を消すことによって罠を張ったことに。

「まさか：お前！自分にギアスを！？」

マオはスザクに押さえられながらも抵抗する。

「動くな。お前は治安を見出した罪により拘束する」

「離せよ！この父親殺しが！」

「えっ：？」

父親殺し？

マオはそう言ったのか？

突然のマオの言葉でスザクの様子がおかしくなる。

「父親を殺せば戦争は終わる？甘い甘い。周りの大人たちが必死でかばってくれてよかつねえ。じゃなきゃあ君は父親殺しの汚名を：」

「うああああああ！！！」

「スザク！」

マオはスザクの記憶を読み：過去の傷口をまた広げたのか。

「マオ！貴様は黙っているろー！！！」

「なっ！？しまった：！」

マオに向かって力を放つ。

許さない…。

シャーリーだけでなくナナリーやルルーシュ：、スザクまで傷付けたお前を！！

マオの頭をハイキックで蹴り飛ばす。

「があっ…！！」

マオを入り口側に吹き飛ばす。

ヤツはよろよろと立ち上がり外に逃げ出す：

しかし外には銃を手にしたC・C・が待っていた。

「……………！？」

マオは嬉しそうにC・C・に近づいていく。

「マオ：先にCの世界で待っている…」

「……………！！」

C・C・はマオの首筋を撃ち抜いた…。

その時扉が閉まった…。

「マオ：それがお前の罰だ…」

大切な人たちを傷つけたお前への…。

「スザク…」

ルルーシュがスザクを励ますように肩を貸す。

ナナリーは今頃、咲世子さんに縄を解いてもらったはずだ。

「ギアス：この力：初めて疎ましく思ったぞ…！！」

MEMOLY-18 思い出-1 (前書き)

すいません(ー・ー；)

しばらく間が空いてしまいました：

暑くて暑くてやってられなくなってきましたよ：

でも小説はなんとか書き終えましたので、安心です。

MEMOLY-18 思い出-1

トーヤ part

今日も生徒会室は賑やかだった。

いつものように何も変わらず、それでも確かに平和な日常。

「やっぱりさあ。行くなら温泉でしょ！一度エリア11の旅館って所に泊まってみたかったし。ねえ、トーヤ！あなたもそれでいいでしょう！？」

「構いませんよ！いいじゃないですか、温泉」

今の会話から分かるかもしれないがミレイさんたちは仕事をこちらに押しつけて旅行の計画をたてている。

最近の不安な情勢だからこそ、旅行に行って楽しみたいんだそうだ。「よーし！じゃあ、河口湖のほとりにいい温泉旅館があるから、そこに行きましょう！」

俺とルルーシュ以外のメンバーはミレイさんの開くパンフレットを見て、何か言っている。

そういえばさっきから隣で作業しているルルーシュがなぜか黙り込んでいる。

「どうした？ルルーシュ」

「ん？…ああ、いや…」

「なんか考え込んでたみたいだけど」

「旅行についてな…。旅行は長距離の移動になる…。ナナリーを連れていくのは難しいんじゃないかと思ってな…」
「なんだ。それで悩んだのか。」

「バカだな。ナナリーはそんなに弱くないって。一緒に行けるさ。」
「咲世子さんにも同行してもらえばいいし」

「まあ…な…」

肯定はしつつもルルーシュの表情は曇ったままだ。

「？まだ何かあるのか？って、わっ！」

いきなり後ろから衝撃を受ける。

しゃがみ続けたせいでしびれた足に踏ん張りがきかず倒れてしまった。

「何するんだよエレナ」

衝撃を加えたのはエレナだった。

イタズラっぽい笑みを浮かべてすぐ側にしゃかんでいた。

「この間のお返し。あなたに屋上に引っ張られてった時どれだけ怖かったか」

とすこし怒った顔で言った。

「それは君が変なことを言うからだろ？だいたいなんであんな…っ！」

エレナの手が目の前に伸びてきて額に痛みが走った。

「なんでデコピンなんだ？」

「別に意味はないよ」

そう言ってエレナは笑った。

その笑顔はどこか懐かしくて、とても大切なものである気がした。
あっ…マズい…。

カレンが怒ってる…。

「よーし！みんな！今週末は河口湖だあ！」

カレン part

というわけで河口湖に一泊二日の旅行に来た。
ミレイさんの行動力には驚かされっぱなしだ。

モラトリウムがどうかって言ってるけど、あのお祭り好きな性格は社会にでも変わらないんだろうな。

なんてことを考えていたらいきなり目の前にお菓子の袋が現れた。

「ほら、カレンも食べなよ」

「ありがとうシャーリー」

シャーリーが差し出してくれた袋からお菓子を一つ取り出す。

シャーリーの無邪気な笑顔が痛くて心の中で謝った。

大切な人を奪ってしまつてごめん…と。

「どうしたのカレン？」

「え？ううん、なんでもない。ありがとう」

生徒会のみんなという私とここにいるのだろうかと思う。本当にいいのかな？

教えてほしいけどその答えは誰も知らないだろうし、どちらかと言えば一緒にいてはみんなに迷惑をかけることになる可能性は高い。

どうしたらいいのかな？トーヤ：

トーヤ part

河口湖 湖岸―

アッシュフォード学園生徒会一行はようやく予定していた旅館に着いた。

すでに日は傾き、茜色の空がプラントに囲まれた白いフジに色を添えていた。

「夕食までは時間があるからそれまでは自由時間よ。時間に遅れないでね！」

ミレイさんは旅館の中に意気揚々と入って行った。「これが日本の旅館か…」

旅館を見上げてみると三階建ての木造建築の建物だが、見ているだけで圧倒させられるような荘厳さが漂っていた。

「何ボーつとしてるんだい？おいてかれるよ？」

スザクに肩をたたかれて我に返る。

「ああ。ごめん。日本の建築はスゴいな……。なんていうか……神聖な感じがする……」

「ああ……確かにこの旅館は神社に似てるからね」

「神社？」

聞き慣れない言葉に首を傾げる。

するとスザクは何か分かったように目を見開いて次に笑みを浮かべた。

「ふふっ、神社って言われても分かんないよね。明日の予定に日本の文化遺産を回るコースが入ってたはずだから、その時教えてあげるよ」

「おーい！おいてっちゃうわよー！」

スザクと話しているとミレイさんに呼ばれた。

「とりあえず行こっか」

「ああ」

スザクが急いで追いかけて行くのを横目にまた旅館を見上げた。

理由はなぜかこの建物や神社という言葉に懐かしさを覚えたからだった。

「ほら、早く行きましょう」

ポンッとカレンに背中を叩かれた。

「ああ。行こうか」

彼女に促されるまま旅館の中に足を踏み入れた。

「おわー！何これ！部屋広いじゃん！」

「大方、会長が広い部屋がいいっていったんじゃないか？」

部屋に入ると広々とした和室が迎えてくれた。

息を吸い込むと畳のいい匂いがした。

「へえ、なんだか和むな」

荷物を置いて男3人が座る。それでも広々としたスペースがある。

「とりあえず浴衣に着替えたら夕食だそうだ」

「あゝ、腹減ったあゝ。早く着替えて飯食おうぜ！」
ルルーシュとリヴァルが早速浴衣に着替え始める。

「浴衣か…。なんだか懐かしいな…」

ふとそんなことを口にした。だが自分の頭の中に一つ疑問が浮かび上がった。

（懐かしい…？この服が？なぜそう思った？俺はやはり…）

自分が日本人なのか。まだ分からない。そういえばラクシャータが血液検査をしてくれていたから、帰ったら聞いてみよう。

「おーい。早く行こうぜ」

「ああ、リヴァル。」

リヴァル達が急かすので俺は急いで部屋の外に出た。

「うわー…めっちゃくちゃうまそー」

夕食が用意されている間にトーヤ達生徒会男子メンバーが姿を現した。

リヴァルが真っ先に料理に駆け寄り感嘆の声を上げながら目をキラキラ光らせた。

「ふっふーん♪見たか！ミレイさんのセレクトした豪華海鮮てんこ盛りコース！」

ミレイがさも誇らしげに胸を張る。

トーヤとルルーシュは呆れたような顔をし、他の女性陣はいつものことながら苦笑いしている。

「ミレイさん、早く食べましょう。お腹空きましたよ」

「ええ、こんな美味しそうな食事を前にしたらお腹空いちゃった」
お腹を押さえながら笑うミレイにつられるようにトーヤのお腹が鳴

った。

「ああ、うまかったあ」

リヴァルが大きな伸びをしながら満足そうな笑顔を浮かべた。

「まさかミレイさんがここで一番高い懷石料理を予約してくれてなんて思わなかったけどね。さすが理事長の孫だよ」

トーヤも満足そうに笑っているのだが、ルルーシュ一人が浮かない顔をしていた。トーヤは部屋に戻るとリヴァルがトイレに行くのを見計らって話しかけた。

「どうしたルルーシュ」

「ん？ああ：実はさっきトイレに行った時だったんだがな：」

「で：？」

「玉城がいた：」

「玉城が！？なんで！？」

「いや、休暇を与えておいたんだが：まさかここに来るとは：」

「ハハハッ！やっぱりみんなもたまには息抜きしたいのさ、放つといてやろう」

「ああ：問題を起こさなければいいんだが：」

ルルーシュは彼らの存在を懸念しながら眠りについた。疲れていたようですでにグッスリねむっている。

「じゃあ俺は温泉にでも浸かってくるか」

トーヤは買ってあった入浴セットを持って温泉に向かった。

「はあ。いい湯だな」

温泉はちょうどいい温度で疲れが体から抜けていくようだった。

『トーヤ？いるの？』

女湯と男湯をさえぎる壁にもたれていると後ろからカレンの声がした。

「あれ？カレンも入ってたんだ」

『うん。ねえ、そっちはトーヤの他に誰がいる？』

「？いや、誰もいないけど…」

この深夜に温泉に入る人はなかなかいないようで誰もいない。

「じゃあ…」

カレンはそう言うと言ったと修理中の箇所からこちら側にまわってきた。

「って…カレン！なにやってんの！？」

「どうせ2人しかいないんだから混浴気分で…ね」

カレンは俺の側までやってくるといきなり右肩に頭もたれてきた。

「わっ！？カレン…」

「ごめんね、でも…あなたと2人でいたかったから…」

カレンは頬を紅くしながらも体を預けてくる。

お湯の中にある彼女の手をそっと握ってあげた。

「前にあなたは言ったよね。私を守ってくれるって…」

「ああ…」

「じゃあ、ずっと側にいてよ…。でないと、私…」

カレンが真剣な眼差しを向けてくる。

そう。俺にとってカレンは誰よりも大切な人…。きっと…こんな世界よりも…ずっと…。

「カレン…大好きだよ…」

「へっ！？」

カレンは驚いたように体を反応させた。

「だからずっと守ってあげる…ずっと側にいる…。君が泣かないように…君の夢を叶えてあげられるように…。だから泣かないで」
彼女の頬を伝った涙をそっと拭う。

「ありがとう…それにこれはうれし泣きなんだから許してよ…」

「ああ…今は泣いてもいいよ」

カレンの体を抱き寄せる。

「ようやく言えた：好きだって：」

「本当ね。ちゃんと好きって言ってくれなかったもの：」

カレンと甘い時間を過ごしていた時、隣の女湯の扉が開く音がした。

「誰か来たみたい。もう戻らなきゃ：ごめんね」

「ああ：早く行きな」

「うん：」

カレンはそそくさと女湯に戻っていった：と思ったら。

「ダメ！戻れない！」

「へっ？どうした？」

『あれ？カレンどこ行っただの？』

あれ？この声は：ミレイさん！？

マズい！！このままじゃ！！

「カレン、ごめん！！」

「へっ？ちよっ：」

「あら？トーヤ、こっちにカレン来なかった？」

「ミレイさん、男湯をのぞかないでくださいよ！カレンは来てませんよ、早く戻ってください！」

「うゝん、何か怪しいけど：ま、いいわ。それじゃね」

ミレイさんは手をヒラヒラさせて女湯に戻っていった。

「はあ、なんとかごまかせたな：ん？」

お湯の中で手を掴まれた。

「しまった！カレンが！」

「まったく：危なく死ぬ所だったわよ」

「ごめんって：ああでもしなきゃバレてたからさ：」

ミレイさんに見つからないようにカレンを水中に無理やり隠してし

まい今、怒られている。

あの後結局ミレイさんたちが出ていくまでの小一時間、俺たちはゆっくりと待った。

カレンと手をつなぎながら…。

「ちよつと…何考えてるのよ」

「えっ…？あつ、いや！何も考えてないって…」

「ふーん…私の裸を思い出してたんじゃないでしょうね？」

「い、いや！」

「何で声が裏返るのよ！」

なんてカレンに怒られながらもなんとか部屋までたどり着いた。

「じゃあ、お休み」

「ええ、また明日」

お互い笑顔で別れの挨拶を交わし眠りについた。

思ひ出は時に残酷になる

別れが二人を分かつときに…

「っあー！よく寝たー」

リヴァルの勢いよく上げた声で目が覚めた。まだ眠たかったが彼に肩を揺すられて仕方なく起き上がった。

「ふああ…おはようリヴァル。ルルーシュは？」

「今部屋のシャワーを浴びてる。もうすぐ朝飯だぞ。早く着替えとけて」

「ああ、分かった」

まだ気だるい体を無理やり起こして枕元にたたんであった浴衣に袖を通して食堂に向かう。

朝食は和食らしく白米に味噌汁、鮭の切り身などが並んだ。

みんなとのバカ話を終えて部屋に帰ってくるとルルーシュとナナリーがどこかへ出かけようとしていた。

「2人ともどこ行くんだ？」

「あら、トーヤさん」

ナナリーが見えない目を向けてくる。

花のような笑顔に微笑みで返す。

「せっかく自然の多い所へ来たんだ。気晴らしに散歩でもと思ってな」

さすがシスコンだ。

そんなことを考えながらも一緒に行くことにした。

「俺も行くよ。スザクも呼んでくるから少し待っててくれ」

河口湖畔は一周でもなかなかの距離はある。時間をつぶすにはちょうどよさそうだった。

昼食は各自でということだったので咲世子さんが作ってくれたサンドイッチも持って出かけた。

途中ちようどよさそうな木陰を見つけたためそこで昼食をとることにした。

「おいしそうだね」

スザクが明るい声を上げてサンドイッチを手にとる。

「ナナリーは何が食べたい？」

「えっと…エッグサンドはありますか？」

「あるよ。ほら」

スザクはナナリーに卵を挟んだサンドイッチを渡す。

ナナリーは嬉しそうに笑った。

「ありがとうございます！」

「たまにはこういうのもいいな」

ルルーシュが突然そんなことを言い始めた。感傷に浸るタイプではないのだが、心を許せる人間だけだからそういうこともあるのだろう。

「ああ：静かだな」

辺りを見渡すと人もいない。

四人だけの世界。

「なんだか小さい頃を思い出しますね…。アリエスの庭でみんなと一緒にピクニックをしたこと…」

「ナナリー…」

ナナリーはそう言って少し暗い顔になる。アリエスの庭がどんな所か彼らがどのように過ごしていたかなどを俺は知らない。何も知らない…

「また：一緒にお茶を飲む日が：来ますよね？」

無理をして笑うナナリーは痛々しかった。でもその強さが二人をこうして生かしてくれている。

「いつか：2人が：いや、誰でも人並みに生きていくことができる世界にしてみせるよ」

スザクはできる限り優しくナナリーに微笑みかけた。ナナリーもそれに応えて口元を緩める。

「（でも：今のままでいいのか：？ 黒の騎士団の抵抗は軍に勝利はするものの多くの犠牲を払い続けている…その犠牲に見合うだけの平和は…）：っ！？」

突然頭に痛みを覚えた。

思わず頭を押さえるが、構わず頭痛と共にイメージが流れ込んでくる。

『な、なんだこれは！？』

拙い映像の中で一人の男が腕に誰かを抱えながらうずくまっていた…。

（赤い髪…いや、あれは……血！？抱えているのは、女性か？死んでいる…？これは戦場！？）

映像の中の地面にはいくつもの血溜まりができていた。遙か彼方まで続く朱に染まった大地と動くことのない人間。その時男が顔をあげた。

「（！？…な、…あ…れは…俺？）」

雨に打たれながら天を仰ぐ男の顔はまさに自分の顔だった。

「（なんで…？まさか…俺の…過去？）」

その時今度は女性が映像の中に現れた。

茶髪の長い髪を揺らし手に剣を携え、ゆっくりと男の背後に近づいてくる。

「（エレナ！？どうして彼女が…）」

女はゆっくりとしたモーションで剣を振り上げた。

「（止める…やめろおおおお！！！！）」

「大丈夫か？頭でも痛むのか？」

「えっ？あつ、いや…なんでもないよ」

ルルーシュに肩を叩かれて現実に戻された。

「（エレナ、彼女はいたい？）ごめん、ちょっと旅館に戻るよ」

なぜか今、彼女に会わなければならない気がした。

急いで元来た道を駆けた。

「見つけたぞ！」

「へ？」

平和そうな顔をして廊下を歩いていたエレナを見つけて強引に腕を掴んだ。

「えっ？ ちょっ…！」

無理やり旅館の裏庭に連れ出す。

「ちよつと！ 痛いじゃない！ 何…よ…」

エレナはトーヤの顔を見た瞬間言葉を失った。

「まさか…あなた」

「聞かせてもらおうか…君と俺の過去との関係を…」

エレナの目の前にいたのはもはやトーヤではない…。

今、『狂王』が目覚めようとしていた。

MEMORY—19 思い出—2

「あら？ トーヤは一緒じゃなかったの？」

ルルーシュたちが宿に帰るとミレイが玄関で仁王立ちで待っていた。

「トーヤはまだ戻っていないんですか？」

ルルーシュは質問に質問で聞き返した。しかし、彼女は質問しているのは知らないからであるためミレイに伝えることはできない。

「んゝ：エレナもないのよね。悪いんだけどみんなで探してきてくれない？ 私は他の人と先に場所を確保しに行こうと思っていたのよ」

ミレイは申し訳なさそうなわけでも内容でいつものスマイルを浮かべていた。

「で？ 何？」

宿の裏。広い旅館の裏庭には日が傾きかけた今も二人以外の人影は見えず、夕陽が二人を真っ赤に染めていた。

「教えてほしい。君と俺の失われた過去との関係を」

トーヤが素晴らしい終わるとエレナは一瞬驚いた表情をしたがすぐに笑顔で覆い隠した。

「…何のこと？ 私とあなたはアッシュフォードで初めて出会った。それに私だって記憶喪失なのよ。覚えてるはずないじゃない…」

「何を焦っている？」

「なっ…」

エレナは表面上は表情を変えなかったが、トーヤは彼女の心の中の焦りを読みとっていた。

「話したくないのか、または話せないのか……。どちらでもいい……。答えは……自分で掴む。」

トーヤは目に手を当てていた。今まで怖くて使えなかった力……。手を目元から離すとトーヤの両目に翹が浮かび上がった。

「さあ、すべて話してもらおうか！」

その声はエレナの耳に確かに届いた。……届いたはずだったのだが……。

「やっぱりか……」

エレナの瞳が赤くひかることはなかった。エレナは一つ大きなため息をついた。

「その力……一人に一回……だったね……。その力にいつ気付いたの？」

「俺を拘束していた軍の研究施設から逃げ出した時だ」

「そっか……」

エレナは少し寂しそうな表情をしていた。

「じゃあ、……2つだけ教えてあげる……。あなたの名前は……」

エレナは間を置くとうつむいたまま言葉を発した。

「ライエルト・ウル……ブリタニア……」

「なっ……」

今度はトーヤが焦る番だった。エレナが自分の過去を知っていた、これはすでに確信に変わっていたのにその確信すら揺らいだ。ライエルト・ウル・ブリタニア【狂王】と呼ばれた100年以上前のブリタニアの王。現在のブリタニアの国是たる？弱肉強食？を作り出した血も涙もない男……。歴史上【狂王】は自分に逆らう人間は容赦なく殺害した残虐な男で北から攻めてきた蛮族から国を守ろうとしてすべてを失い死んだ。

「ライエルト・ウル・ブリタニア……それが……俺……？」

呆然と立ち尽くすしかない？トーヤ？にエレナは話を続けた。

「もう一つ……私はあなたに二つの感情を抱いてる……。憎悪と愛情を……！」

そう言ったエレナは泣きそうな顔で？トーヤ？の中に眠る【狂王】をにらみつけた。

「何でよ…なんでみんなを殺したのよ…？ライ！答えてよ！」

エレナは悲痛な叫びをあげて？トーヤ？の胸を叩いた。

それから少しの間トーヤは彼女の自分のの中に眠る【狂王】に向けられた叫びをただ聞くしかなかった。

エレナは落ち着くとゆっくり顔を上げた。

「記憶：取り戻そうとしないで…。私はあなたが好きだった…。今のあなたのことだって…。でも…あなたが【狂王】の記憶を取り戻したなら、きっと私は自分の中の憎しみを抑えられないから…。安心して！今のあなたがカレンのことが好きなのは知ってる。邪魔はしないから…」

エレナのキレイな瞳が切なく揺れる。

「おい！見つけたぞ！」

後ろからかけられた声に振り向くとルルーシュが立っていた。

「会長が花火見に行くとき」

慌ててエレナが体を離す。

トーヤは今聞かされた真実に驚愕していたが、不安を表情に出さずにルルーシュを見据えた。

「搜したぞ…みんな玄関に集まっている。早く来いよ」

ルルーシュはそう言い残すとすぐに行ってしまった。

トーヤとエレナの間に流れる気まずい空気を敏感に感じ取ったようだ。

トーヤは再びエレナを見た。

なんとなく頬が赤くなっているようだ。

「ごめんなさい…。みつともない所を見せちゃって…。でも、信じられないかもしれないけどさっきの話は真実…。あなたはあの【狂王】なのよ。これ以上思い出しちゃダメよ…。あなたが苦しむことになるから…」

エレナの表情は真剣そのものだった。

彼女が嘘をついているとトーヤは思えなかった。

「分かった…君の言葉を信じるよ。俺が過去の記憶を持たないとい

うこともあるけど、君が嘘をついているとは思えないしそれに…取り戻した記憶の中には君がいた」

「え…まさかあなた…記憶を…！？」

「ああ、少しだが…」

それ以降エレナは言葉を発しなかった…。

まるでなにか不吉なことが起こることを予感するように…

「ほら、こっち！カレンと探しててちょうどいい場所見つけたの！」
シャーリーが元氣よく走ってきた。

後ろからカレンがゆったりとした動作で歩み寄ってきた。

女性陣は皆着物に着替えていてそれぞれ文句なくキレイに着飾っていた。

男性陣もシャーリーの案内で彼女たちについて行ったがその中で1人トーヤだけが浮かない表情をしていた…。
ルルーシュだけがそのことに気づいていた。

「どうした浮かない顔をして。エレナとなにかあったのか？」

「いや…なんでもない！」

トーヤは無理に元氣なフリをした。しかし、トーヤの心は迷いと不安でいっぱいだった。ルルーシュもそれに気づいてか励ますように言った。

「ほら、カレンを見てみる。綺麗じゃないか。シャーリーから聞いたがお前のために3時間もかけて準備していたらしい。彼女の期待に応えてやるのもお前の役目じゃないのか？」

ルルーシュの言葉にトーヤはほほえんだ。

「ありがとう…励まそうとしてくれたんだろう？」

トーヤはいたずらっぽく笑った。

「なっ…！お前のためではない！ただカレンがずっとお前を見ているからいじらしかっただけだ！」

ルルーシュは恥ずかしかったのか頬を赤くしていた。

「ふふっ、君も人を信じれるようになったんだ…。ルルーシュがそんなセリフ言ったの初めて聞いたよ。」

「ふっ…確かに…そうかもな」

二人は最後尾を歩きながら笑いあっていた。トーヤの表情が少し柔らかくなったように見えた。

「なかなかいい場所じゃないか」

ルルーシュはシャーリーの隣りで小高い丘の上から山を見渡した。

トーヤはカレンに近づいていく。

「カレン」

トーヤが声をかけるとカレンは待ち望んでいたように満面の笑みを浮かべた。

「何？」

「いや、なんでも」

トーヤはカレンの隣りに立ち辺りを見渡した。

「綺麗だな」

「ええ、本当ね。空気も澄んで気持ちいい」

「うん。君も綺麗だよ。ありがとう俺のために頑張ってくれたんだってね」

「ちよっと！ルルーシュに聞いたのね…。シャーリーに話さないでって言ったのに…」

カレンは赤くなりながらそっぽを向いた。

「もう。やっと気づいてくれた…。まったく、いつ来るかって待ちわびたわよ」

「ごめんね」

トーヤは花火の上がる方向に目を向けてつぶやいた。

「ううん。ありがとう…」

トーヤとカレンはそつと手を取り合った。

その動きをエレナは切ない表情で見っていた。

「お！花火が上がったぜ！」

リヴァルが山の方向を指さした。

ドドォーンという音と共に色鮮やかな火花が散った。

トーヤはこの空に咲く美しい花々を見て何を感じているのだろうか？

彼は愛する人の隣で何を考えているのだろうか。

切ない表情の中に覗く二つの瞳は悲しげだった。

MEMORY-19 思い出-2 (後書き)

なんか自分でストーリーがわかんなくなってきたようです（へ。へ；
）

恥ずかしながら投稿します。

感想意見待ってます！

これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4055r/>

コードギアス BLUE OF THE KNIGHT

2011年8月24日15時53分発行